

浜町遺跡



2000年 3月

序 文

本報告書は、西田橋移設復元事業に伴って、鹿児島県教育委員会が平成8年度・9年度に発掘調査した浜町遺跡の埋蔵文化財調査報告書です。

平成5年8月6日、鹿児島市を中心に襲った未曾有の集中豪雨は、大洪水となって市街地を流れる甲突川の氾濫を引き起こし、市街地の約12,000戸にもおよぶ家屋の流出や浸水の影響を与え、尊い命の犠牲や道路の決壊など甚大な災害をもたらしました。また、甲突川五石橋と呼ばれる新上橋と武之橋を含む甲突川に架かる15の橋梁の流失とともに、水道や交通網などのライフラインにも多大の影響を与えました。

鹿児島県は、甲突川激甚災害対策特別事業で抜本的な甲突川河川改修を計画しました。この事業の一環として、県指定有形文化財の西田橋は、鹿児島市浜町に移設復元することとなり、県教育委員会が移設地の浜町遺跡を発掘調査することになりました。

調査の結果、藩政時代鹿児島城下の区割りの様子や陶磁器・木製品など多数の遺物が出土し、天保年間鹿児島城下絵図等の文献資料と考古学的手法による実見と考証の比較など、貴重な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査及び整理作業については、鹿児島県土木部都市計画課、県鹿児島土木事務所、県文化財保護審議会、西田橋解体調査委員会をはじめ、各分野の専門の方々、始良町在住の作業員の方々、諸関係機関の皆様に御指導と御協力を賜り、感謝の意を表します。

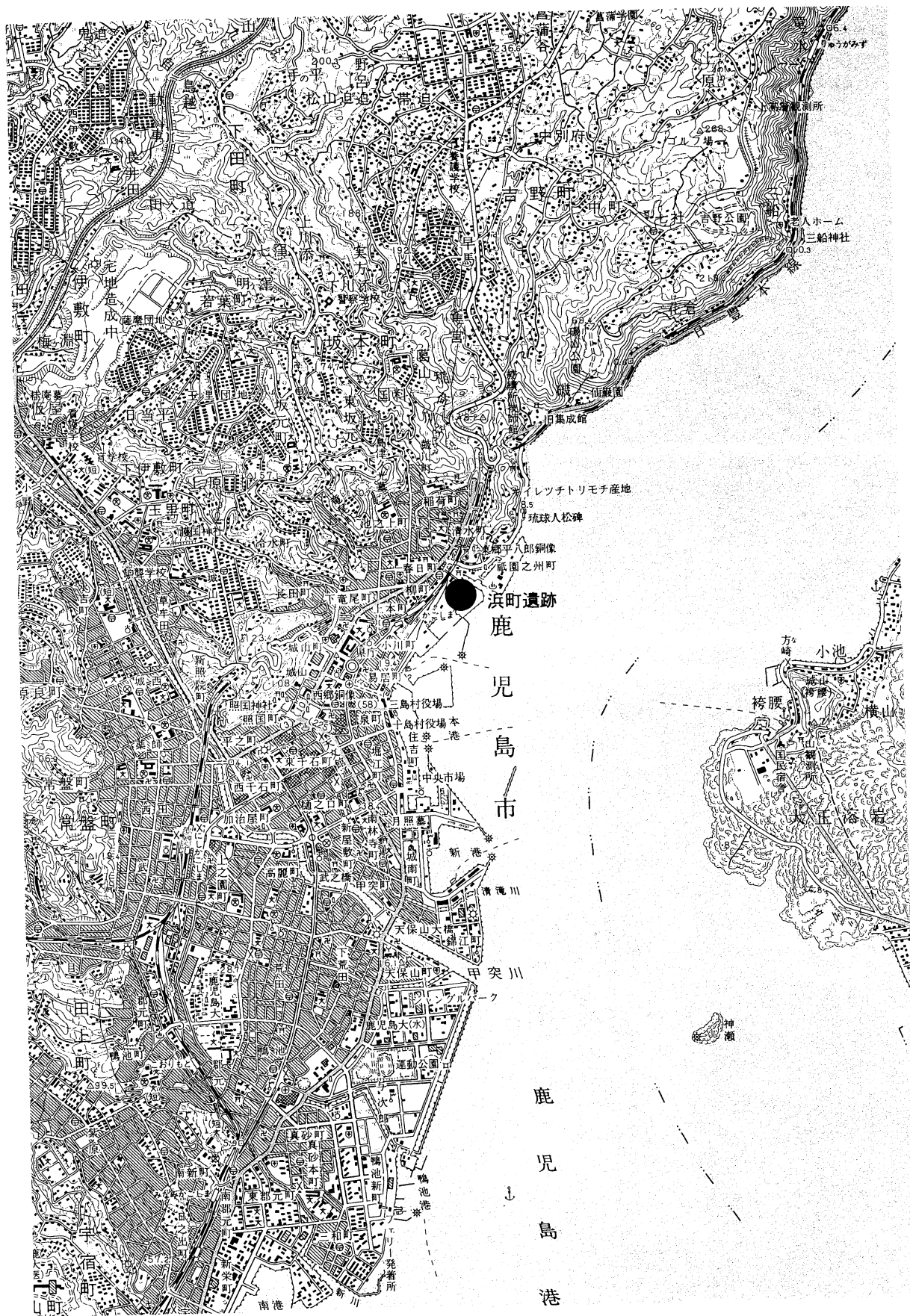
平成12年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 吉 永 和 人

報告書抄録

ふりがな 書名	はままち 浜町遺跡							
副書名	西田橋移設整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	25							
編著者名	青崎和憲							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 始良郡始良町平松6252番地 TEL 0995-65-8787							
発行年月日	西暦2000年, 3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査起因
		市町村	遺跡番号					
はままち 浜町	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 はままち 浜町	46208	210	31° 36` 34`	130° 34` 22`	1996. 12. 9~1997. 3. 17 1997. 6. 2 ~6. 25	10, 000	西田橋移設 整備事業に 伴う埋蔵文 化財発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
浜町		江戸時代	<ul style="list-style-type: none"> ・天保年間鹿児島城下絵図の区画(抱真院, 神明宮, 島津山城殿下屋敷) ・建物跡, 井戸 ・埋め立て 胴木列, 石列 		<ul style="list-style-type: none"> 江戸時代 陶磁器類 木製品(木簡, 下駄等) 			



付図1

例 言

1. 本報告書は、西田橋移設整備事業発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県土木部からの委託事業として県立埋蔵文化財センターが、第1次平成8年12月9日～平成9年3月17日、第2次平成9年6月2日～同年6月25日の間、実施した。
3. 遺物番号は通し番号とし、本文及び挿図・図版番号と一致する。
4. 挿図の縮尺は、各図毎に示している。
5. 報告書作成にあたっては、実測、トレース、写真などについては、埋蔵文化財センター職員及び整理作業員の協力を得た。編集は青崎が行った。
6. 執筆は第I章・III章・IV章は青崎和憲が第II章は上床真が担当した。

目 次

序 文	
例 言	
報告書抄録	
付 函	
第 I 章 調査に至る	1
第 1 節 西田橋移設復元及び調査に至る経緯	1
第 2 節 石橋移設地の特性	2
第 3 節 試掘調査・本調査の調査組織	3
第 II 章 遺跡の位置と環境	6
第 III 章 調査概要	10
第 1 節 調査の概要	10
第 2 節 層 位	13
第 3 節 遺 構	14
1 抱真院跡	14
2 神明宮跡	14
3 猪飼中央御借地	14
4 布堀り遺構	15
5 島津山城殿下屋敷跡	15
6 洞木・石列遺構	15
7 敷石遺構 I・II	15
8 上水道施設 I・II	16
9 船着場	16
10 暗渠	16
11 落ち込み遺構 I・II	17
12 丸井戸	17
第 4 節 出土遺物	29
1 磁器	29
2 陶器	31
3 外国製陶磁器	33
4 焙烙	34
5 木製品、竹製品他	34
6 石製品	37
7 その他	38
第 IV 章 まとめ	96

挿 図 目 次

第1図	その1 浜町遺跡と周辺遺跡 …	7	第26図	陶器1 ……………	52
	その2 浜町周辺の変遷 ………	8	第27図	陶器2 ……………	53
第2図	古絵図 ……………	10	第28図	陶器3 ……………	54
第3図	土層図 ……………	13	第29図	陶器4 ……………	55
第4図	遺構配置図 ……………	18・19	第30図	陶器5 ……………	56
第5図	抱真院跡 ……………	20	第31図	陶器6 ……………	57
第6図	抱真院・神明宮境緑石列と埋め 立て遺構（胴木・石列） ………	21	第32図	陶器7 ……………	58
第7図	神明宮塀跡 ……………	22	第33図	外国産陶器 ……………	59
第8図	布堀遺構（猪飼中央御借地と島津 山城殿下屋敷跡境界） ………	23	第34図	焙 烙 ……………	60
第9図	建物跡（重富島津山城殿下屋敷跡布基礎）…	24	第35図	木製品（椀，杯，櫛，引手） ……	61
第10図	角井戸 ……………	25	第36図	木製品 ……………	62
第11図	船着場実測図 ……………	26	第37図	木製品 ……………	63
第12図	上水道施設と敷石遺構 ……………	27	第38図	木製品 ……………	64
第13図	近代丸井戸 ……………	28	第39図	木製品（刷毛，篋，その他） ……	65
第14図	磁器1 ……………	40	第40図	木製品，竹製品 ……………	66
第15図	磁器2 ……………	41	第41図	木製品，竹製品，帚 ……………	67
第16図	磁器3 ……………	42	第42図	木製品（下駄）1 ……………	68
第17図	磁器4 ……………	43	第43図	木製品（下駄）2 ……………	69
第18図	磁器5 ……………	44	第44図	木製品（下駄）3 ……………	70
第19図	磁器6 ……………	45	第45図	木 簡1 ……………	71
第20図	磁器7 ……………	46	第46図	木 簡2 ……………	72
第21図	磁器8 ……………	47	第47図	石製品1 ……………	73
第22図	磁器9 ……………	48	第48図	石製品2 ……………	74
第23図	磁器10 ……………	49	第49図	瓦 ……………	75
第24図	磁器11 ……………	50	第50図	円盤状加工品 ……………	76
第25図	磁器12 ……………	51	第51図	石像物等 ……………	77
			第52図	簪 等 ……………	78

資 料 目 次

資料1～2 ……………	12
-------------	----

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	6	第8表	出土遺物観察表(木製品・下駄)	90
第2表	出土遺物観察表(磁器その1)	79	第9表	出土遺物観察表(木簡)	90
第3表	出土遺物観察表(陶器その1)	82	第10表	出土遺物観察表(硯)	91
第4表	出土遺物観察表(外国産陶磁器)	86	第11表	出土遺物観察表(砥石・紡錘車)	92
第5表	出土遺物観察表(焙烙)	87	第12表	出土遺物観察表(瓦)	92
第6表	出土遺物観察表(木製品・漆器碗)	87	第13表	出土遺物観察表(土製品・メソコ等)	93
第7表	出土遺物観察表(木製品・竹製品他)	88			

図 版 目 次

図版1	古写真(多賀山公園から遺跡地臨む)	101	図版18	陶器(皿, 仏飯器等)	118
図版2	遺跡全景, 調査前抱真院跡	102	図版19	陶器(灯明皿, 燭台)	119
図版3	抱真院跡縁石, 抱真院柱穴列, 島津山城殿境箱堀り状遺構, 建物跡	103	図版20	陶器(爛徳利, 仏花瓶等)	120
図版4	角井戸, 船着場	104	図版21	陶器(蓋, 急須等)	121
図版5	敷石遺構A, Bおよび上水道施設遺物出土状況	105	図版22	陶器(播鉢等)	122
図版6	埋立て遺構で検出状況(胴木列, 石列), 遺物出土状況	106	図版23	陶器(甕等)	123
図版7	埋立て遺構地検出状況, 暗渠	107	図版24	外国産陶磁器	124
図版8	丸井戸検出状況, 調査風景	108	図版25	焙烙	125
図版9	磁器(碗)	109	図版26	木製品(漆器碗, 櫛等)	126
図版10	磁器(碗, 皿)	110	図版27	木製品(柄鏡箱, 丸盆等)	127
図版11	磁器(皿)	111	図版28	木製品(番傘の頭, 扇子等)	128
図版12	磁器(皿)	112	図版29	木製品, 下駄	129
図版13	磁器(皿, 猪口, 酒杯)	113	図版30	下駄	130
図版14	磁器(鉢)	114	図版31	木簡	131
図版15	磁器(猪口, 酒杯, 皿)	115	図版32	木簡	132
図版16	磁器(段重, 蓋, 仏飯器)	116	図版33	木簡	133
図版17	陶器(碗, 猪口, 皿)	117	図版34	硯, 砥石, 紡錘車	134
			図版35	瓦	135
			図版36	土製品(メソコ等)	136
			図版37	古銭等	137
			図版38	銘を有する出土品	138

第Ⅰ章 調査に至る経過

第1節 西田橋移設復元及び調査に至る経緯

平成5年夏、8月6日の鹿児島市を中心に襲った集中豪雨は、市街地を流れる甲突川の氾濫を引き起こし、未曾有の大洪水は市街地の約12,000戸にも及ぶ家屋の流出や浸水をはじめ道路の決壊など、甚大な災害をもたらした。さらに甲突川五石橋と呼ばれる新上橋と武之橋を含む甲突川に架かる15にも及ぶ橋梁が流失し、水道や交通網などのライフラインにも甚大な損害をもたらした。

このため、鹿児島県は同年甲突川河川激甚災害対策特別事業を国から受け、甲突川河道掘削を中心とした抜本的な河川改修事業を5か年間で行うことを決定した。なお、河川改修事業は流失から免れた甲突川五石橋のうち玉江橋・西田橋・高麗橋の3橋が含まれることから、鹿児島県土木部は、当改修事業を推し進めるにあたって文化遺産である石橋の取り扱いについて、県教育委員会、鹿児島市及び鹿児島市教育委員会と協議を重ねた結果、それら3橋は移設して復元することとなった。このこと踏まえ、県土木部は「甲突川石橋移設復元地選定委員会」を設け、基本的な考え方や移設地候補地のリストアップなどを検討した。その後、石橋解体復元については、県土木部都市計画課を事業主体として、県内外の有識者からなる「西田橋解体復元調査委員会」を設置し、現状調査方法・解体工法・復元工法・文化財の保存活用などについて検討した。

なお、3橋の石橋解体復元事業は、玉江橋と高麗橋は石橋の管理者である鹿児島市が、西田橋は鹿児島県がそれぞれ事業主体となった。

鹿児島県は西田橋解工事に先立ち、西田橋は県指定有形文化財(昭和28年9月27日指定)として指定されている。平成7年5月31日、指定文化財現状変更許可の申請が県知事から県教育委員会へなされた。県教育委員会では、県文化財保護審議会へ諮問し、慎重な審議を重ね、その答申を受けて平成7年12月5日付け鹿児島県文化財保護条例第13条第1項に基づき現状変更の許可がなされた。

これを受けて県土木部は「解体工事仕様書」を基に事業を実施することとなった。なお、西田橋解体工事に関わる文化財管理や連絡・調整及び発掘調査については、県教育委員会文化課(現文化財課)が、調査・施工監督は(財)文化財保存技術協会が、施工管理は(株)協和コンサルタントが、解体工事は(株)小牧建設がそれぞれ担当し、西田橋移設復元執行体制が組織された。

移設復元の全体スケジュールは、平成8年1月から2月中旬にかけて仮設道路設置及び橋梁アーチ解体に伴う支保工組立に始まり、第1期は本格的な解体工事を中心に平成8年2月20日～5月31日まで橋の上部調査・解体を主とした仮設工、第2期は梅雨期を挟んで平成8年10月～12月まで橋の基礎部や反力石の調査・解体を主体とすることとした。なお、第1期の内容は橋梁の試掘調査及びアスファルト舗装の除去、水切石調査解体、高欄調査解体、橋面敷石調査解体、壁石、中詰土調査解体、アーチ石、袴石調査解体、アーチ基礎部、敷石等の保護工で、第2期の内容は川底部分の調査解体である。なお、埋蔵文化財に関わる調査は、橋梁の解体スケジュールに沿って、橋面の試掘調査等の試掘調査をし、西田橋解体に伴う埋蔵文化財の全面発掘調査は、橋の右岸側取付け部分を同年7月27日～8月6日の間、左岸側を8月7日～9月2日にかけて発掘実施した。

また、この間、西田橋移設復元地(鹿児島市浜町一鹿児島駅隣接の旧国鉄官舎跡及び営林署跡地)の試掘調査を平成8年6月10日～27日にかけて実施した。

調査の結果、藩政期の遺構、遺物が発見された。そのため、県土木部都市計画課はその取り扱いについて、県教育庁文化財課と協議した結果、移設復元事業着手前に平成8年度・平成9年度の2次にわたって全面発掘調査を行うこととし、発掘調査は県立埋蔵文化財センターが実施した。

第2節 石橋移設地の特性

(1) 石橋移設地選定の経緯

県土木部は「甲突川石橋移設復元地選定委員会」を設置して、玉江橋、西田橋、高麗橋の3橋の移設地の選定について検討した。

選定に当たった考え方は、

- ① 石橋を末永く後世に残していくためには、災害に遭う危険性の少ない、安全な場所でなければならない。
- ② 移設復元地は、石橋の歴史的・文化的価値が活かされ、石橋にふさわしい周辺の整備がなされるような場所が望ましい。
- ③ 橋の活かし方も考慮に入れて、親水性のある場所に移設復元することが望ましい。
- ④ 移設復元地は、地理的に市民・県民の誰もが訪れやすく観光客にも親しまれるような場所が望ましく、また、移設復元について、地元住民に歓迎される場所であることが望ましい。
- ⑤ 岩永三五郎にゆかりのある場所が望ましい。

というものであり、平成6年11月24日に2つの案の提言がなされた。その後、県・市において検討するとともに、選定委員の了承も得て、平成7年2月13日、提言の理念を生かして次の通りとすることが知事、市長から発表された。

祇園之洲地区は、岩永三五郎ときわめて縁が深く、稲荷川が流れ、前面には桜島を望む景勝の地であり、周辺には磯地区や多賀山公園など歴史的遺産も多い。また、JR鹿児島駅や本港地区からのアプローチが容易であることなどから、ここに3橋を一体的に整備する。

西田橋→営林署跡地等、高麗橋→祇園之洲公園、玉江橋→同公園横水路

(2) 移設地の持つ歴史

- ・ 祇園之洲公園；天保8(1837)年頃、稲荷川改修に伴う竣深土砂で造成
(市指定史跡) 安政5(1858)年、藩主斉彬が砲台を築造
文久3(1863)年、薩英戦争により砲台が壊滅
明治10(1877)年、西南の役官軍基地の造営
- ・ 営林署跡地等；元禄14(1701)年、藩主綱貴が前浜の埋立に着手
(浜町地内) 今回発掘調査により、天保年間鹿児島城下絵図の屋敷割跡を確認
(島津山城殿家下屋敷、神明宮、抱真院等)
- ・ 稲 荷 川；岩永三五郎が鹿児島の河川に初めて石橋築造(永安橋；1842頃)
平成2(1990)年、三五郎顕彰の石像を祇園之洲公園に建立
(県都市計画課資料)

第3節 試掘調査・本調査，調査組織

1 平成7年度 試掘調査（平成8年6月10日～17日）

西田橋移設地である鹿児島市浜町（JR鹿児島駅官舎跡地、鹿児島営林署跡地）は、天保年間鹿児島城下絵図によると「島津山城殿下屋敷」、「抱真院」、「神明宮」等、藩政時の町並みや掘割が記載されていることから、対象面積1,5haについて平成8年6月10日～17日にかけて試掘調査を実施した。調査の結果、遺物包含層は近現代の構築物等によって攪乱を受けており、特に、鹿児島駅側の東南部は遺構等も確認できなかった。遺構としては、建物に関わるピットや縁石列、敷石遺構等の他、陶磁器類が出土した。遺跡残存面積は約1haである。

調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	立藺多賀生
	々	補佐	今別府修一
調査企画	々	主任文化財主事	吉永 和人
	々	主任文化財主事兼指定文化財係長	大平 義行
	々	主任文化財主事兼埋蔵文化財係長	戸崎 勝洋
調査者	々	埋蔵文化財係文化財主事	青崎 和憲
	々	埋蔵文化財係文化財主事	堂込 秀人

2 平成8年度 1次発掘調査（平成8年12月9日～平成9年3月17日）

事業主体	鹿児島県	知事	須賀 龍郎
調査主体	鹿児島県教育委員会	教育長	有馬 学
調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所長	吉元 正幸
	々	次長	尾崎 進
事務担当	々	主査	前屋敷裕徳
調査企画	県教育庁文化財課(兼)埋蔵文化財センター	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	県立埋蔵文化財センター	課長補佐	新東 晃一
調査者	県教育庁文化財課(兼)埋蔵文化財センター	文化財主事	青崎 和憲
	県立埋蔵文化財センター	文化財主事	長野 真一

〈日誌抄〉

12/9～13 9日調査開始。12日都市計画課来跡。確認調査の結果約1万㎡が本調査の対象となる。昨年の確認調査の結果に基づいて、まず調査区北側日豊本線沿いの抱真院跡の地点から調査を開始した。

12/16～20 抱真院跡に5間×4間以上の建物基礎の根固めが検出された。17日所長来跡。

12/22～26 旧国鉄排水溝暗渠検出作業。

1/7～11 敷石遺構検出作業。井戸検出。7日所長，南日本新聞記者，都市計画課来跡。

1/13～17 神明社と推定されるピット列検出作業。13日次長 前屋敷賃金支払い。17日戸崎課長

1/20～24 座標軸によるグリッド設定作業。遺構検出作業。23日座標軸設定。24日都市計画課

戸崎課長 南新聞記者

- 1 / 27～30 井戸など遺構検出作業。27日出納長庁舎管理課。28日読売記者取材。
1号井戸取り上げ作業。
- 2 / 3～9 重富島津下屋敷推定地遺構検出作業。建物布基礎検出。畑跡検出するが比較的新しい遺構と思われる。笠利町教委中山氏来跡。
- 2 / 12～14 敷石遺構検出作業。井戸実測。3号井戸西側に建築部材列が発見される。13日永田所長，吉永和人中央高校教頭加藤。14日笠利町文化財審議委員及び所長，補佐来跡。
- 2 / 17～21 埋め立て地遺構検出作業。木製の碗，木簡，下駄など多数出土した。17日西田橋小委員会委員及び都市計画課来跡。18日三木靖文化財審議委員指導。21日平田信芳氏及び都市計画課来跡。
- 2 / 24～27 遺構の全体写真及び24日空中写真撮影。遺構実測。25日抱真院根石実測作業。畑跡検出作業。26日始良町文化財保護審議会委員来跡。安全パトロール点検。27日文化庁岡村道雄主任調査官来跡指導。
- 3 / 3～7 4日五味先生，5日三木先生指導
島津晴久千葉県社会教育管理財団 松尾千歳尚古集成館 河川課長 上屋久町金岳
中学校教頭来跡。7日三木，河口，上村，山本先生指導
- 3 / 10～14 埋め立て地遺構検出作業。木簡下駄，曲げ物等出土。遺物多数出土した。11日次長来跡。13日文化庁伊藤調査官及び宮原文化財主事来跡。14日山尾先生指導
- 3 / 17 調査終了。発掘機材撤収，成果品センターへ搬入。

3 平成9年度 2次発掘調査 (平成9年6月2日～25日)

事業主体	鹿 児 島 県	知	事	須賀 龍郎
調査主体	鹿児島県教育委員会	教 育	長	有馬 学
調査責任者	県立埋蔵文化財センター	所	長	吉元 正幸
	々	次	長	尾崎 進
事務担当	々	主	査	前屋敷裕徳
調査企画	県教育庁文化財課(兼)埋蔵文化財センター	主任文化財主事兼調査課長		戸崎 勝洋
	県立埋蔵文化財センター	課 長 補 佐		新東 晃一
調 査 者	県教育庁文化財課(兼)埋蔵文化財センター	文 化 財 主 事		青崎 和憲
	県立埋蔵文化財センター	文 化 財 調 査 員		上床 真

〈日誌抄〉

- 6 / 2～6 本年度は，昨年度未調査部分のJR官舎跡地が調査対象となる。官舎建物基礎杭が林立し，江戸期の生活面は残存していない。前回調査で確認された敷石遺構及び上水道施設の延長部分検出作業等の調査を実施。敷石遺構及び上水道施設はJ-9区まで延びL-10区で直角に屈折してN-12区へと続きその検出作業。4日都市計画課来跡。
- 6 / 10～13 12日L-9区で角井戸が確認された。凝灰岩製の組合わせ井戸枠からなる。

内部は砂を丁寧に埋めている。下屋敷境と推定される布堀り遺構検出。敷石遺構と上水道施設と切合い関係にあり布堀り遺構が古いことが明らかになった。これら遺構の検出作業。11日鹿児島土木事務所来跡。

6/16～18 角井戸検出作業。3段の組石と下部に3段の木製の榫形からなる。遺構検出作業及び遺構実測。写真撮影。17日鹿児島土木事務所来跡 18日三木先生来跡

6/23～25 井戸の底から人形木簡が出土した。また、底の部分はぐり石を約20cmの厚さで敷き詰めてあった。井戸取り上げ。24日五味先生来跡。調査終了し出土遺物搬。

4 平成11年度 整理・報告書作成

事業主体	鹿児島県			
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所	長	吉永 和人
	々	次	長	黒木 正幸
	県教育庁文化財課(兼埋蔵文化財センター)	主任文化財主事兼調査課長		戸崎 勝洋
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調査課長補佐		新東 晃一
事務担当	々	係	長	有村 貢
	々	主	査	今村孝一郎
執筆者担当	々	主任文化財主事兼第3調査係長		青崎 和憲
	々	文化財調査員		上床 真

西田橋解体に伴う発掘調査については、加藤充彦(奈良国立文化財研究所長),五味克夫(鹿児島女子大学副学長),三木靖(鹿児島短期大学長),土田充義(鹿児島大学工学部教授),河口貞徳(鹿児島県考古学会長),上村俊雄(鹿児島大学法文学部教授),山本輝雄(九州大学建築科教授),山尾俊孝(熊本大学工学部環境システム工学科教授)をはじめ、県文化財保護審議会委員、西田橋解体復元調査委員の指導助言、県土木部都市計画課長鳥巢佳彦課長,長谷場良二主幹,内山一則主査,鹿児島土木事務所御供田勉主査,文化財建造物保存技術協会,共和コンサルタントの協力を得た。報告書作成にあたっては、遺物の実測,トレース,写真撮影等は,埋文センター職員の繁昌正幸,森田郁郎,野邊盛雅,寺原徹,橋口勝嗣,三垣恵一,永濱功治,元田順子,大窪祥晃,鶴田静彦,福永修一,桑波田武志,西園勝彦,横手浩一郎,鷺尾史子,整理作業員の春山まり子,川野高子,熊川節子,有村明子の協力を得,遺物や文献資料の指導については,五味克夫(鹿児島女子大学副学長),三木靖(鹿児島短期大学長),土田充義(鹿児島大学工学部教授),宮下満郎(県史料編さん委員),平田信芳,山田尚二(西郷記念館),松尾千歳(尚古集成館),池田栄史(琉球大学教授),岸本義彦(沖縄県文化振興会公文書館),小野まさ子(同),重久淳一(隼人町教委),橋口亘氏の指導助言を賜った。

(敬称は略させて頂きました)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び立地

当地は鹿児島市街地の北部稲荷側の河口右岸の旧国鉄（現JR）官舎跡及び営林署跡に位置する。海拔4mを測る。

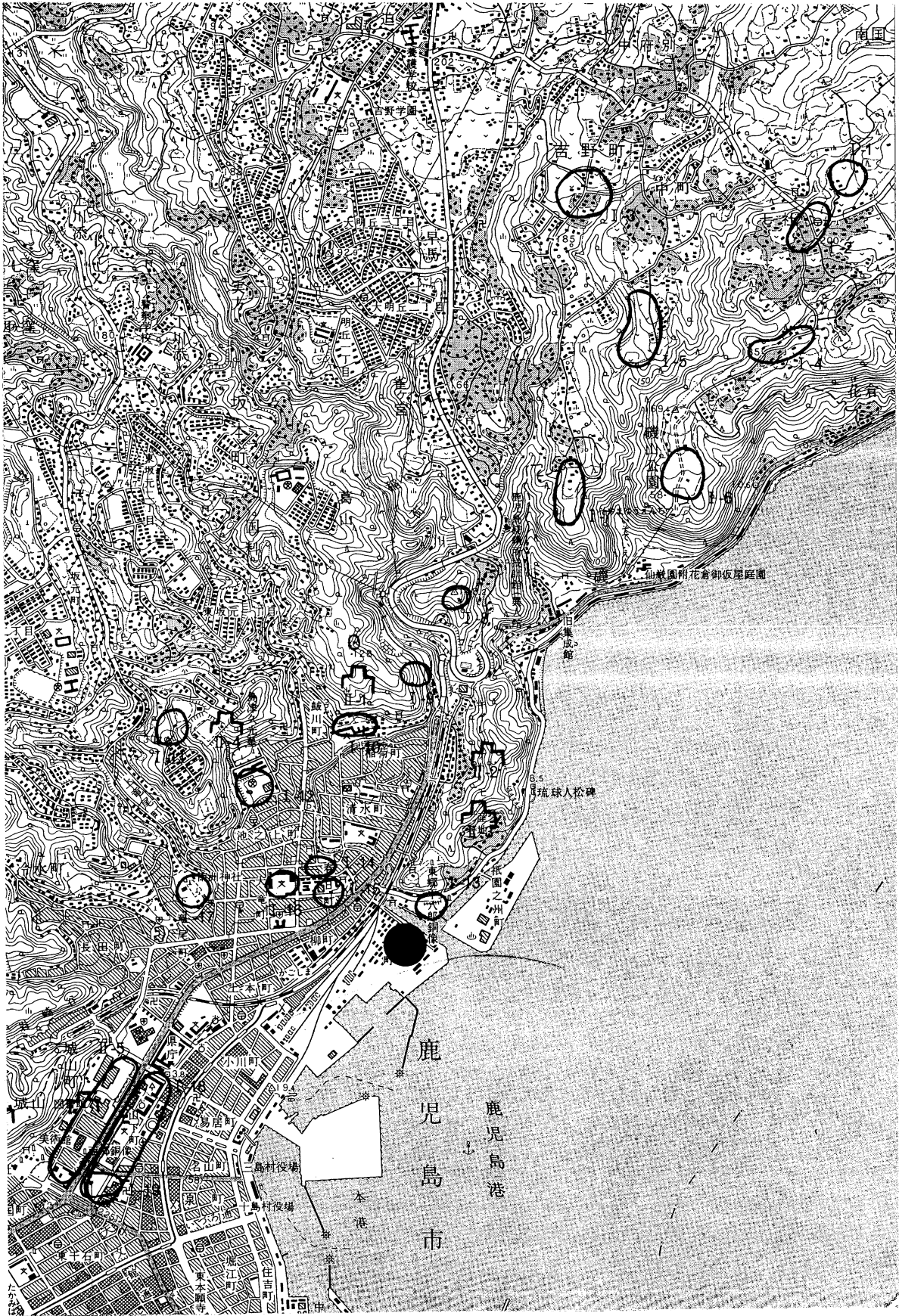
天保14（1843）年に描かれたとされる「旧薩藩御城下絵図」をみると当地は「真言抱真院」「神明宮」「島津山城殿下屋敷」があったことがわかる。また対岸は護岸の石垣が見られ「ギホンノ洲」と標記されている。この一帯が埋立によるものであり、以前は海岸だったことを示している。ちなみに祇園洲の対岸にあたる当地は縦に一直線に海との境界を描き、中ほどに半円状の船着き場がある。

第2節 遺跡の周辺環境

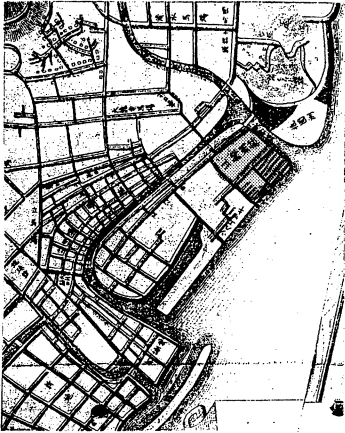
浜町遺跡の周辺には隣接地である祇園之洲砲台跡をはじめ多数の遺跡がある。縄文時代の遺跡には前平式土器の標識遺跡である前平遺跡や、春日式土器の標識遺跡である春日町遺跡などがある。弥生時代以降についても多数の遺跡が周辺に存在するが、注目すべきは江戸時代以降の城下町に関する遺跡であろう。先に述べた祇園之洲砲台跡や鶴丸城・滝ノ神火薬製造所跡・大龍遺跡・集成館反射炉跡などが鹿児島湾に沿うように分布している。

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代
I-1	川の元	吉野町七社川の元	古墳
I-2	中尾	吉野町七社仁田道中尾	古墳
I-3	老ノ迫	吉野町中ノ町老ノ迫	縄文・古墳
I-4	島堀	吉野町七社島堀	縄文
I-5	白井崎	吉野町中ノ町白井崎	古墳
I-6	雀ヶ宮	吉野町七社島堀	古墳
I-7	矢来門	吉野町雀ヶ宮矢来門	縄文
I-8	前平	吉野町雀ヶ宮前平	縄文
I-9	滝ノ上火薬製造所跡	吉野町滝ノ上	近世（幕末）
I-10	大乗院	稲荷町清水中学校内	近世（江戸）
I-11	丸岡	坂元町たんたとう丸岡	縄文
I-12	福昌寺跡	池之上町20-57	中世～近世
I-13	祇園之洲砲台跡	清水町10-7	近世（幕末）
I-14	若宮神社	池之上町若宮神社	縄文
I-15	春日町	春日町5番地	縄文
I-16	大龍	大竜町11-44大龍小学校内	縄文・古墳・中世・近世
I-17	南州神社	上竜尾町南州神社	縄文
I-18	演武館造士館	山下町中央公園内	江戸
II-1	清水城	坂元町清水中学校上	南北朝
II-2	浜崎城	田之浦町	南北朝
II-3	東福寺城	清水町	平安
II-4	長谷場城	坂元町	南北朝
II-5	鶴丸城	城山町1～8番地	江戸



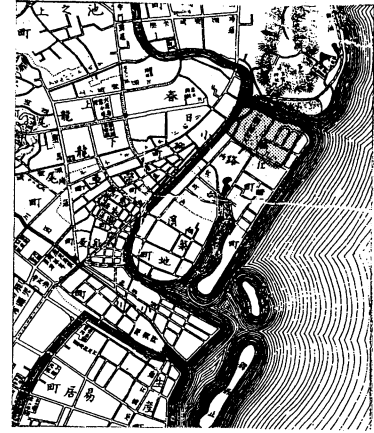
第1図その1 浜町遺跡(●印)と周辺遺跡分布図(番号は任意)



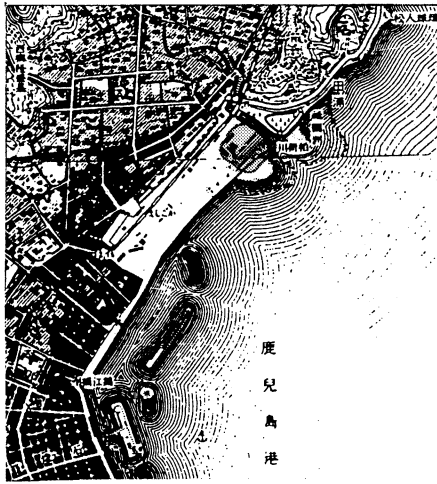
①明治12年



②明治22年



③明治30年



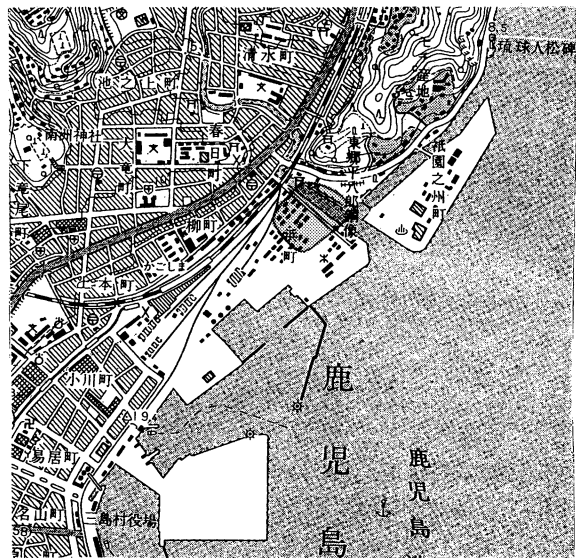
④明治35年



⑤昭和7年



⑥昭和44年



⑦平成2年

第1図その2 浜町周辺の変遷

第3節 浜町遺跡の変遷

浜町遺跡周辺の土地は江戸時代以降の埋め立てによるものであることは先に述べた。埋め立て以後の変遷については鹿児島城下絵図に基づいた研究がなされている。ここでは明治以降の分について古地図と地形図を用いて浜町遺跡周辺の変遷をみたい。

①は明治12年の古地図である。これを見ると浜町遺跡にあたる場所に「神明社」がみえる。また、祇園之洲との間を流れる稲荷川には「永安橋」が架けられていたのがわかる。②は明治22年作成の地形図である。浜町周辺の地形には特に大きな変化はないようである。③は明治30年印刷の古地図である。「神明社」の場所は「鶴江神社」となっている。④は明治35年測量の地形図である。それ以前の古地図・地形図と比較すると少し海へ向かって突き出す部分があることがわかる。埋め立てが行われたようである。また、以前運河となっていた部分に鉄道が敷かれているがこれは明治32年に着工した南九州鉄道（現日豊本線）である。運河を埋め立てた部分に沿って鉄道が走るようになった。⑤は大正4年測量・昭和7年修正の地形図である。④で海に突き出していた部分の造成がさらに進み港の一部となっている。ここでは取り上げていないが、昭和3年発行の「訂正増補鹿児島市街図」はすでに「鶴江神社」はなく、「営林署貯木場」と「鉄道省官舎」となっている。⑥は昭和41年改測・昭和44年修正の地形図である。昭和55年には新たに祇園之洲が埋め立てられた（現祇園之洲町）。この図にはまだないが、現在はバイパスの開通により浜町と祇園之洲町とは祇園之洲大橋で結ばれている。以上のように地図から変遷をみることができわけだが、地図は古いものほど簡略化されており、厳密な位置を示しているとは限らないものもある。しかしながらおおまかな部分については周辺の様子や景観などの変化を見るうえでおいに参考となった。

- ① 明治12年発行 鹿児島県全図 伊地知貞馨 作製（県立図書館蔵）
- ② 明治22年測量 迅速測図 鹿児島・下荒田町 第6師団参謀部作製か
- ③ 明治30年印刷 養田岩太郎 作製 吉田文弁堂 発行（県立図書館蔵）
- ④ 明治35年測量 地形図 伊敷・鹿児島
- ⑤ 大正4年測量・昭和7年修正測量 鹿児島北部・鹿児島南部
- ⑥ 昭和41年改測・昭和44年修正測量 鹿児島北部・鹿児島南部
- ⑦ 平成2年修正測量 1：25000地形図 国土地理院発行

※（②④⑤⑥は『日本図誌大系 九州Ⅱ』朝倉書店 1977 より引用）

第Ⅲ章 調査概要

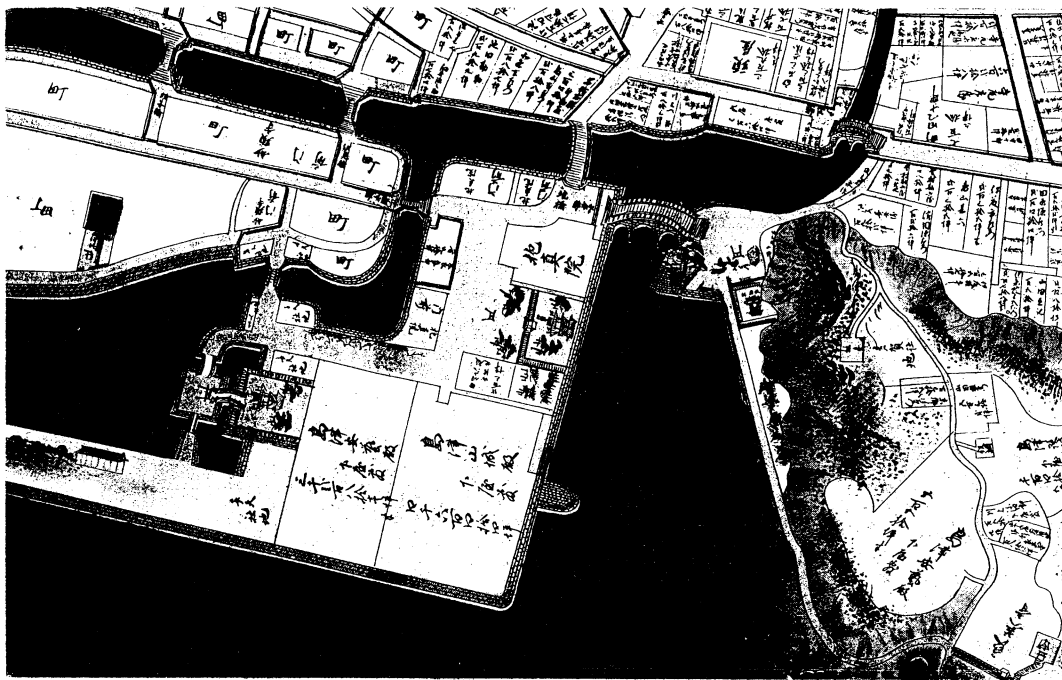
第1節 調査の概要

浜町遺跡は、鹿児島市浜町J R鹿児島駅北東部の稲荷川右岸のJ R官舎跡及び鹿児島営林署跡地に位置する。調査対象地は、天保年間『鹿児島城下絵図』や『薩藩沿革地図』、『三国名勝絵図』等の文献資料によると、「抱真院」、「神明宮」、「猪飼中央御借地」、「島津山城殿下屋敷」、「船着場」の記述がある。

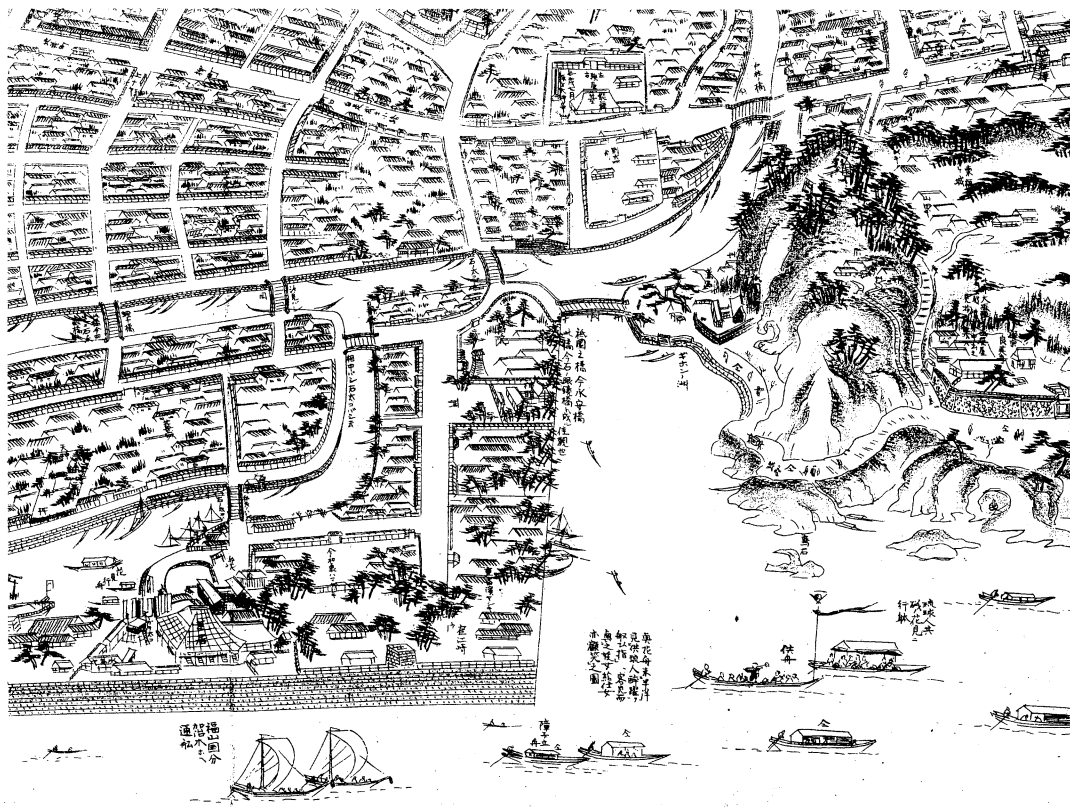
調査は、国土座標を基に、10mグリッドを設定して調査を進めた。

発掘調査の結果、当時の生活面は近現代の造成、建造物等による変改にもかかわらず、「抱真院」跡には、総柱建物跡と神明宮との境界にあたる縁石列、「神明宮」跡からは直線的に並ぶ東側・西側の塀にあたる柱穴列、「猪飼中央御借地」跡からは角井戸、「島津山城殿下屋敷」跡からは建物跡と猪飼中央御借地との境界にあたる箱堀形溝状遺構、船着場など、文献資料との照合による位置関係や規模、区画・境を想定出来る遺構の存在が明らかになった。これら遺構は埋立て造成時の砂地の面で検出したものである。また、これら遺構が存在する前段階にあたる埋立て地の状況も確認できた。また、出土遺物には陶磁器類の碗・鉢をはじめ、漆椀・下駄・曲げ物等の木製品や木筒、硯の石製品、煙管・古銭の金属製品や瓦、墓石、玩具等、多数出土した。

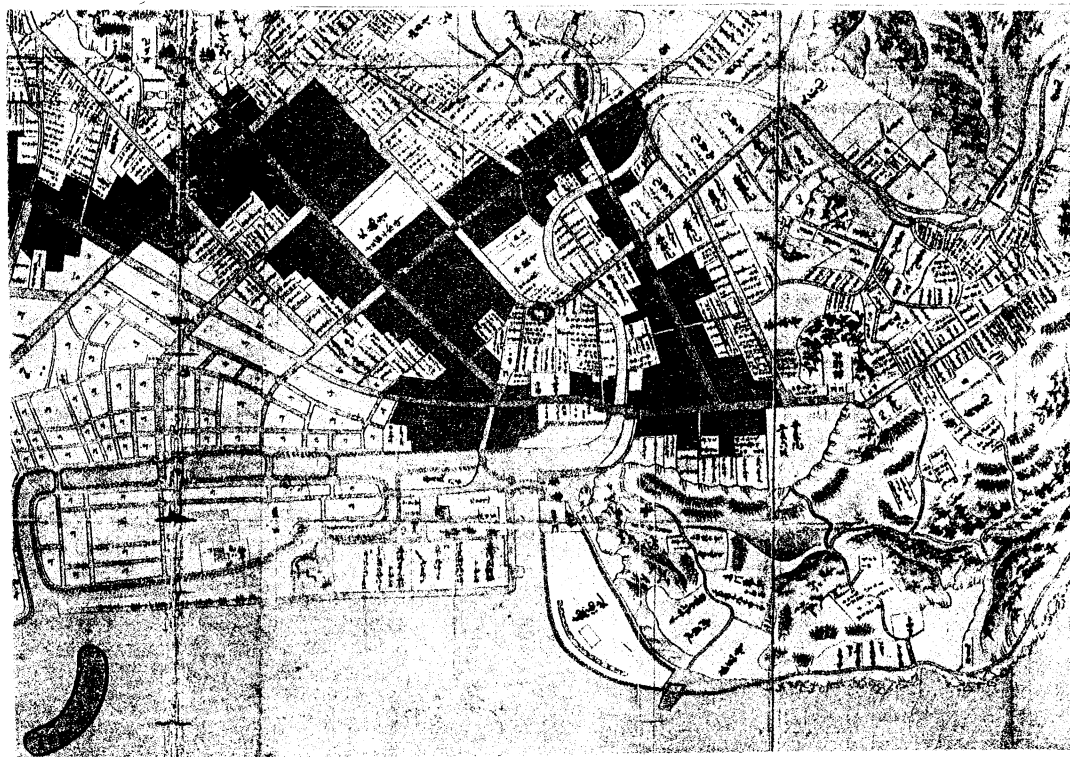
浜町遺跡は、藩政時代の埋立て造成地に構築された鹿児島城下の様子を知る近世遺跡である。さらに時代が下る敷石遺構及び上水道施設、丸井戸、畠跡も発見された。



第2図 古絵図（その1）薩藩沿革地図（文政年間）



第2図 古絵図（その2）薩藩沿革地図（天保14年）



第2図 古絵図（その3）旧薩藩城下絵図（安政年間）

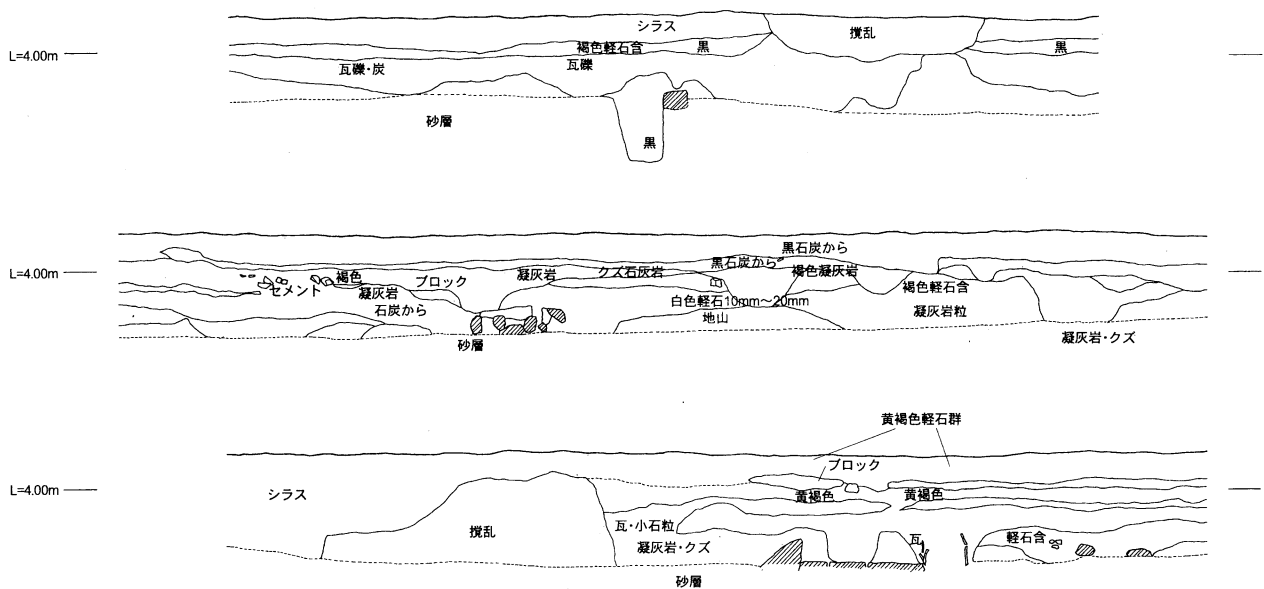
神明宮東北城の 坂本村、向築地にあり、奉祀七坐、左、正位は伊勢内宮、天照皇大神、右、正位は外宮、豊受大神、左位の相殿、左は手力雄神、右は萬幡豊秋津姬、右位の相殿、左は天津彦々火瓊杵尊、右は天兒屋根命、太玉命、正中に神鏡一面を掛く、神名秘書曰、内宮外宮之宗靈、尊無二、天地精明之本源、無想無爲之大祖也、故以無想之鏡、表無想之妙體、皇大神者、與坐故號、内宮、度相宮者、外坐故、申、外宮、始、自村上天皇、御宇也、本社は、武州江戸芝神明宮なり、淨國公新に當社を結構せられて、安養院前住法印盛壽を導師とし、勸請し給ふ、寶永三年丙戌、九月十六日の遷宮なり、同六年、祭田三十石を附らる、例祭九月十六日、神主井上遠江守鳥居の右傍に別當寺あり、抱眞院と云、
○神馬廐 社庭の左にあり、木偶鞍馬を置く、神乘生るが如く、將に奔逸せんとするの象あり、

神應山、金胎寺抱眞院の府東城 坂本村、神明宮に隣る、本府眞言宗大乘院の末にて、神明宮の別當たり、抱眞院の額を掲ぐ、寛陽公の御書なり、本尊大日如來、即ち神明宮の本地とす、開山盛壽法印といふ、寶永三年、淨國公神明宮を本府安養院盛壽廿九世に命じて勸請し、亦當寺を建立して、別當とし、同四年盛壽を以て任職とす、初め伊作海藏院末寺に、三本寺といへる廢寺ありしを、安養院盛長法印廿五世其寺戸地に移し、退老の所とせり、當寺は其寺を移されしなり、同五年、寺號を改めて抱眞院と號す、正徳五年、嵯峨大覺寺より、任持に上人號を許されたり、田祿百十五石余、盛壽自ら買て當寺に附しといふ、
○什寶 不動畫像三幅弘法、大 △不動木像一體師傳、大
△阿彌陀畫像一幅慈心 △阿彌陀一體運慶 此外累代邦君の御寄附の品、多く寶藏す、今略す、

永安橋東北城の 坂本村、精木川の下流に架す、多賀山の麓、祇園神社と抱眞院との間にあり、舊製板を以てし、抱眞橋、或は俗に祇園橋と呼べり、天保十三年の春、改め作るに石を以し、永安橋と名く、下三洞を設け、毎洞水を通す、頗る雅なり、
辨才天廟東北城の 坂本村、向築地神明宮の南三町餘、海岸の上にあり、琉球國波上山護國寺辨才天女を奉祀す、世覺院所誌七にあり、琉球國波上山護國寺辨才天女を奉祀す、世覺院所誌七院、東山、波上山、護國寺、三光院、辨才天、當初の神體は、樟板、長一丈、梵文一字あり、其樟板は、今本府文珠院に安置し、當廟には鏡を安す、例祭六月十七日、此辨才天の來由、文珠院に傳へて曰、慶長十四年、禪山久高、慈眼公の命を奉し、琉球を伐つ、時に辨才天女海上に出現して云、我は琉球波上の辨才天なり、我を供養せば、汝を擁護すべしと、久高片板を海中に投して云、神の言果て信あらば、此の板に乗て我邦に至れ、我邦君に請て尊崇すべしと、天女其板に乗り、飛が如にして去る、琉球平ひて後、久高是を 邦君に啓す、彼片板を尋しに、府下戸柱の海渚に得たり、因て小島を、其水中に築き、廟を建て、天女を祭り、池之王辨才天と呼べり、其後多賀山下に遷り、又築地に遷る、是當廟なりと、所謂文珠院に所安の樟板、即天女乘り來れる板にて、文珠院第五世覺譽、琉球の役に渡海せし故に、其片板彼に安すと云、寶永三年十二月、此天女廟を濱崎城の南に移建の梁文あり、文珠院第十世覺翁が撰にて、亦天女渡り來るの事蹟を裁す、其説前に述ると同し、其文中云、久高擒琉球王、尙寧、慶長十四年五月、歸軍之後、尋彼片板、果着戸柱之邊矣、今當橋之西、彼所本是河濱沼、而依潮之滿干、有池之深淺、其中築小島爲宮地、而安天女、故呼言池之王宮、其後移濱崎城之北麓、今茲寶永三年臘月、相攸于濱崎城之南、嘗金開於海岸、架華表於巖頭、此文に據れば、初め戸柱橋此橋、精木川の架の西、池中に小嶋を築き、宮を建て、池の王宮と稱せしと見に今は陸地にて、其處審ならず、昔は橋の邊、潮浸の灣曲にて、中葉或は池となりしとす、又濱崎城之北麓とは、其城址多賀山にて、慶安元祿等の古圖、多賀山の北麓に池の王と記し、一區の地を畫す、今僅に空地あり、六地藏塔を建つ、又濱崎城之南とは、寶永四年の古圖、多賀山の南麓、祇園神社の後、海岸の所、辨才天と記す、安永二年八月、今の地に移す、古來文珠院の所管なりしに、今の地に移せるより、諏方社大宮司本田氏管轄す、

第2節 層位(第 図)

浜町遺跡は、元禄年間の埋立て地に立地する。当地浜町周辺は明治5年の古写真によると密集した民家が建ち並び、また、明治32年に鹿児島～隼人間(現在の日豊本線の全身にあたる)の鉄道が設置され、それ以来JR九州(旧国鉄)鹿児島駅用地内の官舎や隣接して鹿児島営林署も設置されるなど、今日までこれら近現代の幾たびかの造成や建造物等によって変改されてきた。このような状況下、現地表下、調査区の北側は平均して約1mの深さで近現代の生活痕を残す攪乱を受け、南側半分は産廃等が埋設される等、特に攪乱が著しく、藩政時の生活面は残存していなかった。なお、これら攪乱層直下の埋立て時の砂層が基盤層で遺構検出面である。



第3図 土層図

第3節 遺構

1 抱真院跡（第4～6図）

調査地点は、JR九州鹿児島駅北側及び日豊本線東側沿いの旧国鉄官舎跡地にあたる。

(1) 建物跡（第5図）

直径約1mの範囲に凝灰岩片や軽石を用いて根固め地行とした円形根石で、5間×4間以上（調査区外のJR敷地に延びる）の建物で、心芯での規模は南北約13m、東西約11mである。根石は一部攪乱されて欠落している部分もあるが、総柱の建物跡と想定される。なお、建物の南西角には、約50cm四方の切石4個が田字状に設置されていた。この建物は抱真院の住居に係する庫裡等が考えられる。

(2) 縁石列（第4・6図）

縁石列は、抱真院建物跡から南東方向へ約15mの地点、暗渠施設とほぼ並列して2か所で発見された。縁石は化粧面を神明宮の方向に向けていた。現存する縁石列の推定の長さは約30mである。大部分は暗渠埋設時に攪乱及び除去され、かろうじて縁石列の位置と痕跡を確認できたものである。この縁石列が抱真院の東側の境界にあたる。

2 神明宮跡（第4・7図）

調査地点は、抱真院跡と同様、旧国鉄官舎跡地にあたる。

(1) 柱穴列跡（第7図）

北東～南西に並ぶ柱穴列A（長さ約60m）と、それと直行する南東～北西に並ぶ柱穴列B（柱穴列Bのピットと1つ間隔で楕円形ピットと並列する支え柱のピットで検出された長さは約20m）がある。城下絵図に見られる神明宮の塀跡と推定される。なお、柱穴列のピット内には柱の沈下防止の基礎石や根石を持つものがある。

柱穴列Aと縁石列が、神明宮跡と抱真院跡の境界で、その幅約43mである。調査区域における神明宮の面積は、約2,236㎡(678坪)で、全体の面積はそれ以上を確保していたと推定される。

3 猪飼中央御借地（第4・10図）

猪飼中央御借地は、鹿児島営林署跡地にあたる。古絵図による神明宮と島津山城殿下屋敷に挟まれた位置にあたり、北東側には松林が画かれ、南西側に隣接して猪飼中央御借地の記載がある場所である。東西間の幅は37mである。なお、特出する遺物として、「天保八年 西 千竈氏」の銘があるパレット形の硯が出土した。

(1) 角井戸（第4・10図）

敷石遺構I北側端のL-9区から角井戸が発見された。組合わせ石椀と枳形木椀からなる二重構造の角井戸で、90cm四方で深さは約3mである。上部には凝灰岩製石椀を4段に積み上げているが、検出時は4段目の3枚と3段目の1枚は欠落していた。石椀の内側角は接地面を密着させるため斜めに切り落としている。下部は枳形の木椀を3段に積み上げている。木椀の相対する2面には溝状の切込みを入れ金具で留め固定している。

井戸の底は細かな砂利と太めの小石の2層を約20cmの厚さで敷きつめていた。井戸の底付近に丸竹の一部と木札（人形木札で婆沙羅帝婆などの墨書き有り、井戸を破棄するさいの「お呪」に使われたものと推定）が出土した。井戸内は砂で丁寧な埋めてあった。

井戸と敷石遺構Ⅰは、井戸が先行する関係にある。

4 布堀り遺構（第4・8図）

ほぼ北東から南西に直線的に延びる布堀り遺構は、現存長約75m、幅約50cm、深さは約65cmである。溝の底面には、ほぼ等間隔に飛石の根石が配置され、根石の上部には枯渇した細身の木製支柱の一部が残存していた。布堀り遺構は堀跡と思われ、猪飼中央御借地との境界にあたる。

また、布堀り遺構は、敷石遺構Ⅱと切り合い関係にあり、布堀り遺構が古い。

5 島津山城殿下屋敷跡（第4・9図）

島津山城殿下屋敷跡は、大半が鹿児島営林署跡地に位置する。敷石遺構Ⅰ・Ⅱと上水道施設Ⅰ・Ⅱがこの区域まで延びてきている。

(1) 建物跡（第9図）

溝に並列して、L-12区を中心に縦約10.8m、横約7mの南北に梁を持つ方形建物である。人頭大の円礫を幅約75cmに整然と詰め込んだ頑丈な建物の布基礎遺構である。北西側一辺の約3mの範囲は空白となるが、構造的なものか人為的に抜かれたものか定かではない。基礎石の状況から、かなり重厚な上屋構造となる建物が想定される。

6 胴木・石列遺構（第4・6図）

胴木・石列遺構は、C-11区からF-13区の北西～南東方向に長さ41mの胴木列、さらにE-12区で十字に交差して、南西側には石列・北東側には胴木列が配置されていた。総延長は23mである。これら胴木列は、杭によって固定されていた。この胴木は径約40cmで太く、ホゾが切り込んであることから建築部材を胴木として再利用したものである。また、先端部は円錐状に加工してあった。

北西～南東方向の胴木列を境に、南西側半分は砂、北東側半分は木切れや竹等が混在した汚泥土からなり、埋立土に違いがみられる。

北東側汚泥土のE-12、F-13区から下駄をはじめ曲物、木椀、すりこぎ、へら等の木製品や箒、木筒、陶磁器など当時の生活道具の遺物が集中して出土した。

なお、当浜町遺跡周辺は、藩政時には祇園前築地、のちは神明前築地と呼称され（島津家列朝制度）、元禄～宝永年間（今から約300年前）の頃、埋立てたと言われ、当時の埋立て土木工事の状況を知る遺構の発見となった。

7 敷石遺構Ⅰ・Ⅱ（第4・8・12図）

猪飼中央御借地跡の地点のほぼ中央部に、L-9区とF-14区を直線的に結ぶ総延長約78mの敷石遺構ⅠとK-9区で北東側に直角に方向を変えた約37mの敷石遺構Ⅱが検出された。

敷石遺構Ⅰは、化粧面を内側に幅約120cmで、少なくとも2段以上を積み重ねた壁石と、床面には加工した略方形の平石を全面に敷いている。なお、敷石遺構Ⅰは、K-9区で北西側にわずかに屈曲してL-9区に続く。屈曲の要因として、敷石遺構Ⅰの設置時には角井戸が現存していたことから角井戸を避けるためと想定される。末端部にあたるL-9区は、旧国鉄官舎建物の基礎工事等によって著しく攪乱されていたことから敷石遺構の末端の状況は不明瞭であった。

敷石遺構Ⅱは、K-9区で敷石遺構Ⅰと直角に接続する。敷石遺構Ⅰと形態は同一であるが、敷石遺構Ⅰに比べて小規模で、幅が90cmである。全体的に攪乱を受けており壁石や床石は抜き取られていたが、N-12区に壁石列の一部が確認できた。それ以降は畠跡によって除去されて不明

であった。現存する遺構の総延長は36,5mである。

敷石遺構Ⅰ・Ⅱは直角に交わる連続する排水施設と思われる。

8 上水道施設Ⅰ・Ⅱ（第4・12図）

上水道施設は、敷石遺構Ⅰ・Ⅱと並列して発見された。一部途中で欠落しているが、長さはほぼ敷石遺構と同等規模である。上水道施設は二重構造からなる。下位には浮動沈下防止のため、方形平石を約30cm間隔で飛び石状に設置し、その上位には立方体に面取して芯を削り抜いた凝灰岩の石管を継いで並べた上水道施設である。継ぎ目には、接着剤として漆喰を用いている。さらに、L-12区の水道施設（第4図）部には、上から側面に円形の穴を通した方形平石が存在し、この部位から上水道施設Ⅱに接続するものと思われ、上部に何らかの構造施設があったことが伺われる。

9 船着場（第4・11図）

調査は、稲荷川左岸の玉江橋、高麗橋移設地の祇園州と西田橋移設復元地の浜町遺跡とを繋ぐ連絡橋の橋脚工事に伴い護岸石垣に影響を及ぼす先端部と上流側の範囲について実施した。

調査地点は、近現代に護岸改修工事において改変した稲荷川の川幅が若干狭まっている護岸石垣部分にあたり、石垣の中位まで川砂が堆積していた。なお、この部分は一部階段状の石垣が露呈し、上・下流側の護岸石垣と石積み法が異なっていた。階段状石垣の上流側先端部の5段目石垣には、現在の護岸石垣の構築時の基礎である松材の梯子胴木がはめ込まれ、現存する12段の石垣のうち6段目以上は、改変時の現護岸石垣構築時に積み重ねられたものである。裏込めには創建時の船着場石垣の石も用いていた。現存する階段状石垣は、12段で高さ4mである。

調査の結果、階段状石垣は船着場であることが確認できた。先端部分は、現在の護岸の階段状石垣と面が同じであることから、現護岸の石垣の一部としてそのまま使われ、5段目までの階段状石垣が創建時船着場の状態を保ち、本体は現在の護岸石垣の内側に残存していることが判明した。さらに、工事対象外である下流側部分については試掘を行い、船着場石垣の5段目までの階段状石垣を確認した。

従って、創建時本来の船着場は、稲荷川に約10m、舌状に突き出た12段からなる階段状石垣が上面の幅約7～8m、高さ約4mで巡っていたものと想定される。なお、船着場基部に想定される部分は、現在の利道直下に当たることから調査は不可能であった。

天保年間絵図との比較によると、確認した船着場は上流側に位置しているが、絵図に示されているものかは定かではない。

なお、船着場石垣は、橋脚設置工事後、調査前の状況に復されるとともに、船着場遺構は、現在の護岸石垣の内側に厳然と残されている。

10 暗渠（第4図）

鹿児島駅構内方向より稲荷川へ向かって、調査区の約150mの長さで検出された石垣造りの暗渠である。地表面下20cmから、整然と並んだ蓋石が有り、幅は約60cm前後、深さは約1mで3段積み、蓋石は長さ約1mの加工石である。調査時には流水がみられ、目地にはセメント使用、レンガ造りの箇所、土管が埋設されている。

明治32年に鹿児島線鉄道作業局鹿児島出張所が設立され、明治34年鹿児島～隼人間が開通して

いることから、この頃の鉄道排水施設と推定される。

11 落ち込み遺構 I・II (第4図)

落ち込み遺構 I は J-8 区、落ち込み遺構 II は G-8 区から、砂層を掘り込んだものである。落ち込み遺構 I は長径 7 m、短径 4 m、深さ約 90cm で落ち込み遺構 II は長径 9 m、短径 5 m、深さ約 60cm で、両者ともに不定形の落ち込み遺構である。覆土は明褐色で、陶磁器類の椀や鉢をはじめ近現代の瓦や遺物が混在した状態で多数出土した。出土遺物から藩政時以降、近現代に掘られた遺構である。

12 丸井戸 (第4・13図)

丸井戸が計 7 基出土した。いずれも埋立て地の砂層を掘り込んでいることから湧水や崩壊が著しく掘り方の細部の状況把握や井戸の取り上げには困難をきたした。すべての井戸の上部は欠落しており、現存する状況での井戸について述べると、1 号井戸は G-10 区に位置する。検出面での掘り方は径約 2.7m で、下部には木製桶型井戸枠(幅約 15cm、長さ 93cm の板を 13 枚、上端径 80cm、下端径 82cm)と上部には凝灰岩の石を削り抜いた高さ約 50cm の石製井戸枠(外径 100cm、内径 64cm、長さ約 50cm を 4 段に積み重ねたもの)で、深さは約 274cm ある。なお、木製井戸枠が接する最下部の石製井戸枠の下端には、木製桶型井戸枠がきちんと収まるよう深さ約 6cm の切り込みを入れている。2 号井戸は F-8 区に位置する。検出面で径約 200cm の掘り方の中に、木製桶型井戸枠 2 つを組合わせ(下部 1 段目-幅約 11cm、長さ 160cm の板を 26 枚、上端径 81cm、下端径 88cm。上部 2 段目-幅約 10cm、上位は欠損し長さ 42cm で残存する板を 27 枚、下端径 90cm)を重ねて深さ 190cm で設置する。1 段目は 2 段目の桶型井戸枠の下部に挿入する。掘り方と井戸枠の隙間には、砂利石を密に詰め込んでいる。2 段目の上部は欠損する。3 号井戸は E-10 区に位置する。掘り方は径約 420cm である。その中に一辺が約 160cm の四角形で、四角には円柱と 4 面の上下には平行する 2 本の梁を設け、数枚の壁板を縦に並べた、いわゆる井戸構築における四角形の矢板遺構を設けたものである。矢板遺構内には凝灰岩製の 4 個の加工石を内径 60cm の円形に組合わせた 8 段の井戸枠を深さ約 270cm に積み重ね、その内側に木製桶型(幅約 24cm、長さ 184cm の板を 13 枚、上端径 70cm、下端径 74cm)を設置するもので、桶形井戸枠は石製井戸枠の下から 2 段目から 7 段目に納めている。なお、石製井戸枠と桶型井戸枠の隙間は約 10cm 前後あり、その隙間には砂利が詰め込まれていた。4 号井戸は F-11 区に位置し、2 号井戸と同様な構造や形態、残存状況を呈する。1 段目の桶型井戸枠は幅約 10cm、長さ 165cm の板を 24 枚、上端径 78cm、下端径 92cm、2 段目は幅約 10cm、長さ 104cm 前後残存し、幅約 10cm の板 20 枚、下端径 84cm である。5 号井戸は D-11 区に位置し、構造や形態は 3 号井戸と同様で、四角形に矢板状遺構を構築して石製井戸枠を埋設している。矢板遺構の北西側一辺の梁は存在していなかった。なお、南側の支柱には 5 寸釘が 3 本打ちつけられていた。埋立て造成時の建築部材の胴木列遺構に偶然にも接し、矢板遺構は斜めに傾き若干変形している。石製組合わせ井戸枠は 4 段を重ね、下部は桶型井戸枠を埋設している。6 号井戸は E-13 区に位置する。1 号と同様な構造や形態、残存状況を呈する。7 号井戸は I-7 区に位置し、確認に留めた。

以上、これら 7 基の井戸はそれぞれ、2、3、5 号が北西側に、1、4、6、7 号が南東側に 2 列に平行して分布するが、旧国鉄官舎の家屋と符合するように規則的にそれぞれが位置している。

鹿児島駅構内

11

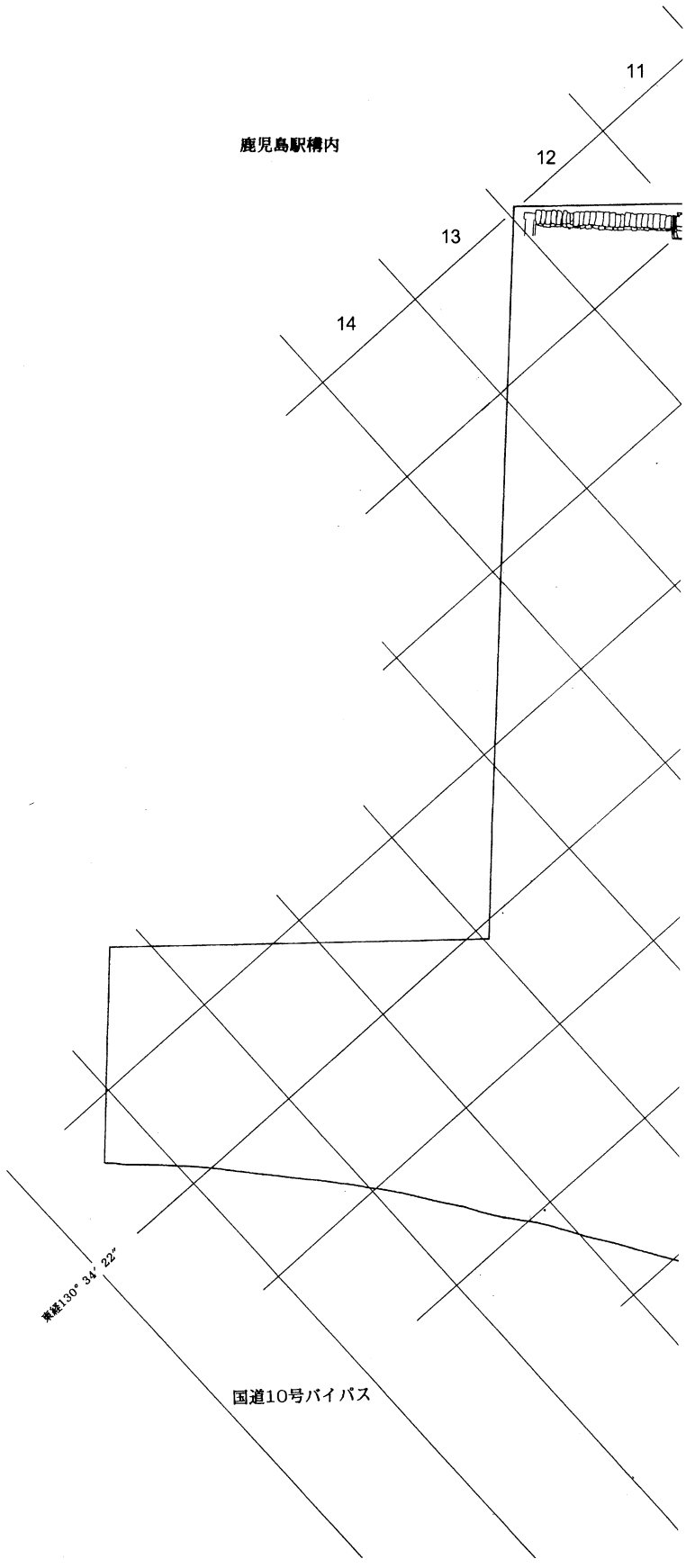
12

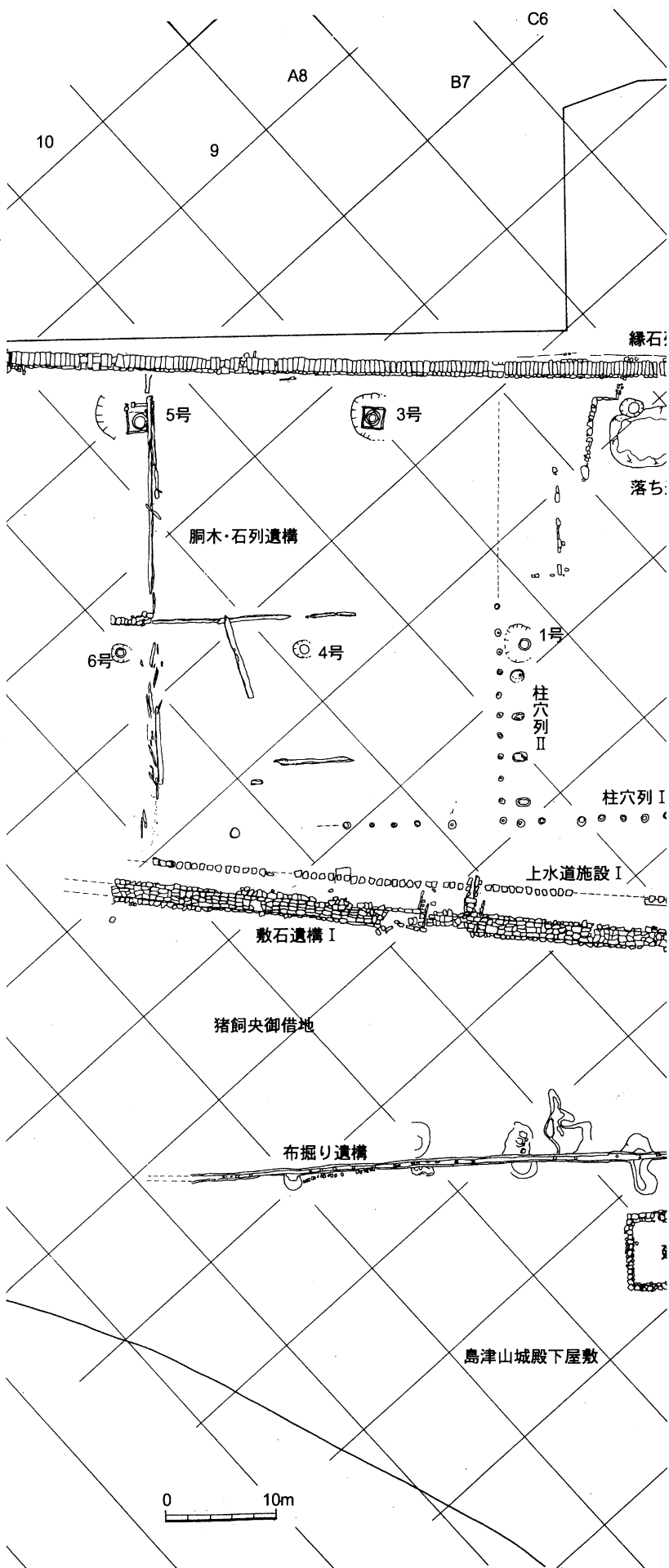
13

14

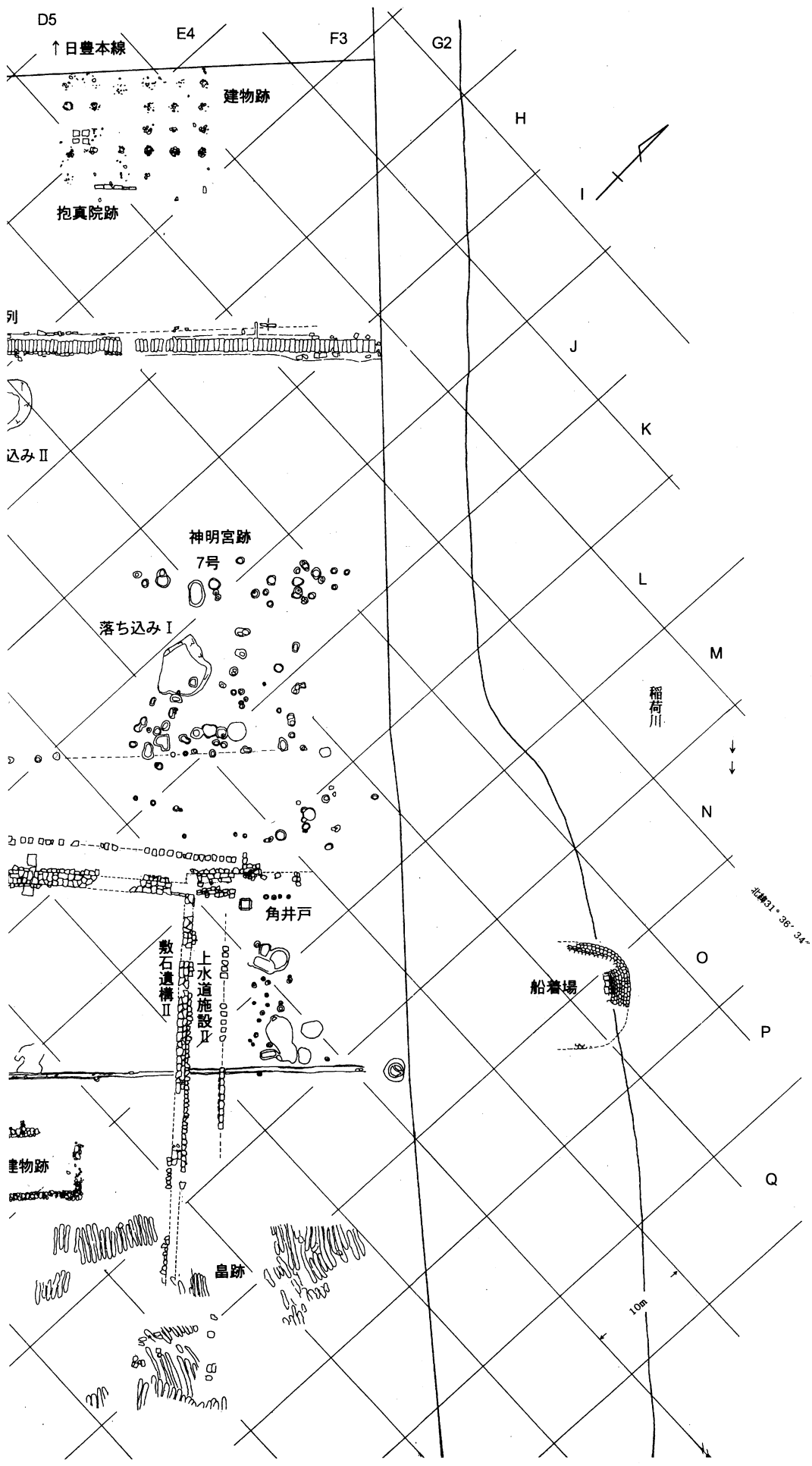
東経130° 34' 22"

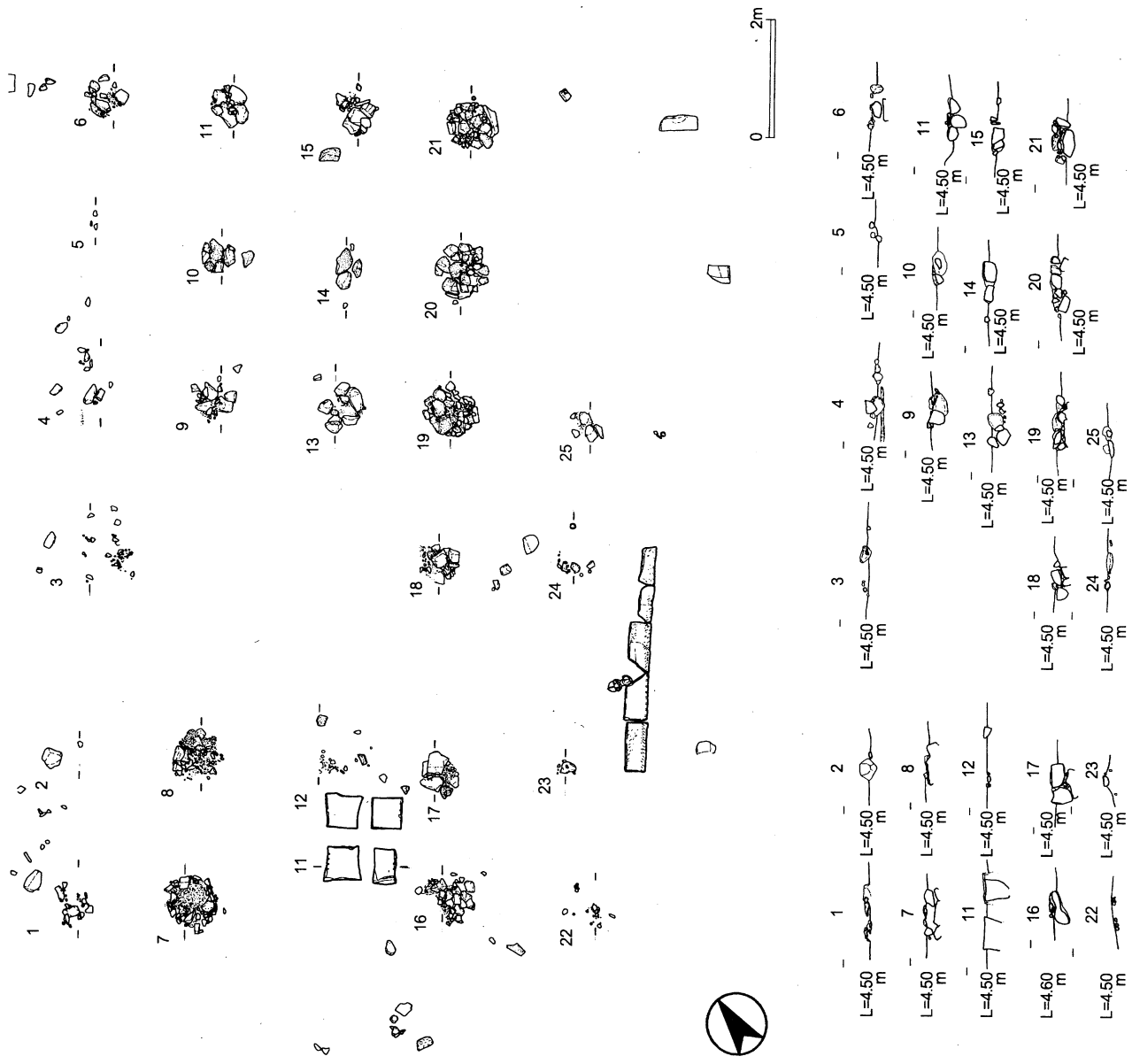
国道10号バイパス



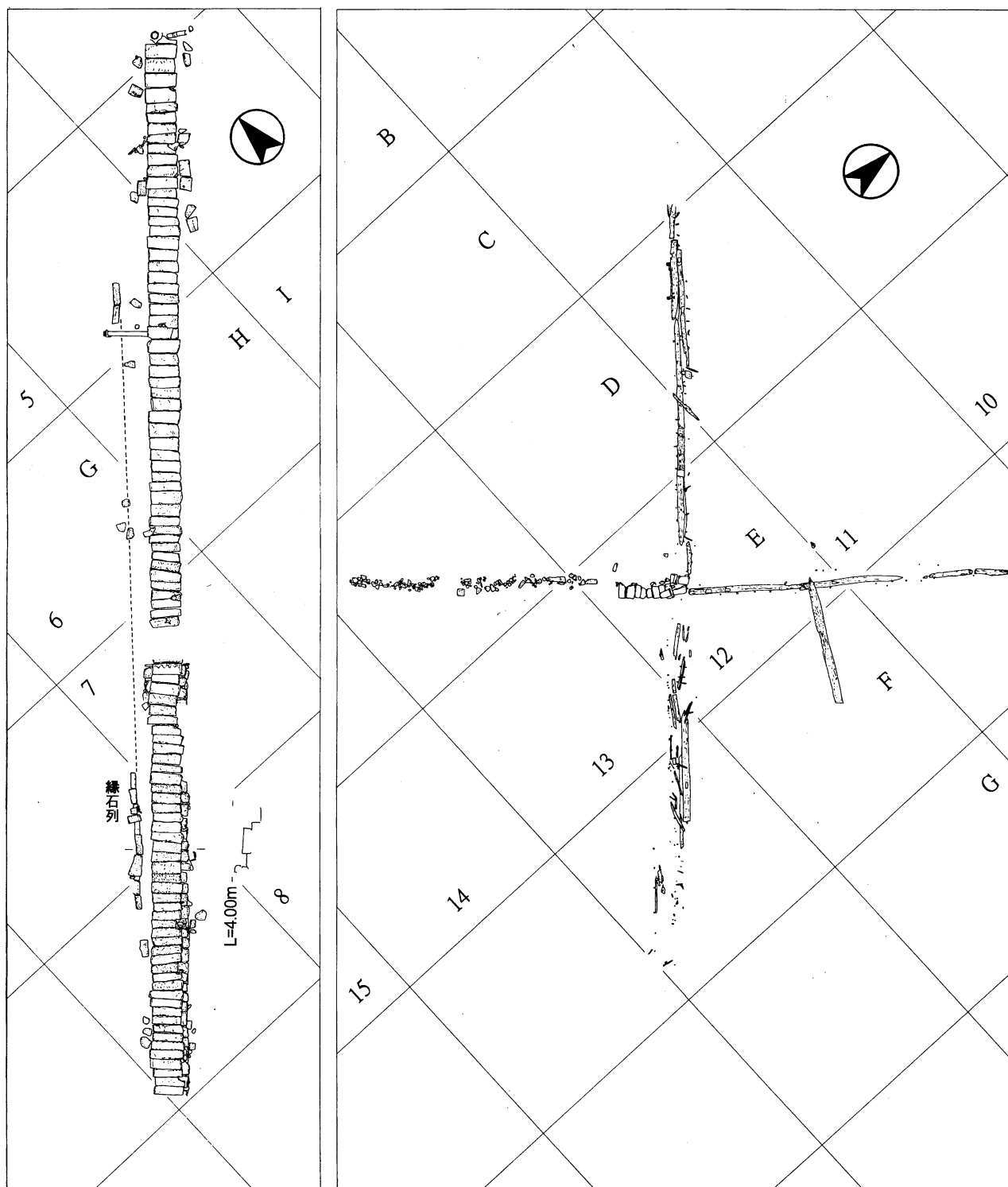


第4図 遺構配置図

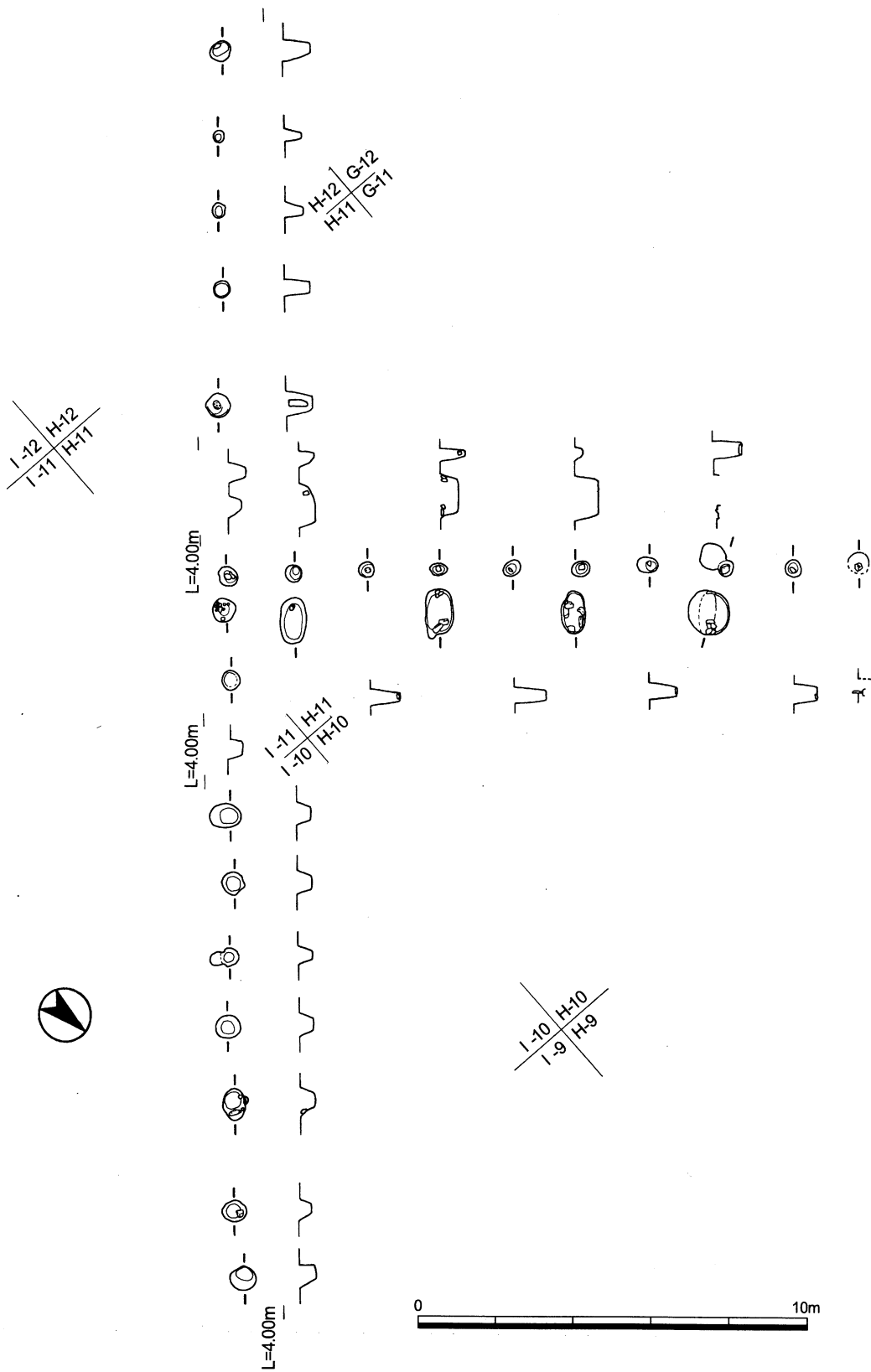




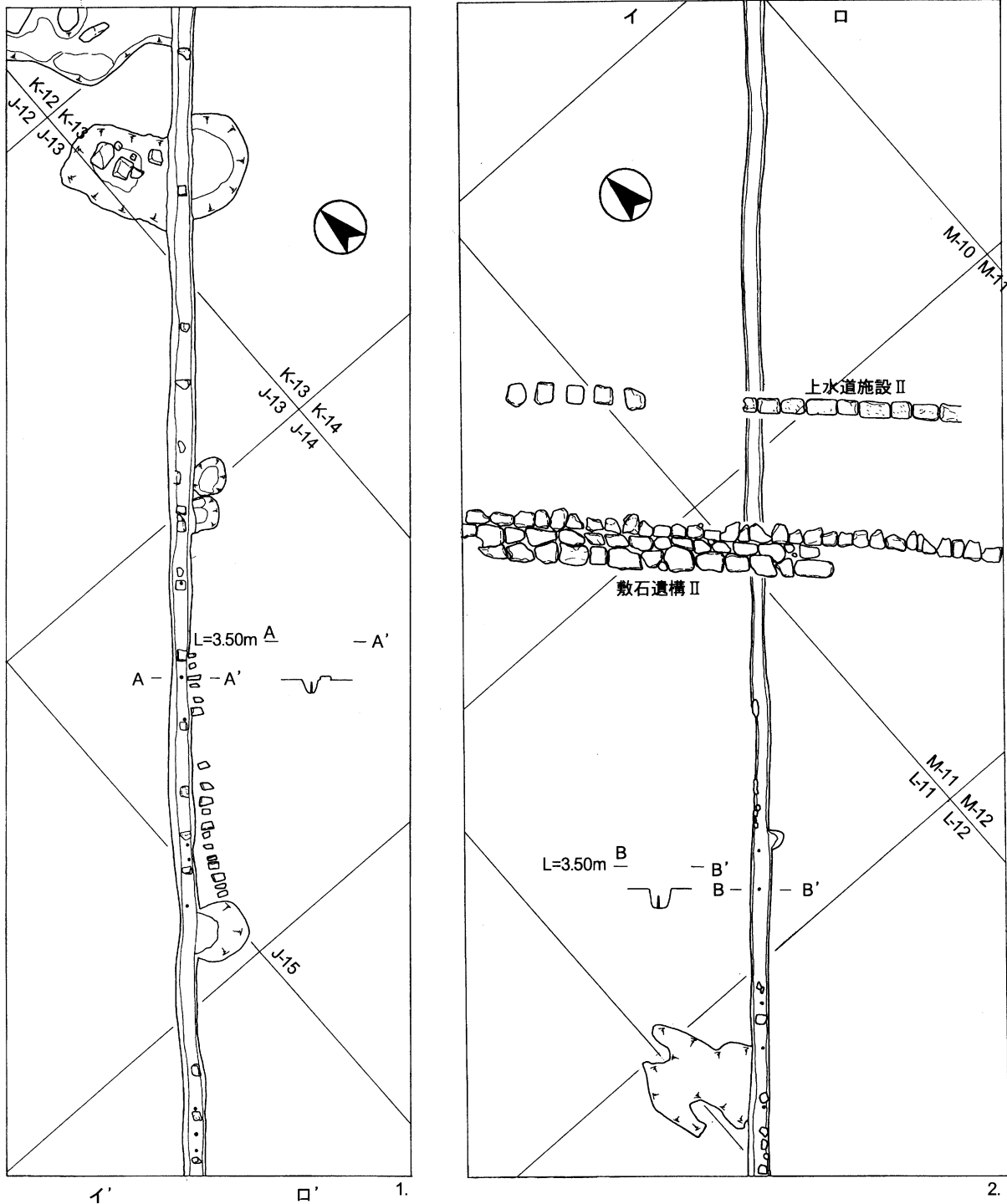
第5図 抱真院跡



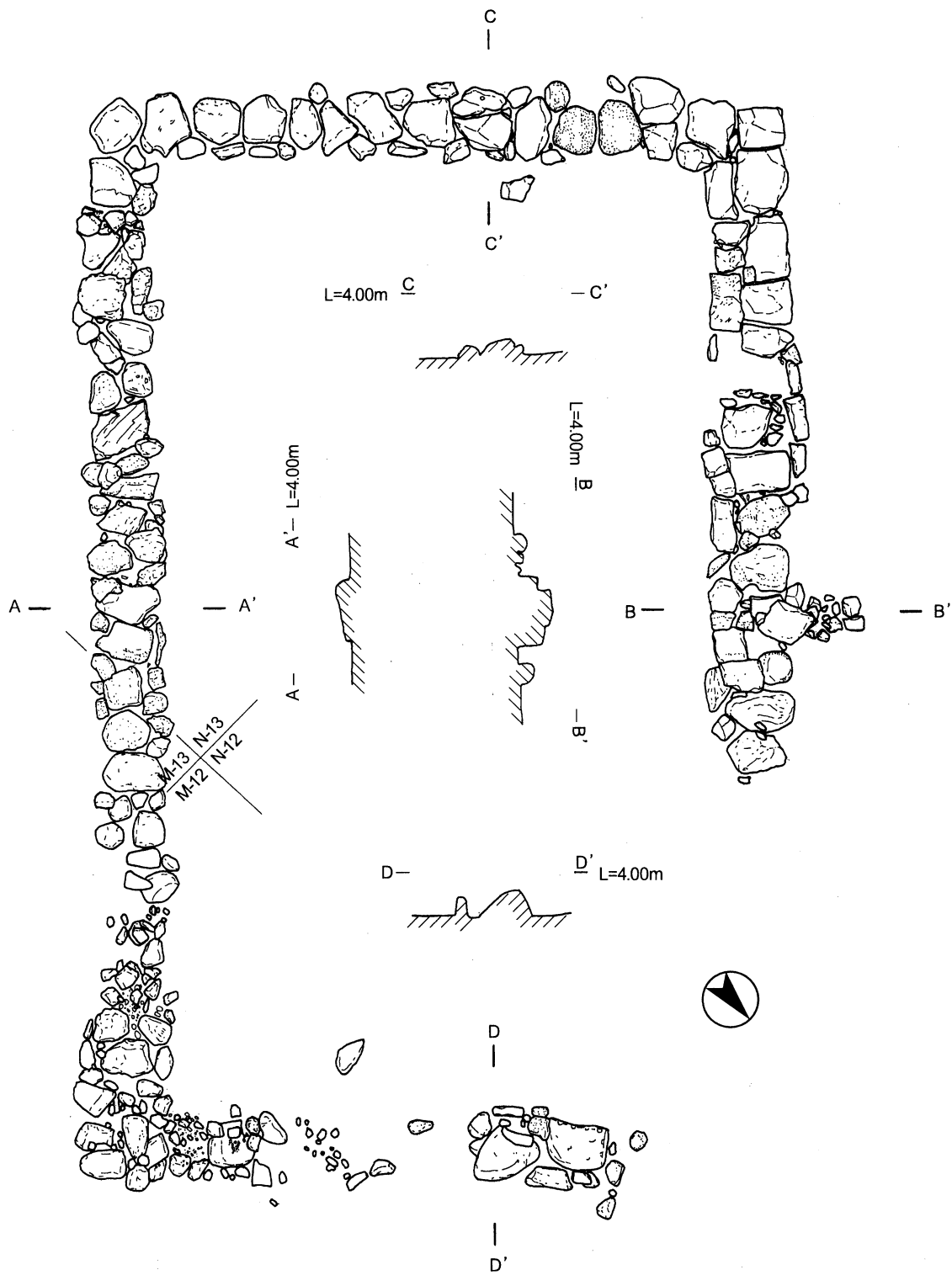
第6図 抱真院・神明宮境縁石列と埋め立て遺構(胴木・石列)



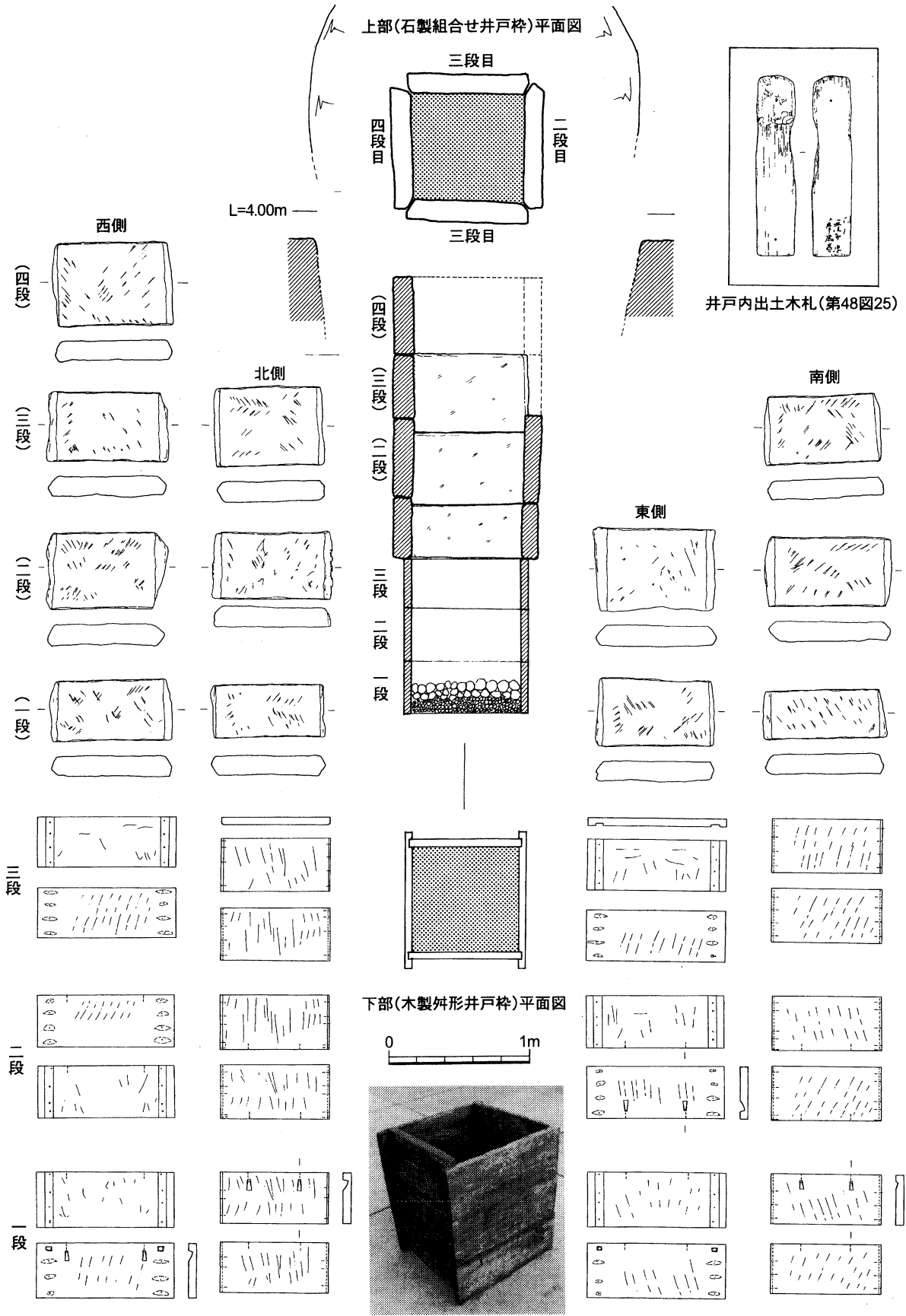
第7图 神明宮塀跡



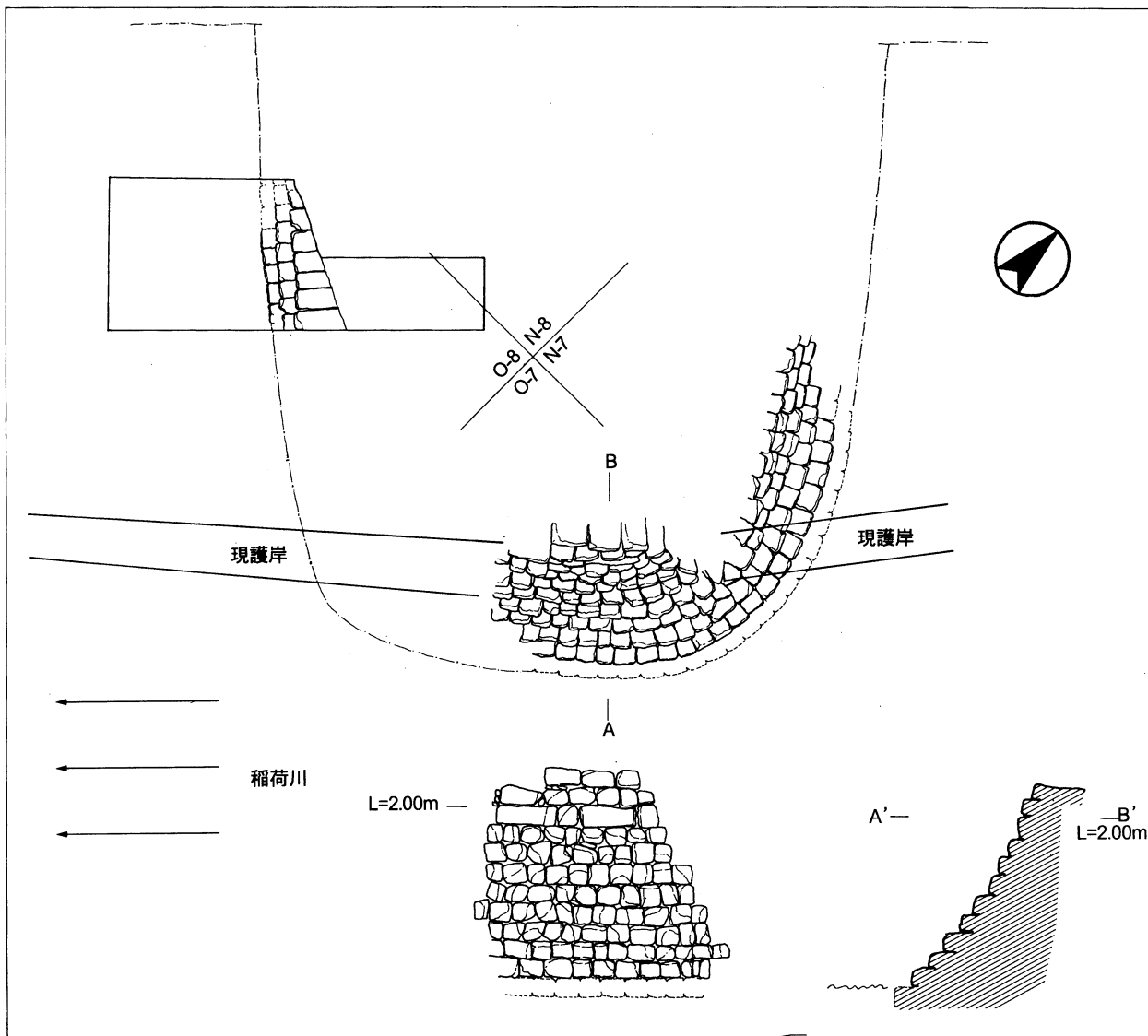
第8図 布堀り遺構(猪飼中央御借地と島津山城殿下屋敷跡境界)



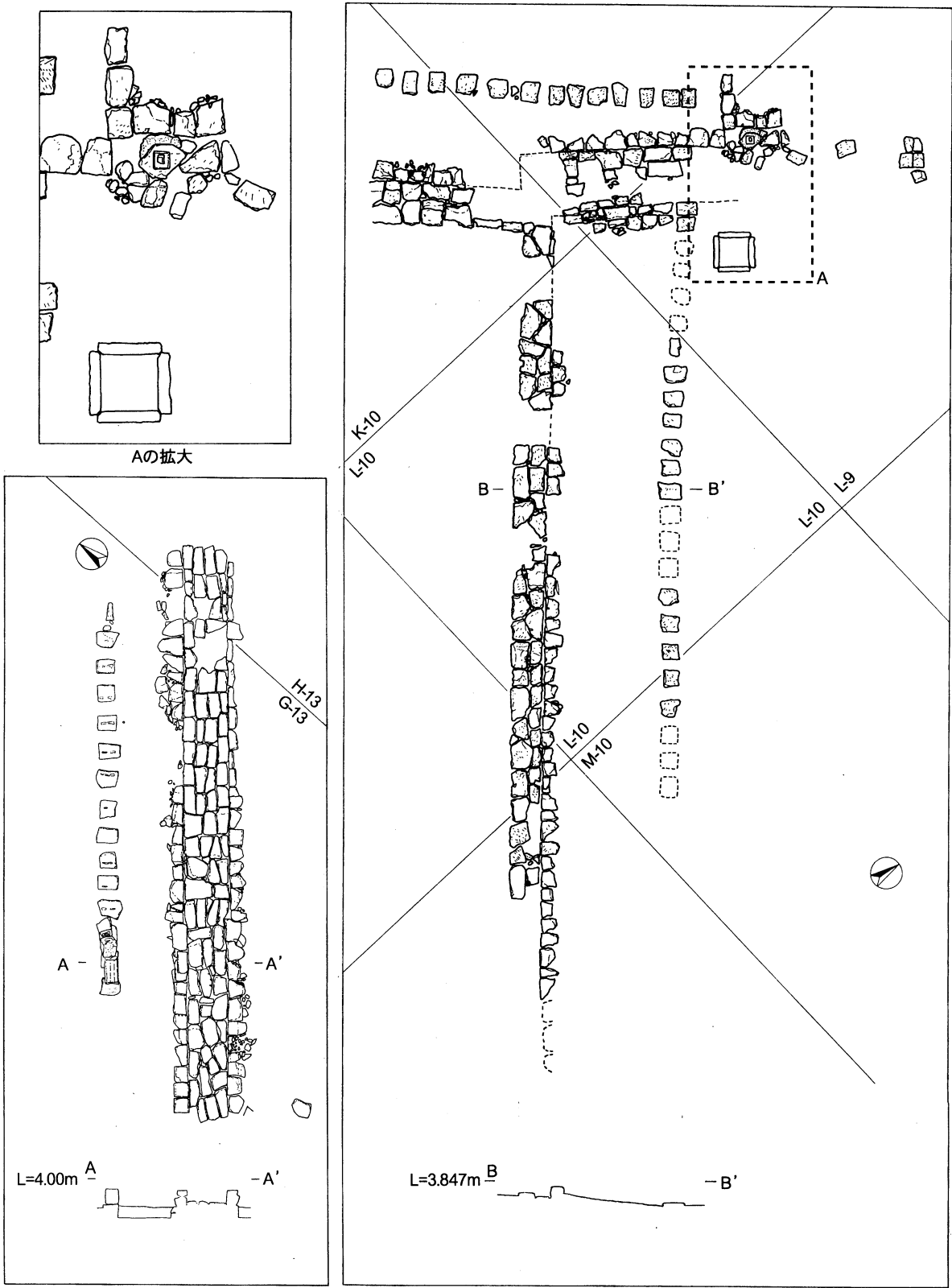
第9図 建物跡(島津山城殿下屋敷跡布基礎)



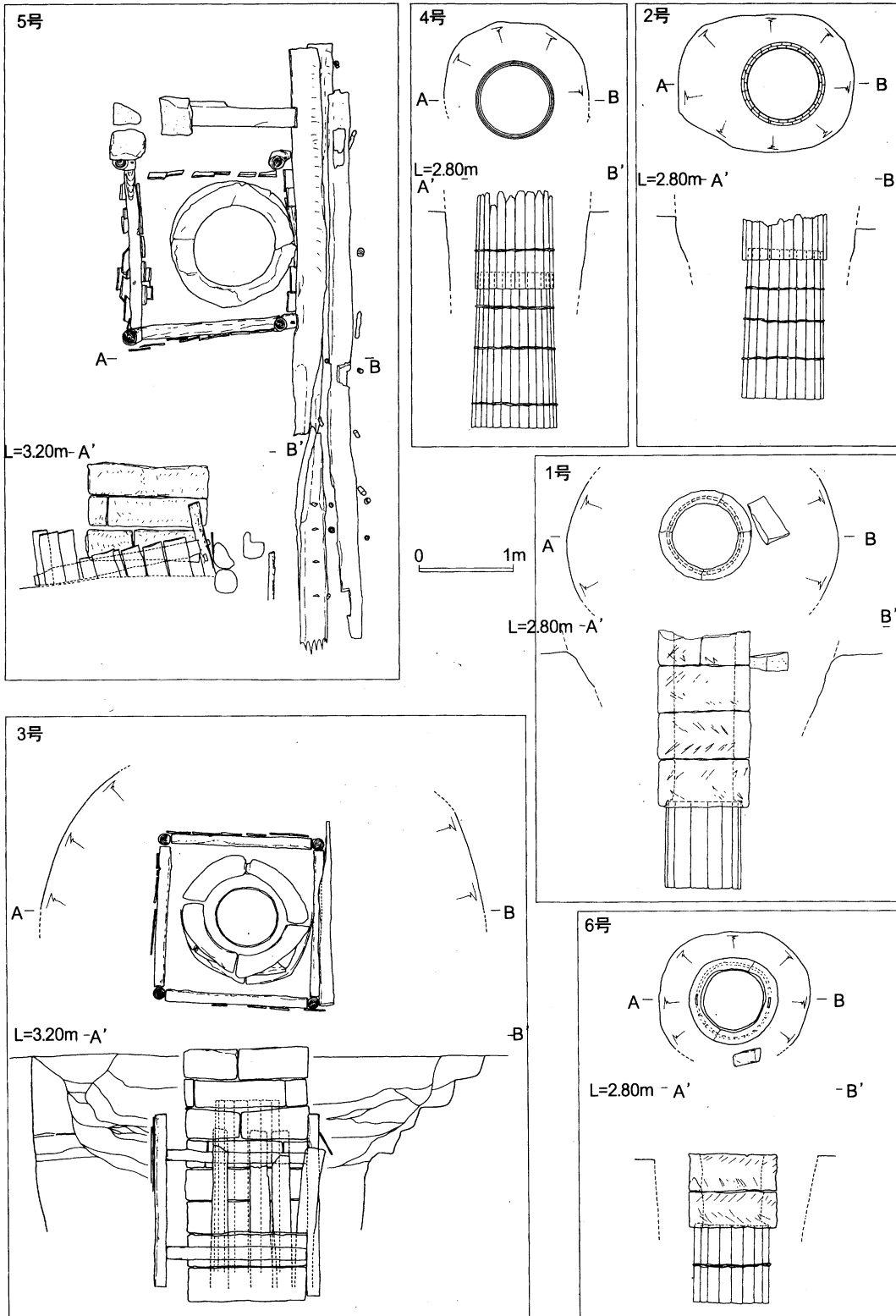
第10図 角井戸



第11図 船着場実測図



第12図 上水道施設と敷石遺構



図縮尺1/20

第13図 近代丸井戸

第4節 出土遺物（第14～52図）

出土遺物には、陶磁器類の碗・鉢をはじめ、漆碗・下駄・曲げ物等の木製品や木筒、硯の石製品、煙管・古銭の金属製品や瓦、墓石等、多数出土した。陶磁器の分類は内藤町遺跡(新宿区内藤町遺跡調査会東京都建設局発行)を参照した。

1 磁器（第14～26図）

磁器の種類は、碗、鉢、皿、稜花皿、角皿、端反皿、猪口、稜花皿、酒杯、ソバ猪口、重段、蓋物物仏飯具、火鉢、花瓶、急須、レンゲがある。

(1) 碗類（第14, 15, 16, 20, 22図）

碗類には、小坏と碗に分類される。

① 小坏（第22図）

小坏(66, 67, 70, 73, 75)は、口径が5cm未満のもので片手の指先で軽く持ち、酒杯・煎茶碗として用いる。肥前系の磁器である。66, 70, 73端反口縁である。

② 碗

底部から湾曲あるいは屈曲して立ち上がる器で、手軽に手に持てる大きさと重量を持ち、高台もしくは台を備える。全て染付けの磁器である。口径の大きさによって小碗, 中碗, 大碗に分類した。

A 小碗（第20, 22図）

小碗(57, 65, 68, 69, 71, 72, 74, 76, 80, 82～93)は口径が5cm～9cm未満の碗で、片手の指の腹で軽く持ち、湯飲碗・酒杯・煎茶碗・子供用の飯碗として用いる。65, 68, 70, 80は端反口縁, 69, 71, 74は桶形, 82は丸形, 83は半筒形, 84～93は筒丸形の形状を呈する。肥前系磁器であるが、57は平佐系の磁器と思われる。

B 中碗（第14, 15, 16図）

中碗(1～16, 18～28)は口径が8.5cm以上12.2cm未満の碗で、器形によって5つに分類される。1～10は高台付根から丸みを帯びて口縁部へ立上がる器形となる丸形碗, 11, 12は腰部が張る腰張形, 13は腰が緩やかに折れ直行する口縁部となる飯碗形, 14, 16は腰からほぼ直行して外反する口縁部となる広東形, 8, 15, 16, 18～28は口縁部がわずかに外反する端反形の碗である。中碗は片手の掌や両手の指先で持つもので、飯碗, 煎茶碗, 抹茶碗などに用いる。3, 5, 6, 7, 27, 28の見込みには蛇の目釉ハギが施され, 9の高台内には「大明年製」の銘有り, 11には陶胎染付で山水図を描く。文様には植物(菊・松竹梅・唐草・蛸唐草・梅・稲束・アザミ・花卉・笹)や山水, 岩, 籠目, 人物, 楼閣, 家屋, 鳥, 雲, 波, 昆虫, 四方櫓, 連弧, 重弧, 雷など多種多様である。肥前系や在地の平佐系(5, 6, 14, 16, 27)の磁器がある。

C 大碗（第16図）

29は口径が14.8cmで大碗の部類に属する。外面には花唐草文, 内面には唐草文, 高台内には「寿」の銘有り。平佐焼と思われる。両手の掌で持ち, 用途としては抹茶碗や鉢として用いる。

(2) 鉢類（第15, 20, 22図）

鉢類には、鉢と猪口(ソバ猪口、紅猪口も含む)がある。

① 中鉢 (第15, 20図)

中鉢(17, 53~56, 58)は口径が15cm以上で食器のひとつで旬のものをいれる。17は腰部と口縁部で屈曲する腰折形の青磁の大鉢で、口径は21cmである。53~56は稜花鉢である。なお、56は八角の明瞭な稜を持ち、54は輪花鉢ですべてが端反口縁を呈している。また、53は型打ち成形である。文様として、53の外面には遠山・草花、内面には東屋・樹木、見込みには波岩と東屋、54の外面には折松葉、内面には笹・梅、見込みにはコウモリ、56には菊弁区画、山水、七寶、方形区画、鳥、東屋と岩松、55には柳、家紋文、楼閣、岩、鳥、遠山を描いている。

② ソバ猪口 (第23図)

94~97で見込の深い小型のものである。汎用器として酒杯、たれ入れ、茶碗などに用いる。肥前系の磁器である。

③ 紅猪口 (第22図)

77~79で口径は4.6cm~5.4cm、器高は1.4cm~2.0cmと小型である。77, 79は菊花弁、78は蛸唐草の型押技法で作られている。

(3) 皿 (第17, 18, 19, 20図)

皿は形態により丸皿と角皿があり、大きさによって極小皿、小皿、五寸皿、中皿、大皿に分類される。

丸皿の49は口径が7cmで稜花の極小皿である。内側には唐草型紙摺りで折松葉の文様と口唇部には口紅の装飾がみられる。30~33, 37, 38, 46は口径が9.8cm~13.5cmの小皿、34, 35, 36, 47, 50, 64は口径が13.6cmから16cmの五寸皿、43, 45, 48は口径が18cm~20.3cmの中皿(39, 40, 41, 42も中皿か)である。なお43は端反皿、45は輪花皿、46は稜花皿である。44は大皿で低い高台の底部である。角皿の51は長方形の中角皿である。見込みにはハリ支え痕が付される。文様としては、内面に竹と岩、外面には雷文、外底部には「富貴長春」の銘が記され、1650年代の制作と思われる。52は菱形の角皿である。

(4) 蓋類 (第21, 24, 25図)

蓋類には、碗類(小碗・中碗・蒸し茶碗)の蓋、鉢類(蓋物・段重)の蓋がある。

59~63は口径が8.5cm~9.6cm、104, 105は口径が10.0cm~11.1cmで碗類の蓋である。61~63の見込みには蛇ノ目釉ハギが施される。59~63の文様には外面に角連弁、唐草文、鶴、草花文、内面には四方禪文、見込みには松竹梅を描く。106~111は口径が9.3cm~13.5cmで鉢類の蓋である。口唇部内側が舌状を呈し、106~110には頂部に橋摘みを持つ。文様には外面に蛸唐草文、丸、格子、蝶、105の見込みには蒟蒻文を付す。107は外面の文様は色絵で描かれている。

(5) 蓋物 (第24図)

98~103は蓋付きの鉢で、口唇部内側は小さな段を付し、無釉となる。98は半筒形の段重で、99~103は丸形の腰部となる。101の見込みには蛇ノ目釉ハギが施される。文様には外面に蛸唐草文、連弧文、銀杏葉、丸文がある。

(6) 仏飯器 (第25図)

112～117で、小坏または小碗に高台が付いた器である。高台は輪高台、半球状の凹みを呈する。117は帯線が付されるが他は無文である。仏壇に供える仏具である。

(7) 香 炉 (第25図)

118は胴部が丸く口縁部は外反し無三足形する。内面は無釉である。仏具の線香立てか。

(8) 花 瓶 (第25図)

119は台付きで頸部が絞まり外反する口縁部となる。仏花瓶で仏壇の両脇に飾る花瓶である。文様は花鳥文(椿, メジロ)が描かれる。

(9) 急 須 (第25図)

葉茶に湯を加えて煎じ出す器で、体、注口、手、蓋の組み合わせで作られる。120は腰部以下は無釉で、外面に幾何学文、楼閣山水文が付される。

(10) 油 壺 (第25図)

121は髪油壺で、胴径に対し器高が低く、頸部が絞まり短い瓶である。掌に数滴ずつ付けて髪に塗るため、持って降りやすい形状となる

(11) 散蓮華 (第25図)

122は散蓮華で、鍋や盛皿などから食物や汁物をすくって運ぶ匙である。内面に蔓と葉を描く。

2 陶 器 (第26～32図)

陶器の種類は碗・鉢・壺・皿・灯明皿・仏飯器・土瓶・散り蓮華・蓋等が出土した。陶器類は薩摩焼である。

(1) 碗 (第26図)

碗は小碗と中碗に分類される。

① 小 碗 (第26図)

口径が9 cm未満のもの(123, 128, 139～144)で、片手の指先で持ち酒杯、煎茶碗として用いる。139は腰張形、142は腰折形と端反、143, 144は腰折形である。123は腰部に千鳥文を付す。123は長田窯系、128は山元窯系、139～144は堅野冷水系の陶器である。

② 中 碗 (第26図)

口径が9.1cm以上12cm未満の碗(124～127, 129～137)である。片手の掌や両手の指先で持ち、飯碗、煎茶碗、抹茶碗などに用いる。125, 131, 132は丸形、131, 133～137は端反口縁である。124～126の腰部には千鳥文、127には草文、131には草文と「載」の文字、134には「門」と「一」、136には「寿」の文字有り。130は三島手、126, 127, 129～137は堅野系、124, 125は長田窯系の陶器である。

(2) 猪 口 (第26図)

口径が5.1cm未満の小鉢(145～147)とソバ猪口(148)がある。145, 146は端反口縁である。145の内面には褐色釉、146には短線、148には点文様が付される。全て堅野冷水系の陶器である。

(3) 小 皿 (第26・27図)

小皿は高台付と平底の2分類される。

① 149～153は高台付で口径は9.1cm未満で、見込に蛇ノ目釉ハギが施されている。149の外底部、150の見込には砂目が付着する。なお、138は中皿と思われ、見込に「十五才」の墨書有り。

② 154～165は平底の皿で、底部は糸切り底である。見込や外底部に4～5か所に砂目や目跡が残存する。

(4) 仏飯器 (第27図)

小坏または小碗に高台が付いた器である。高台の造りが台底半球状凹みを持つ(166～172)と中空の脚を持つ(173, 174)に分類される。高台部と脚内側は無釉である。166の見込には砂目、171, 172の見込は蛇ノ目釉ハギが施される。仏壇に供える仏具である。

(5) 灯明皿台 (第27図)

小皿に桶形の筒を乗せたもの(175～179)である。回転轆轤の痕跡を明瞭にのこす。外底部は糸切り底の無釉で、内外面全は褐色、飴釉である。山本窯のものである。

(6) 秉燭 (第27図)

台付たんころ形の(180～184)と桶形の(185)がある。灯火具の一種で、内面に油を入れ木綿などの糸で作った芯を立て火をつける。芯の部分には縦に溝を作る溝状芯立を設ける180, 185と横穴芯立の182, 183がある。台付たんころ形の180～184の制作時の軸孔がみられる。181には千鳥文が描かれている。

(7) 灯明皿 (第28図)

186～198は皿形の灯明皿で、底部は篋切りである。186は陶器の白薩摩で、他は土師質土器である。口唇部に芯を置いて燃やした煤が付着している。特に186, 190, 198の口唇部を一周して煤が付着している。

(8) 燭台 (第28図)

199, 200は蠟燭を乗せる皿形土器である。底部中央に蠟燭を固定するため軸の棒を立てるための孔が穿たれている。199は器面全体に煤がかかり黒色化している。201は桶形の皿で、口縁部に橋を架け、橋の中央に棒を挿入して固定するための軸穴を設けている。

(9) 香炉 (第28図)

香炉には反胴形と三足付きの2種類が出土した。

① 202, 203は半筒形輪高台である。202は口縁部は肥厚し、口唇部は平坦となる。宋胡録写しで連弧文、四方禪文を付す。203は口唇部内側に舌状の突起を有するが、口縁部内外面を丁寧打ち欠いて調整している。見込みには蛇ノ目釉ハギが見られる。褐色の釉が薄くかかる。

② 204, 205は三足鼎形で獅子の装飾が施される。205の口唇部は肥厚する。白薩摩である。

(10) 髪油壺 (第28図)

206～208は胴丸無首壺で外反する小さな口が付く。209は扁平形壺である。下部は無釉である。209は鶴、唐草、花の文様を付す。

(11) 鬢付盥 (第28図)

210は埋立て地から多数の木器等とともに出土した。平面形が細長く長径11.4cm、短径5.4cmで楕円形を呈する盥形の容器である。整髪の際、五味子(さねかずら)を水に浸して作った整髪料を入れ櫛を浸す化粧具である。内側底面に櫛を置いて使用した痕跡が観察される。底部裏側に「享保十三年□□□□」の文字を墨書で銘記している。貫入の白薩摩である。

(12) 仏花器 (第29図)

211, 212は内傾する胴部から頸部が絞まり外反する口縁部となる。頸部に小耳を施す。渴袖双耳仏花器である。

(13) 中瓶 (第30図)

213は直行する口縁部で肩丸形の長胴壺である。

(14) 仏花瓶 (第29図)

214はラッパ口形, 215, 216は輪高台, 217は外開き脚付き底部である。豎野系の白薩摩である。

(15) 壺 (第29, 31図)

218は輪高台で袋状体部となり, 頸部は絞まりラッパ状の口縁部となる。三島暦を模した三島手である。219, 220は広口壺, 221~224は赤褐色で琉球焼の長胴壺である。248, 249はサンゴ粒を胎土に含む外耳付き壺で琉球焼, 250, 251は広口壺で黒薩摩で苗代川焼である。

(16) 甕 (第32図)

252は口奇形頸部切立形で黒薩摩, 253は鏝付きの口縁部を呈し, 254口縁端部に波状文と蓮の花と葉を陽刻する径約80cmの大甕で琉球焼である。

(17) 片口 (第29図)

225は上げ底の口縁部下注口で丸形の胴部である。瓦質である。

(18) 蓋 (第30図)

蓋には急須, 土瓶の蓋で頂部に丸形の摘みを持つ(226~232)と凹の形状を呈したもので頂部が受け部より下位の位置にある(233~235)がある。装飾としての摘みを付している。231は唐草で薩摩焼, 232は琉球焼である。

(19) 土瓶 (第30図)

236, 238は上げ底で丸形。237は上げ底で三足丸形の土瓶で, 苗代川の黒薩摩である。

(20) 急須 (第30図)

239は横手形の急須である。

(21) 卸皿 (第30図)

口径11.1cmの小碗の見込みに2状に鋭い刺突で歯を突き出して作るものである。

(22) 鉢 (第31図)

鉢には丸形鉢(241で充実した輪高台を持ち, 龍門司の二彩である)と擂鉢(242, 243), 捏鉢(244~246)がある。245には口縁部に貝目が付く。黒薩摩苗代川である。

(23) 大皿 (第31図)

247は口径41.4cmの大皿である。口縁部直下に櫛描き波状文を施す。

(24) 火鉢 (第32図)

255は素焼きの桶形火鉢である。

◆ 竈 (第32図)

256は靴形の素焼きの竈である。底は楕円形で, 本体は片方に窓を開けた風口を設けている。

(26) 鞘 (第32図)

257は釜道具でやや内傾する鞘鉢である。内外面に薄い白色釉がかかる。

◆ 張形 (第32図)

258は男性器を模した白薩摩の張形である。人肌のお湯を入れて使用したものといわれる。

3 外国製陶磁器 (第33図)

259は陶器, 他は全て磁器である。259はオランダ・マーストリヒトの転写皿の底部である。見込みに染付楼閣と樹木の図柄をコバルト・ブルーの釉のにじみで表現する。裏面には「・・E CHINA」, 「・・LLOW」の釉文字と「P. REGOUT 19 MASTRICHT」を印版でマークしている。19世紀頃のものと思われる。中国清朝の染付けは, 260, 262, 268の皿, 263小碗, 264~266碗, 269, 271, 272の猪口, 273の鉢, 274の中碗と270の白磁猪口がある。この中の268の皿には焼継ぎがみられ, 274は赤・黄・緑色絵の猪口である。清朝の碗の底部は高台となる特徴がみられる。261の磁器皿は中国産で沖縄湧田窯のものと類似している。

4 焙 烙 (第34図275~294)

形状は, 底部は平底で底部から体部は丸みを帯び, 口唇部が幅広に創りだされた丸縁口縁でやや内傾する口縁部を呈する土師質の皿形を呈する。口縁部の一カ所にフライパンのような細長い把手を斜めに取付けた調理具土鍋の「手付焙烙」である。胎質は土師質である。内底面にろくろ痕を顕著に残し, 底部は篋切りとなる。全体的にススが付着している。口径は13.2cm~19.2cm, 底部径10.3cm~14.0cm, 器高2.5cm~4.3cm, 把手の長さ3.8cm~4.9cmのもので, 大型でほぼ似たような規格で画一化した焙烙である。

5 木製品 (第35~44図), 竹製品 (第40図) 他

木製品, 竹製品はすべて埋立て造成地のE12, F12・13区から多数出土した。

(1) 漆 碗 (第35図)

295~302は胴張形の漆器碗である。295, 297~300は内外面ともに黒漆, 296, 301~303は内外面ともに朱漆の漆器である。303は高台は欠損するが, 口径13.8cmで朱漆の坏である。

(2) 櫛 (第35図)

304~309は櫛で6本出土したが本体や歯は欠損, 欠落している。背は弧状にカーブす304, 305, 306とやや平坦気味の307, 308, 309がある。304は小型の唯一完全品である。304, 307は黒漆塗の櫛である。

(3) 引き戸 (第35図)

310は7cm前後の木製品の小片で詳細は定かでないが, 丸形の取手部分らしい剥落の跡から引き戸の一部片と想定され, 黒漆塗りの薄板に金粉で梅文の装飾を施した蒔絵である。

(4) 杓 子 (第36図)

311~314は杓子で, 311は黒漆塗りである。身の両脇は欠損している。314は身の部分は平坦で作りも粗悪なものである。

(5) 曲物 (第36図)

315は曲げ物で底板もきちんと残っていた。体部の重なった接合部分の2カ所には, 丁寧に縫い込んだ桜樹皮で固定している。

(6) 刷 毛 (第39図)

333~337は刷毛である。柄部と両端に広がる三角形または半円形の基部からなり, 周囲は丁寧に面取りする。植物繊維をはさむため平板を柄部中程まで切り込みを入れ, 先端部の上下に

紐通しの小孔が貫通しており、柄部の上位には紐通しの穴を穿つ。333には棕櫚の毛先が遺存している。

(7) 篋 (第39図)

338～340はみそ篋に当たると推定される。平坦で細長い柄部から片側のみ半円形状に広げて作られた基部からなり、周囲は丁寧な面取りされている。基部の半円形状端は先端がすり減り尖って遺存する。341はみそ篋に形は類似するが小型のものである。343～346は細身の篋で、頭部は三角形及び斜めに切り落とし、先端は両面から鋭利に加工している。

(8) その他の木製品 (第36～38, 40, 41図)

342は四面体からなる先端を尖らせ、頭部に装飾の切込みと紐通しの穴を穿つ墨壺の一部と思われる。

316, 317はすりこぎ棒である。318は長さ28cmで小型の杵状木製品であるが、中央凹部には摺れたような摩擦痕が観察されることから、回転を伴う機具の部品とも考えられる。319は長さ14.3cmの小型の敲打具である。握り手の部分は若干摩耗し、回転時に付く細い条痕が遺存している。320は方形の重箱の蓋で半分は欠損する。素地には黒漆の刷毛目の痕跡と表面は赤漆のものである。321は一木作りの角板である。「伊一」の刻文字を有す。322, 323は高膳の脚で略ハート形の透かし彫りを施す。324は寄木作りの円形重箱の蓋で黒漆である。325は長さ57cm、柄は平坦に支上げ、片方の先端部は円盤状に加工する棍棒状木製品である。326, 327は柄鏡の箱物で、縁側部分には縁板を固定する釘穴の痕跡がみられる。328, 329は一木作りの丸盆である。328には釘穴がみられ、内面には敷物の繊維が付着していた。329には内面に規格性をもった釘穴があり敷物を装着したものであると思われる。なお、口縁部が直立していることから蓋の可能性もある。330は一木作り大型の楕円形皿である。全体が大きく変形しているが残存状態は良好である。321は楕円形の大型曲物の蓋の一部と思われる。縁側には縁板を固定する留め具に桜皮を用いている。332は両サイドに突起と中心部に円孔を有す木製品で、突起部は摩耗し、円孔部には両面から釘止めの痕跡がみられ、回転物の機具のパーツと思われる。

347～350, 362は竹製品と組合わせの木製品である。347, 348は番傘で、柄は竹製、頭部は木製で傘の骨を繋ぐ支点部分にあたり、柄と頭部は竹串で固定してある。349は扇の骨である。6本が残存し、扇の骨をとじ合わせ部分の要の小穴も残っていた。骨は要部分から先端部にかけて幅は広い。長さは29.2cmの比較的大型の扇である。350は平たく加工した竹製の柄に弓形の木製の身を装着した製品であるが、用途は不明である。362は径44cmの箆の身部分である。縦は1cm弱の薄ひご2枚を一組とし、横は幅5mm厚さ1mmの竹ひごを編み込んだものである。351は棒状に加工した木製品である。中は丸い空洞となり頭部には切込んだ溝を巡らし、片面のほぼ真中付近から半裁されるものであるが用途は不明である。352は提灯の柄である。353は円盤状木製品で丸形の栓穴を有す樽のかがみ蓋である。蓋は組合わせで継目の穴が2個残存している。354, 355は片方を細く仕上げる棒状の栓である。356は木製の直径5.2cmの輪車を装置する滑車である。上部に吊り下用の紐通し穴が貫通している。357は桶の把手部の片方である。上位に太い紐通しの穴2個を穿っている。358は桶の把手部の片方で、上位に平板状握手を装着するための方形の穴を設けている。焼印が押されている。359は桶の取手部分で両サイドか

ら切込みを入れている。360は緩やかな弧状を呈し、両サイドには切り込んで加工した逆凸起を持つ加工品であるが用途は不明である。361は敷居の角端部と思われ中央部と内側に約4cmの溝が彫り込まれている。

363は棕櫚で作られた手箒である。柄の部分や本体は棕櫚紐で縛り、強固に固定されている。

(9) 下駄 (第42～44図)

下駄は、完形品とその形を留めた実測可能なもの総計113点が出土した。なお、構造下駄の歯は多数出土した。

出土した下駄は、形態、形状から、台と歯を同一の材より削り出した一木づくりの下駄(52点)、台と歯を別々に作り組み合わせる下駄(30点)と二枚の板を接合する構造下駄(18点)、無歯下駄でいわゆる草履下駄(13点)の3種に大別される。さらにこれらは、台の形態、壺の有無、歯の位置、歯の数などにより9つに分類し、本報告書にはこれら細分した代表的な下駄のうち20点を掲載した。

I 一木下駄 (第42図364～370, 43図371～375)

一木下駄はA類～E類の5つに分類し、いわゆる連歯下駄である。

I A類(364～368)は2本の肉厚の歯を直線的に有したものである。I A a類(364, 365)は台が方形を呈し、前後の目は歯の外側に設けるもの18点で全体の16%、I A b類(366, 367)は台が丸形を呈し、後の目を歯の間に設けるもの14点で全体の12.3%、I A c類は台裏が寄棟状を呈し、目は歯の外側に設けるもの1点の0.8%である。いずれも目は三ヶ所設ける。

I B類(369, 370)は小判状の形をした露地下駄でいわゆる庭下駄などと言われるものである。I B a(369)類は台裏の前後を箱状に削り抜いて歯としたもの1点、I B b類(370)は台裏の前後に充実した歯を寄せて作りだし、前の鼻緒隠しは小さく屋根形に削るもの5点である。子供用の下駄である。目は3カ所設ける。

I C類(371～374)は三ツ歯下駄である。形態的にはB類と同様なものであるが、後歯の外側は断面が三角形を呈し、I B類と同様の露地下駄あるいは庭下駄である。I C a類(371)は前歯は箱状に削り抜き、後歯は充実するもの4点、I C b類(374)はI B b類と同様、前の鼻緒隠しを小さく屋根形に削るもの5点、I C c(373)類はI B b類の両側面に方形の歯を作りだしたものの1点で、373は鼻緒が残る。I C a類、I C b類、I C c類は目は3カ所に設けている。I C d類(374)はI C b類と形態は同じであるが目が無く釘穴が残るもの2点である。いずれも小判形を呈している。

I D類(375)は工具痕を残す荒仕上げの一木下駄で、充実した歯を作り出している375の1点である。歯は台の幅より広く、前歯の断面は三角形を呈す。目は無く釘穴がみられ、また止め紐が残る。

II 構造下駄 (第43, 44図376～381)

構造下駄はII A類～II C類の3つに分類した。

II A類は台と歯が分離し、台裏は寄棟状につくり、台のホゾに歯を嵌め込む差歯下駄である。歯の形状は台形のいわゆる銀杏歯である。II A a類(380, 381)はホゾに嵌め込まれた歯が台を貫通し木口が表に露呈する露卯下駄である。柄は3枚で幅2mmと極めて薄く丁寧に仕上げた

26点である。ⅡA b (378, 379) 類は歯を嵌め込むホゾに留まり台を貫通しない陰卯下駄4点である。目は3カ所に設けている。

ⅡB類(376)は小判形を呈し、前後に充実した直線的な歯を作り出した2枚の台部を接合した中折れの三ツ歯下駄である。目は無く釘穴がみられる1点である。台の表面には敷物である繊維の一部と止め紐が残されていた。

ⅡC類(377)は小判形を呈し、台の縁の形状に合わせた充実した歯を前後に作り出し、台接合部は凸凹に切り込んだ2枚の台部を、台部の凹凸部をかみ合わせた中折れの下駄16点である。目は無く釘穴がみられる。

Ⅲ 草履下駄 (第44図382, 383)

台裏が平坦で、台裏がそのまま接地面になる無歯下駄である、いわゆる草履状下駄である。

ⅢA類(382)は一木づくりの草履下駄3点である。382は台裏の中程に切り込みを入れ、中折れとなる。台の表面には敷物の繊維痕を残している。小判形を呈する。

ⅢB類(383)は半小判状の2枚の台を接合し全体が小判状の形となり、中折れ状の構造下駄の10点である。383は釘穴と止め紐が残る。

総数113点の下駄のうち、下駄は88.5%、草履下駄は11.5%である。また、一木づくり下駄は46%、構造下駄は42.5%で、おおよそ比率は均衡する。

(10) 木 簡 (第45, 46図)

木簡は384~405, 408の23本で荷札・付札の類である。荷札として上下に紐を通す穴を穿つ385, 386, 391, 上下2カ所に2個ずつ4個の紐穴を持つ396, 上の部分の1カ所のみ紐穴を持つ384, 387, 388, 389, 390, 394, 395, 横に穴を持つ392, 397, 399, 先端部を尖らせる付札の404, 405がある。また、400~403は残片のため詳細は不詳である。これら木簡には385の「菱刈五右衛門」、386の「平田武太夫」、389の「伊東吉右衛門」、396の「上村半左衛門様竹内善兵衛」等の個人名や、386の「四月十日」の年月日、390, 394には「鉢」や「七盃」と品物や数等を記述するものがあるが、墨切れや保存状況の粗悪等により文字の判読は困難であった。特に注目されるものとして、384は縦16.4cm, 横3.7cmの荷札である。表に「国頭間切 楊梅皮六拾斤奥間村 包七斤」、裏に「巳 六月廿四日 地頭代 邊野喜雲上花押 検見松本(村) 雲上」の記銘があり琉球との交易を示す貴重な考古資料である。楊梅とは「ヤマモモ」のことで、主に植物性の染料として用いられる。また、408は角井戸の底から出土した縦36.1cm, 横17.8cmの杉板を素材に、上部の両側面に浅い切込みを入れた人形木簡である。片面に「□□□□, 婆娑羅帝婆, 護摩底悉」の墨書きであり、井戸を破棄した時のお呪いの札として埋納されたものと思われる。

(11) その他の墨書 (第46図)

406は方形の重箱の蓋と思われる。表裏に判読不明の墨書がある。407は杉材の平板に墨書による人物?, 幾何学文?等の落書きが記入されている。

6 石製品 (第47, 48図)

(1) 硯 (第47図)

8点の硯が出土した。409を除いた他は長方硯で、角を丸めてある。石質によると滑石(409),

砂岩(411), 千枚岩(410, 412, 413), 頁岩(414~416)に分類される。414, 416は裏面にも方形の浅い窪みを彫り込んでいる。410, 413~416は丘の墨道を顕著に残し, 特に, 410は丘から胸, 海にかけてほぼ水平に近く墨道も大きく窪み, かなり使い込んでいる。410は裏面に「中村八兵衛」, 416は裏面に釘彫りで「赤間関」の文字がある。409は猪飼中央御借地から出土した装飾を施した滑石製パレット形の硯である。縦14cm, 横11.8cmの方形で左上端に左親指が入る穴を開け, 手のひらに収まる大きさである。裏面周辺の縁には丸形彫刻刀の加工具刃跡を顕著に残すことで装飾し, 表には磯の岩に叩きつける波しぶきと泡を彫り込んでいる。円形の中に丘と海が彫られ工具痕を残している。なお, 裏面には「天保八年 酉 六月日 千竈氏」の線刻文字が彫られ, 年号や人名を特定できる貴重な資料である。また, 細い釘先で文字らしい落書きの痕も観察される。

(2) 砥石 (第48図)

砥石は4点で, いずれも四面ともに砥面としている。417~419は中砥であろう。420の三面は窪みが著しく, さらに片面の端部は大きく窪み荒砥と思われる。砥石は使用することによって変形し, 破損する。従って寸法等の計測は目安としたい。

(3) 墓石等 (第51図)

469~478は抱真院跡から出土したものである。468は凝灰岩製の石塔の宝塔部である。2段に蓮葉の花座を模し, 球形の宝珠には縦に3列の刻目の突起を配す。470, 474は石塔の笠, 471, 472は石塔の台座, 473~478は墓石と台座である。473には「文政三年 川・・ 九月吉日 奉寄進」, 476には「・九十 弥兵 甚平」の銘が印刻されている。475は笠に類似するが真中に円孔が貫通している。

(4) その他の石製品 (第51図)

479は軽石製の加工品である。直径4.9cm, 高さ1.7cmで内側には円形の窪みを入れ, その中に小円の2個の穴を穿っている。480は軽石製の紡錘車で直径6.7cm, 厚さ2cmである。

(5) その他の土製品 (第48, 51図)

421~472は双穿状紡錘車である。7個が出土した。481は羽口である

7 その他

(1) 瓦 (第49図)

瓦の種類は軒丸瓦, 軒棧瓦, 丸瓦, 樽瓦, 平瓦が出土した。

① 軒丸瓦 (第49図428~430, 434, 434)

周縁は素文で, 内区に連珠紋と三巴紋の組み合わせである。巴は左巻きの三巴紋である。連珠の数は429, 434が13個, 428, 430が12個のものがあり, 珠径は1cm前後である。また, 428の周縁下部は幅が広く楕円形を呈している。

② 軒棧瓦 (第49図433~435・435)

軒棧瓦は多数出土したが, 残存の良いものを抽出して掲載した。軒棧瓦の軒丸部の径は9cm前後。軒丸部は軒平部の左側に付す。軒丸部の連珠紋の数は, 11, 12, 13個の3種類があり, 三巴紋は左巻きである。435の中心飾りは, 中央に花形, 脇はY字状, 尊は単線, 唐草は単線で先端が細くなり, 子葉は先端がY字状となる。

③ 丸瓦 (第49図436, 437)

丸瓦は破損の少ない2点を掲載した。いずれも凹面に布袋痕と篋状差し子がみられる。437の玉縁長3cm, 小口は丁寧に面取りが施されている。

④ 樽瓦 (第49図438, 439)

438は本体は平坦で, 片方が屈折して一段高い平坦面となる。439は左側で下方に屈折して段を有して平坦面となる。止め金具の穴を穿ち, 釘破片が付着している。

⑤ 平瓦 (第49図440)

440は止め金具用の穴を設けているが, 穴は焼成時に詰まったもので貫通していない。○の刻印が付される。

(2) 円盤状加工品 (第50図)

円盤状加工品には, 陶磁器の胴部片を転用した扁平なもの(441~454)と, 陶磁器の蓋や高台, 底部を転用したもの(455~468)の2種類に分類される。

441, 442, 444~454は陶器, 443は磁器片の周辺を細かく調整して, 扁平に仕上げたものである。大きさは径約2.2cm(441)~5.6cm(447)である。455~457は陶器の蓋を転用し, 外縁を細かく10数カ所を打ち欠き, 458は陶器の壺または瓶の底部を転用したものである。459, 465は陶器, 460~464, 466~468は磁器の碗や皿の高台付底部をそのまま残して転用し, 加工面を丁寧に研磨する。また, 459~468の平面形は略円形となるが, 片方に尖った突起を設けている。466~468は八角形に仕上げたものである。これら円盤状加工品は, いわゆるメンコ形で, 玩具としての用途が考えられる。

(3) 土製品 (図版36)

当遺跡からは, 帖佐人形の童人形, 武者人形, 芸者人形, 地藏(482, 483), 土鈴(523~526), 鳩笛(527~529)をはじめ, ミニチュア土製品が落ち込みIから多数検出された。ミニチュア土製品には, 唐人または琉球人(486), 狛犬頭部(489), 女性頭部(490), 少年(488), 大黒天(485~488, 505), 狛犬(510~515), 雛人形(495~497), 武者(498, 499), 力士(504~506), 灯籠(508), 太鼓(516), 軍人(519-東郷元帥?), 男性器(521), 家(522), 土鈴(523~526), 鳩笛(527~529)がある。これらは型づくり型やあわせで押し型中空のものとの制作技法を用いている。また, 雌型の破片も出土している。

(4) 古銭(図版37)

古銭は74枚が出土した。その内訳は, 寛永通寶62枚(530~591)と同開珎の文字, 天禧通寶1枚(594), 常平通寶1枚(596), 天保通寶1枚(603), 一銭硬貨4枚(599~602), 十銭硬貨1枚(597)である。

(5) 印章 (第52図)

604は石英質の印章と思われる。底面は7cm角で, 高さ2.2cmの立方体であるが, 頭部から斜めに切り落としている。底面と側面の二カ所に「別」の文字をそれぞれ印刻する。

(6) 装身具 (第52図)

605は濁った黄色ガラス製の簪と思われ, 2本が出土した中の一つである。中程から欠損しているが現存長8.4cm, 幅約6mm, 厚さ2mmで, 頭部直下に桜紋を彫り込んだ装飾が施されて

いる。606, 607は銅製のものである。頂部には耳搔き状の小円形の受けと二股の足からなり、長さは606が約12cm, 607が約18cmである。

(7) 煙管 (第52図)

608, 609は金属製の煙管の雁首部分である。火皿接合部には補強帯は無い。いずれも羅字の一部が残存する。610は吸い口である。

(8) 刀装具 (第52図)

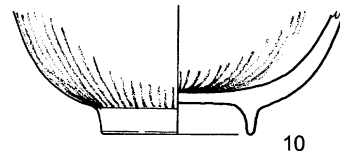
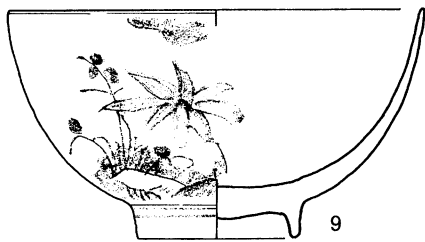
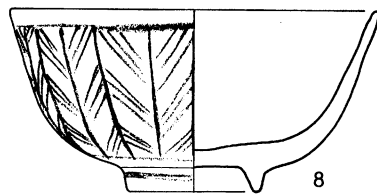
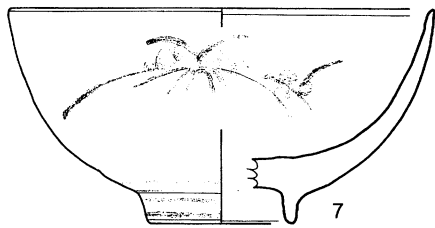
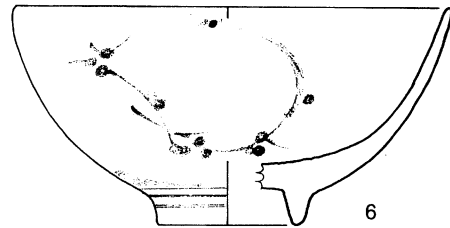
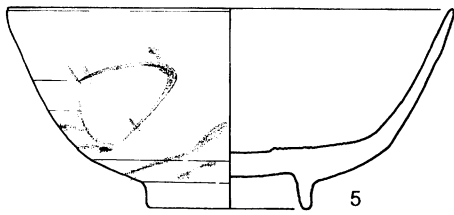
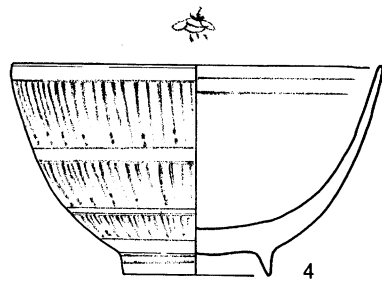
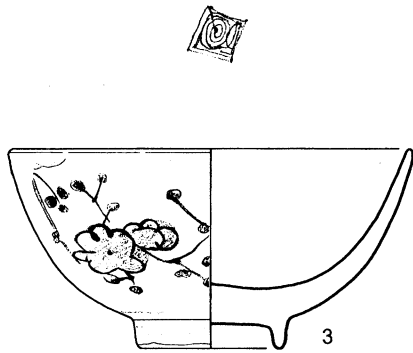
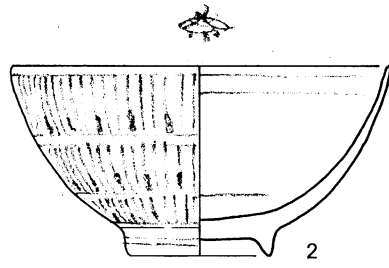
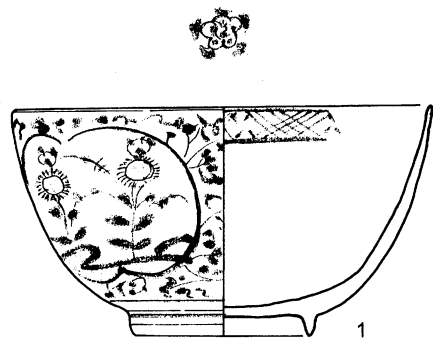
611は刀の銅製の鏝止めである。長径4.2cm, 短径2.4cm, 刀の身丈は約2.6cm, 峰幅6mmの刀であろう。

(9) 鉄砲玉 (第52図)

612, 613は鉛の玉で、直径約1.4cm, 長さ約2.5cmで中空で仕上げている。

(10) 植物遺体 (図版)

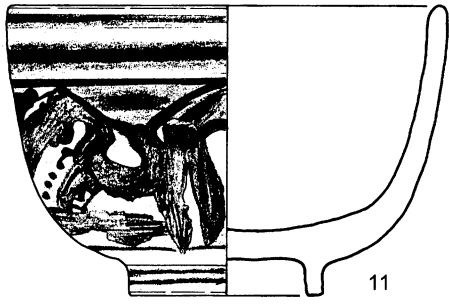
F-13区から、アダシ実や、ウメ核、モモ核、ウリ科の種子が出土した。



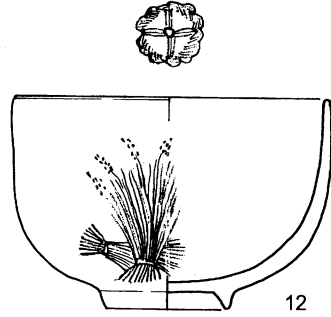
大目
全



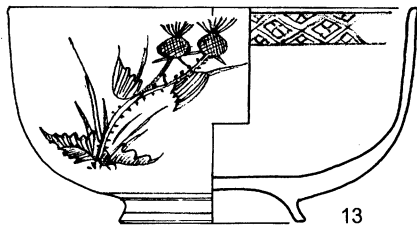
第14图 磁器 1



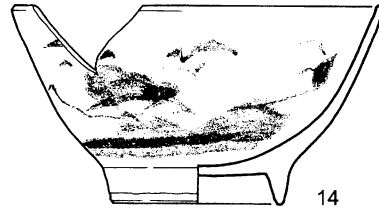
11



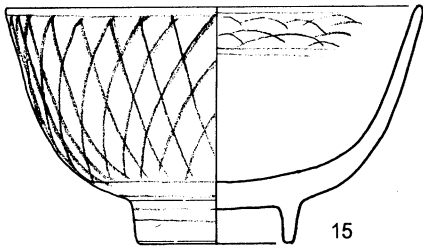
12



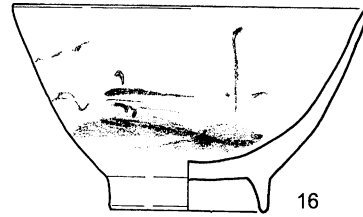
13



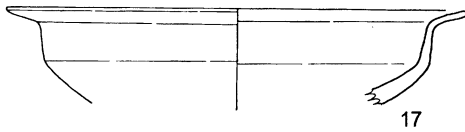
14



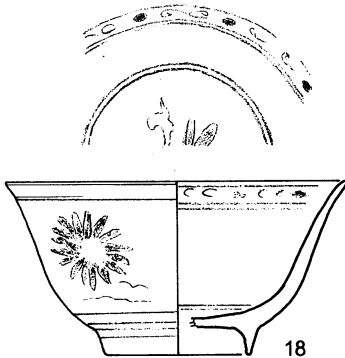
15



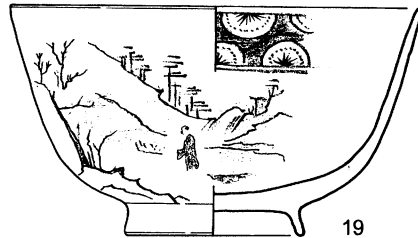
16



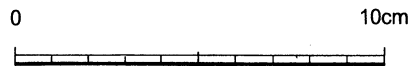
17



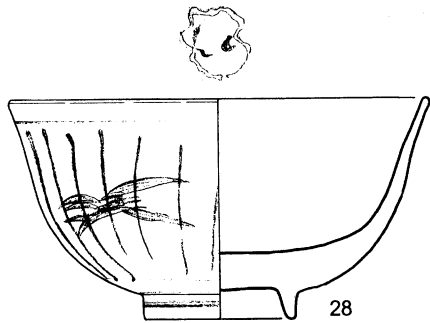
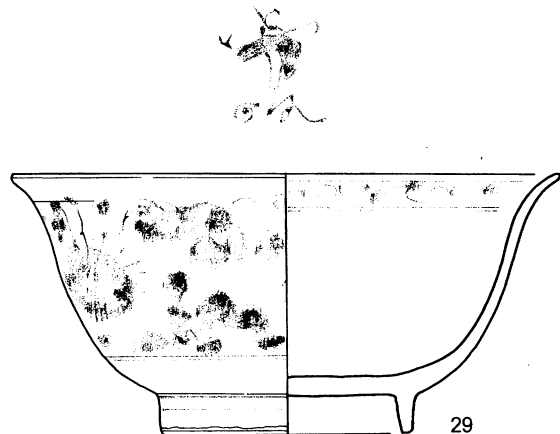
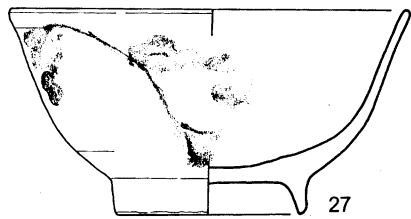
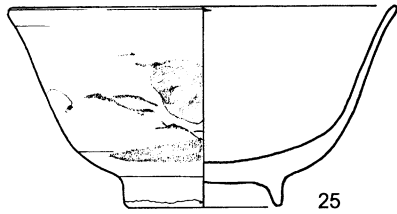
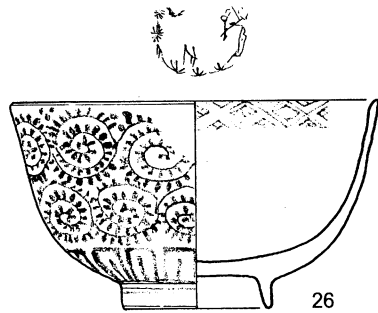
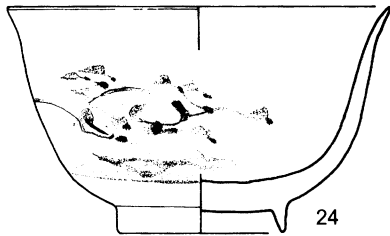
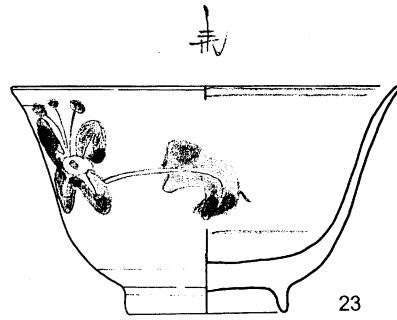
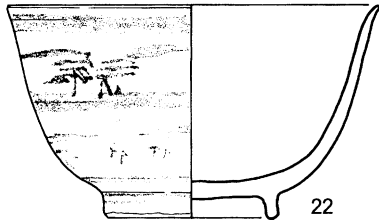
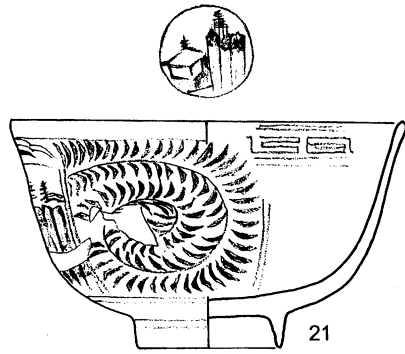
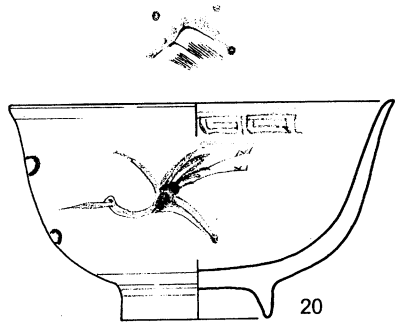
18



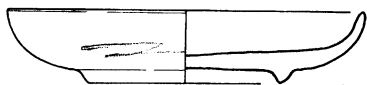
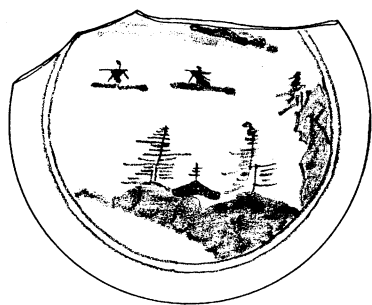
19



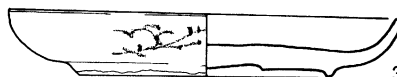
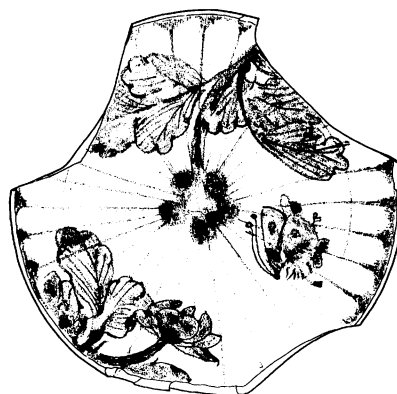
第15图 磁器 2



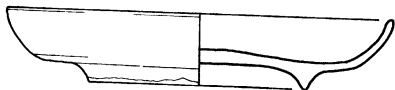
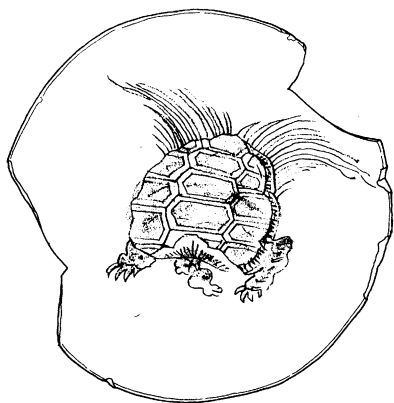
第16图 磁器 3



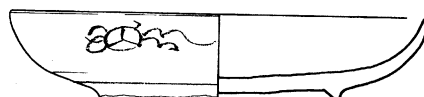
30



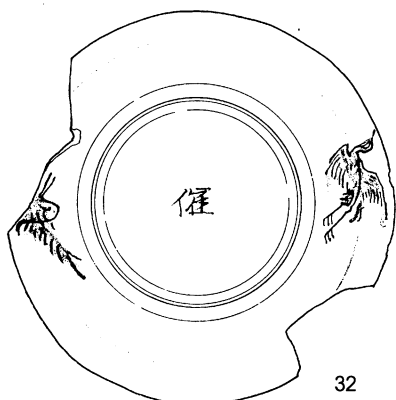
31



32

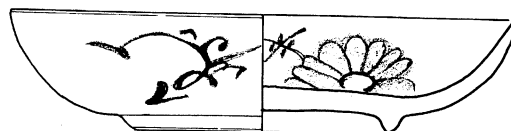


33



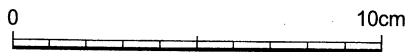
催

32

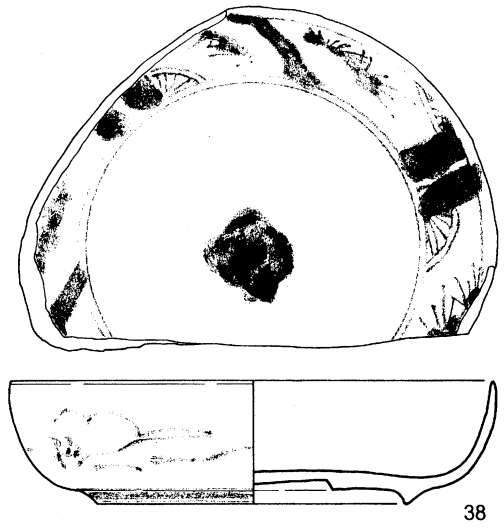
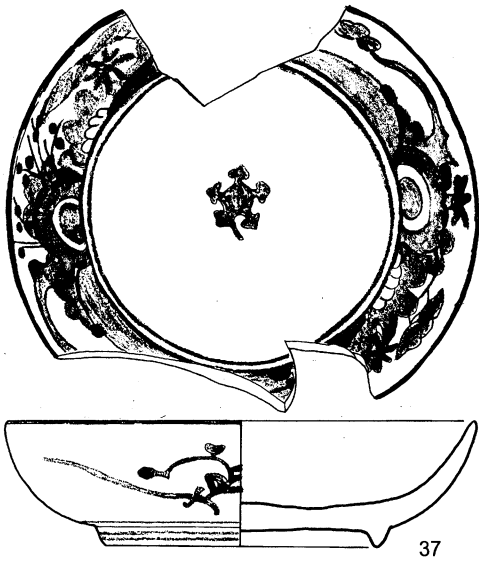
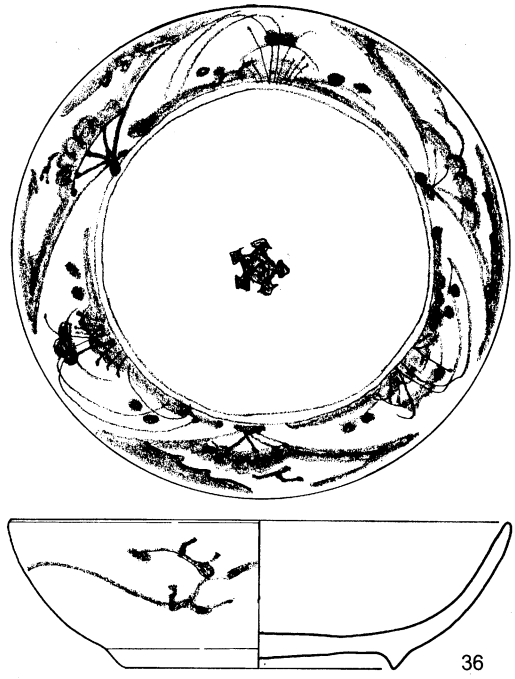
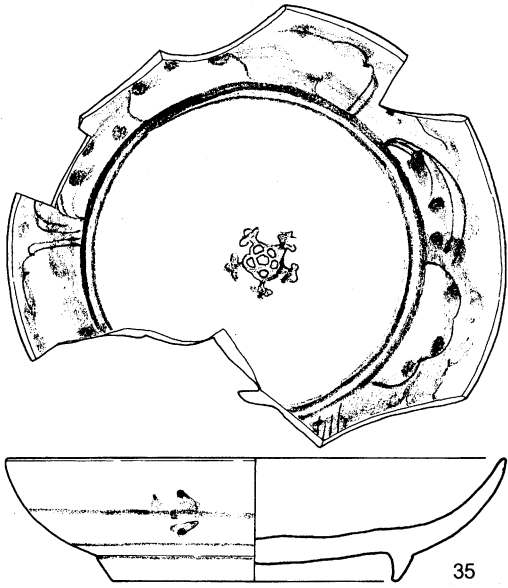


34

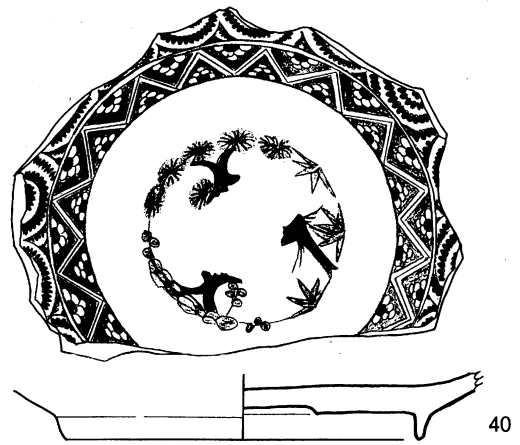
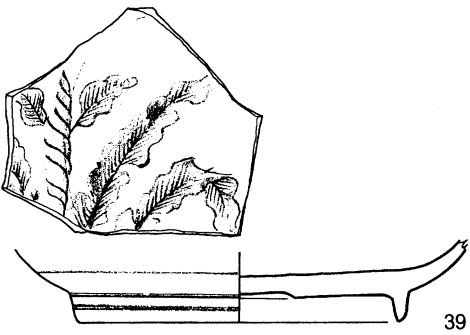
川
元



第17图 磁器 4



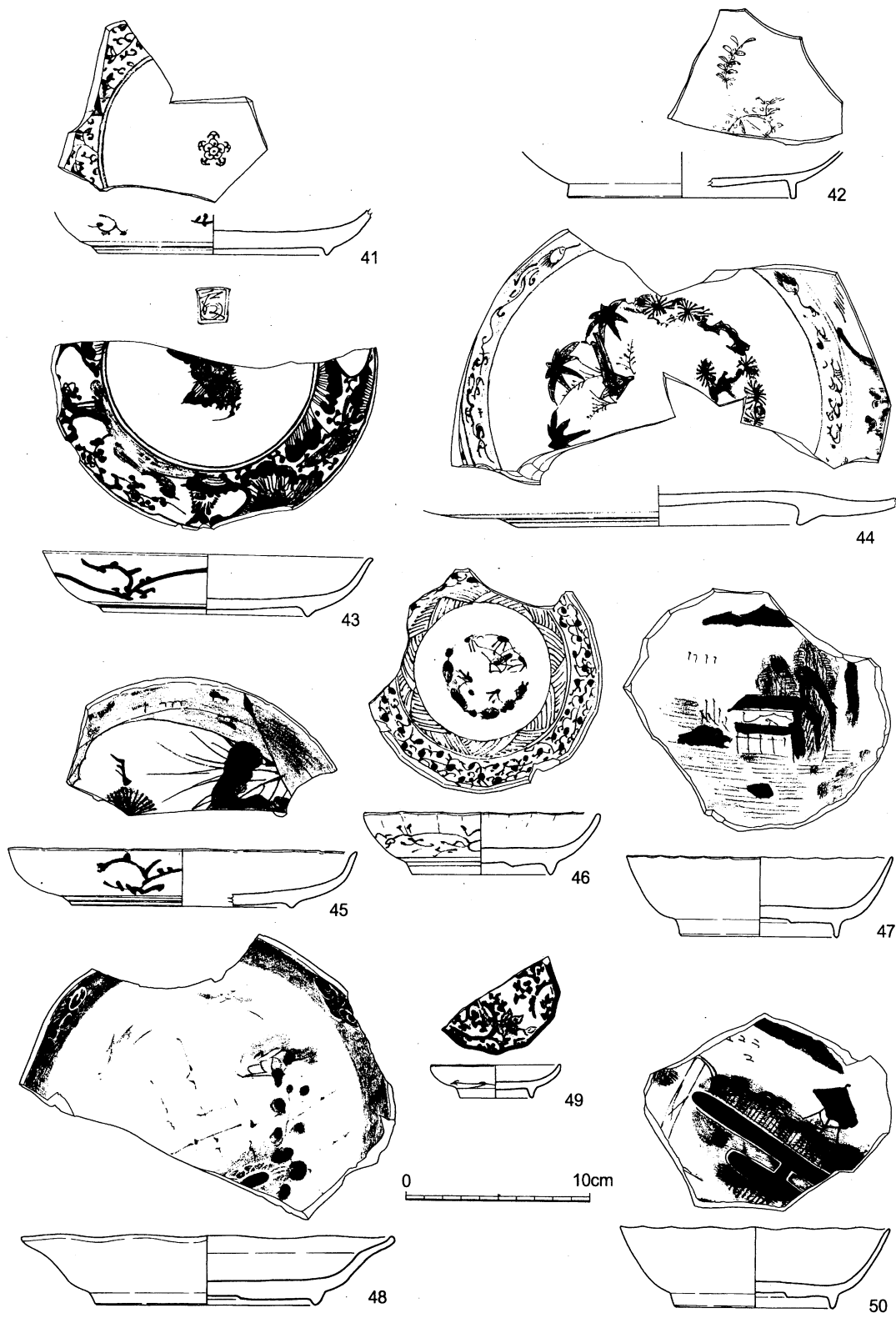
1
2 III



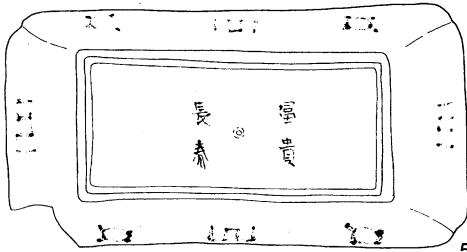
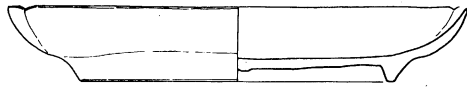
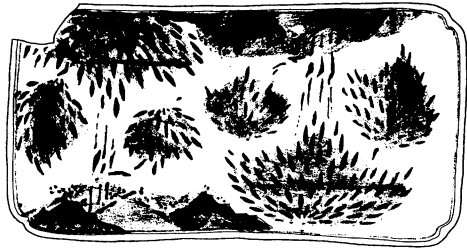
5
6

0 10cm

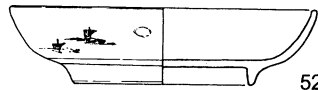
第18图 磁器 5



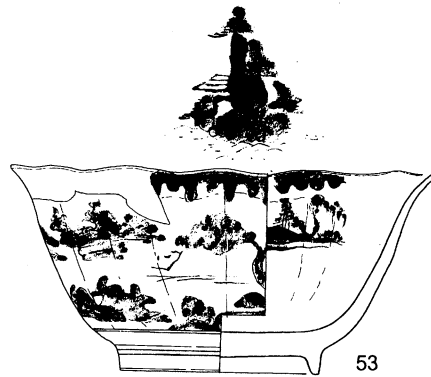
第19图 磁器 6



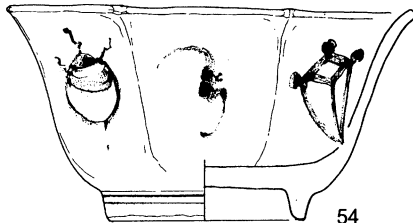
51



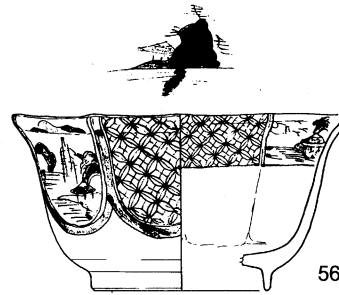
52



53



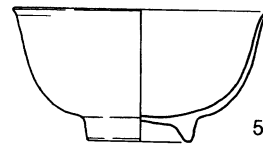
54



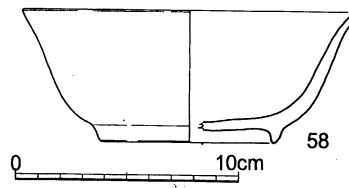
56



55



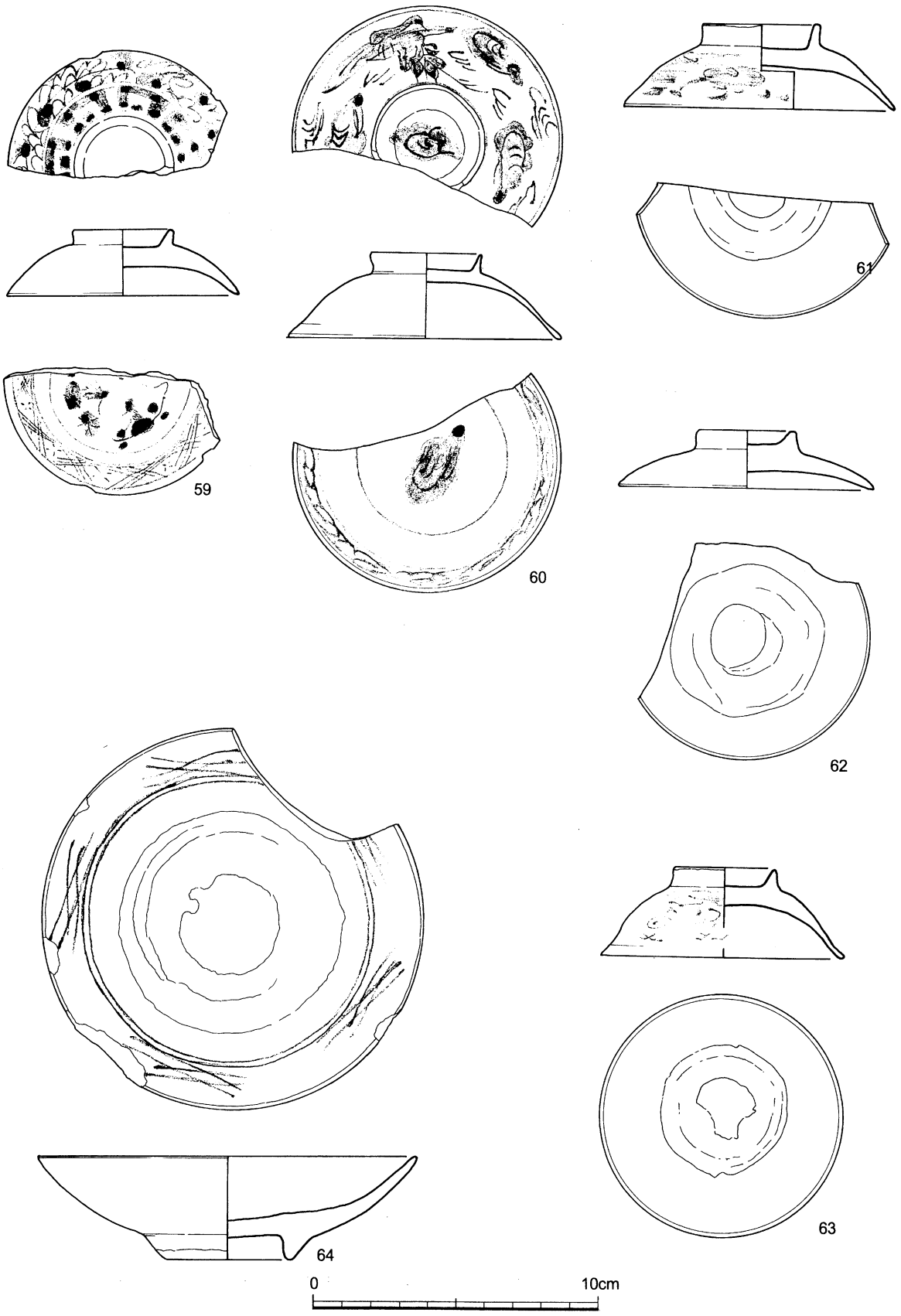
57



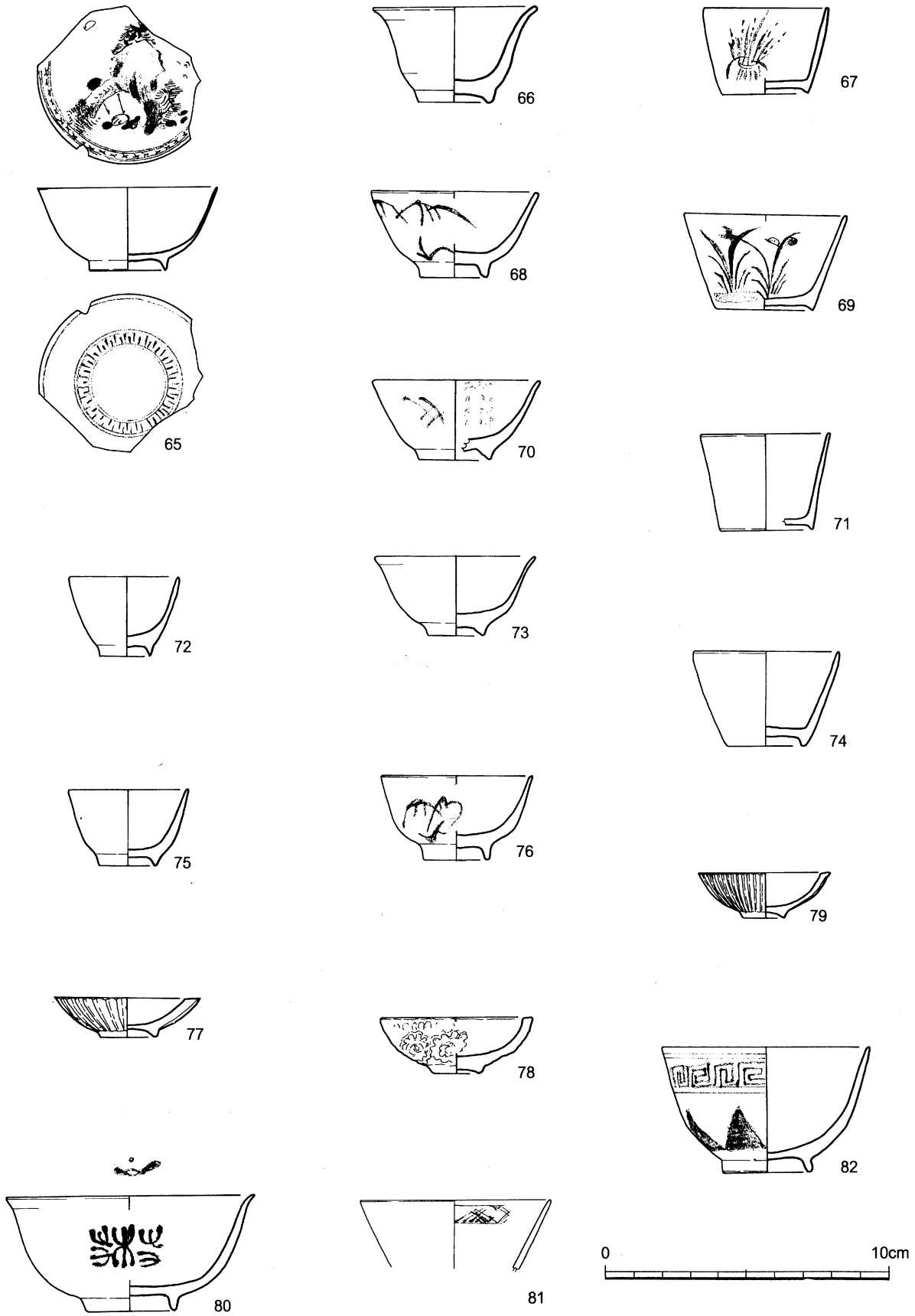
58



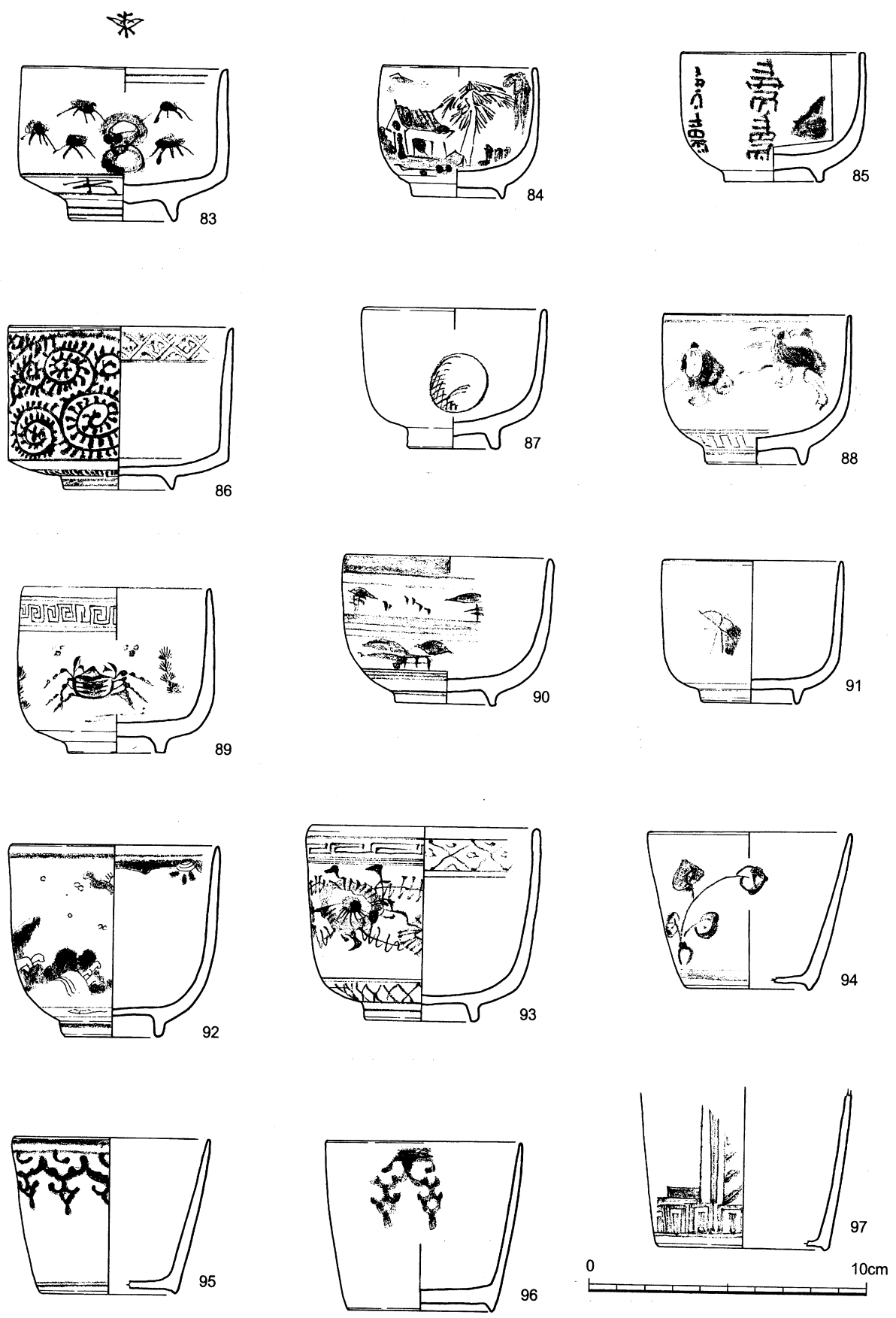
第20図 磁器 7



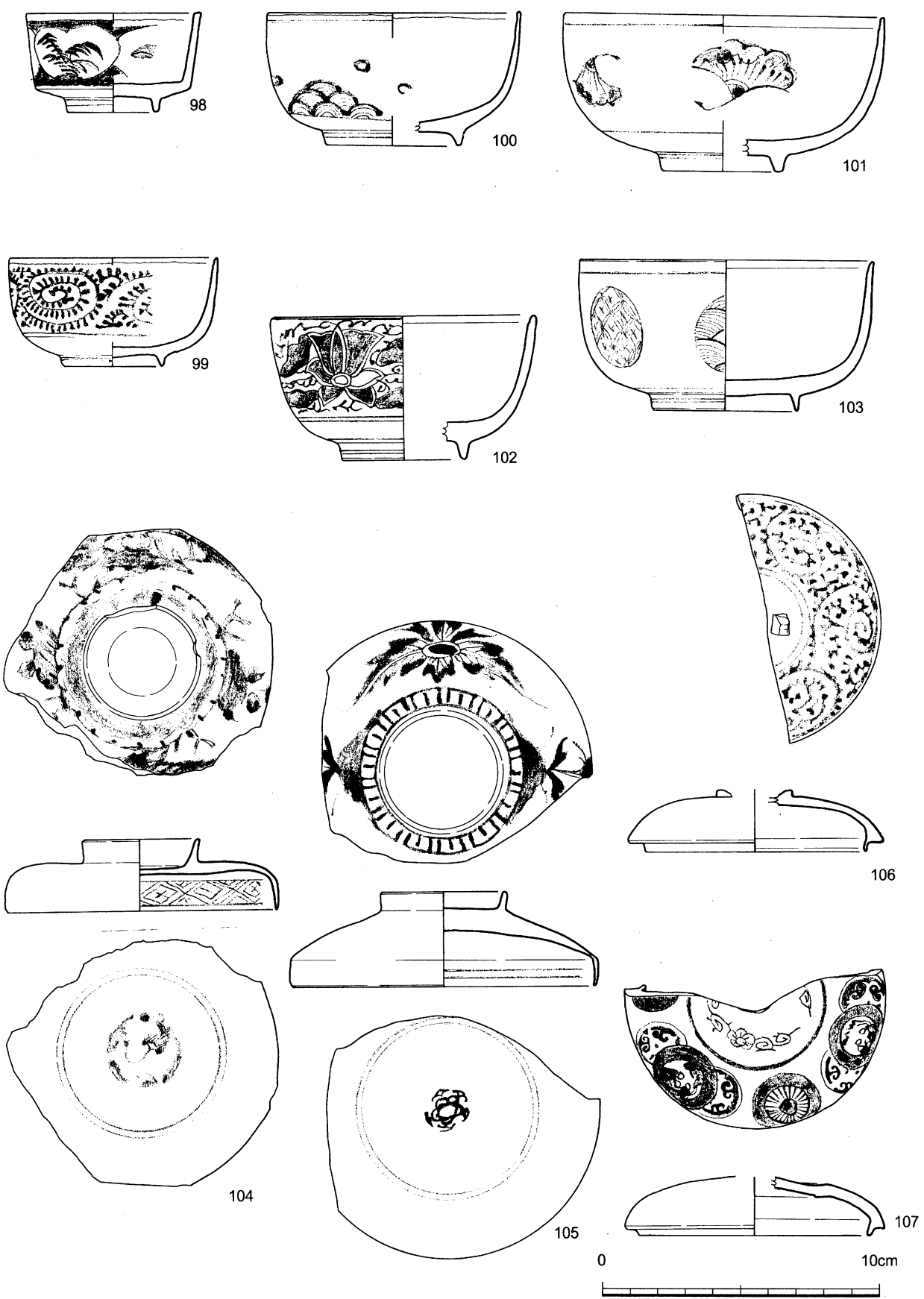
第21図 磁器 8



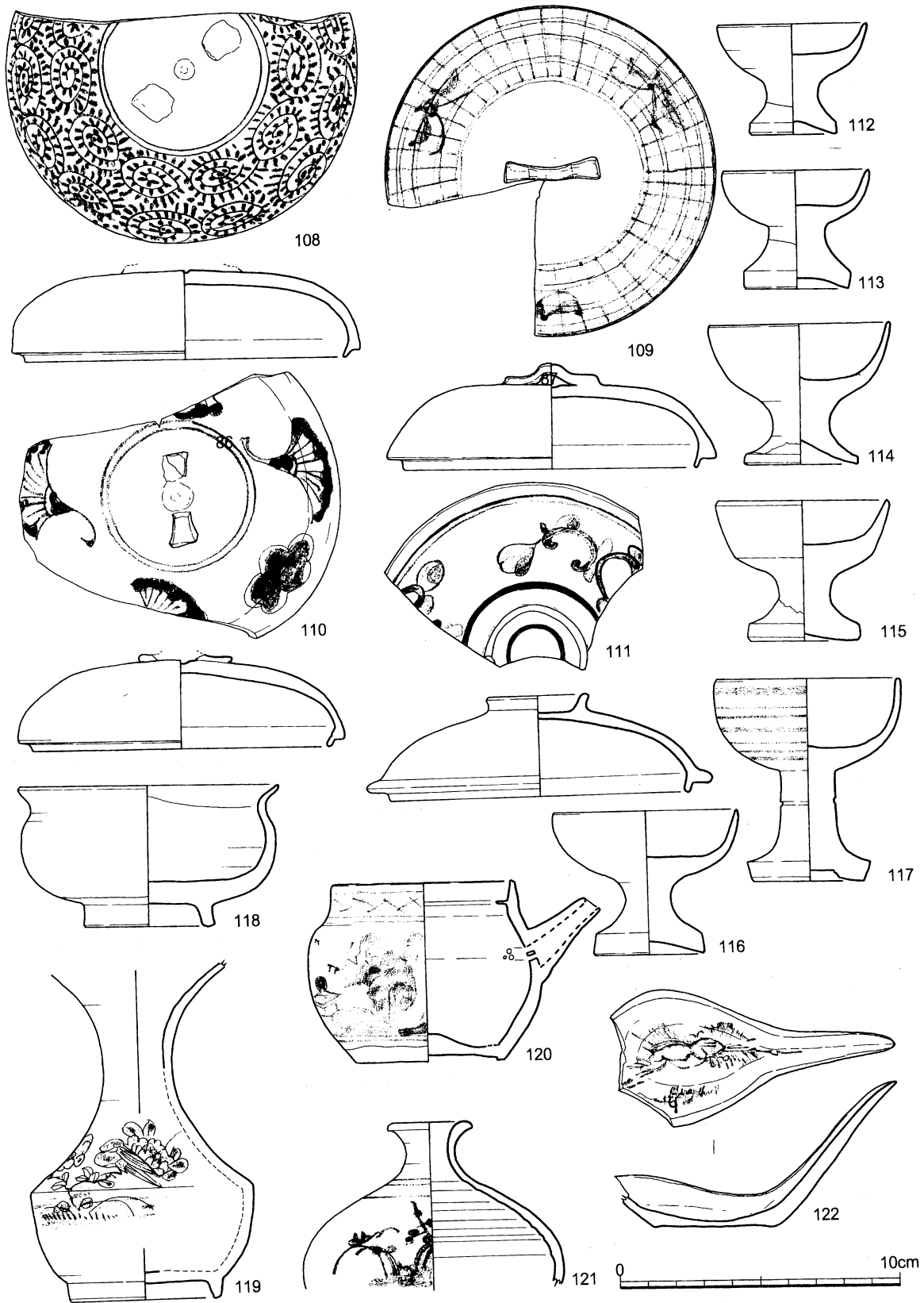
第22图 磁器 9



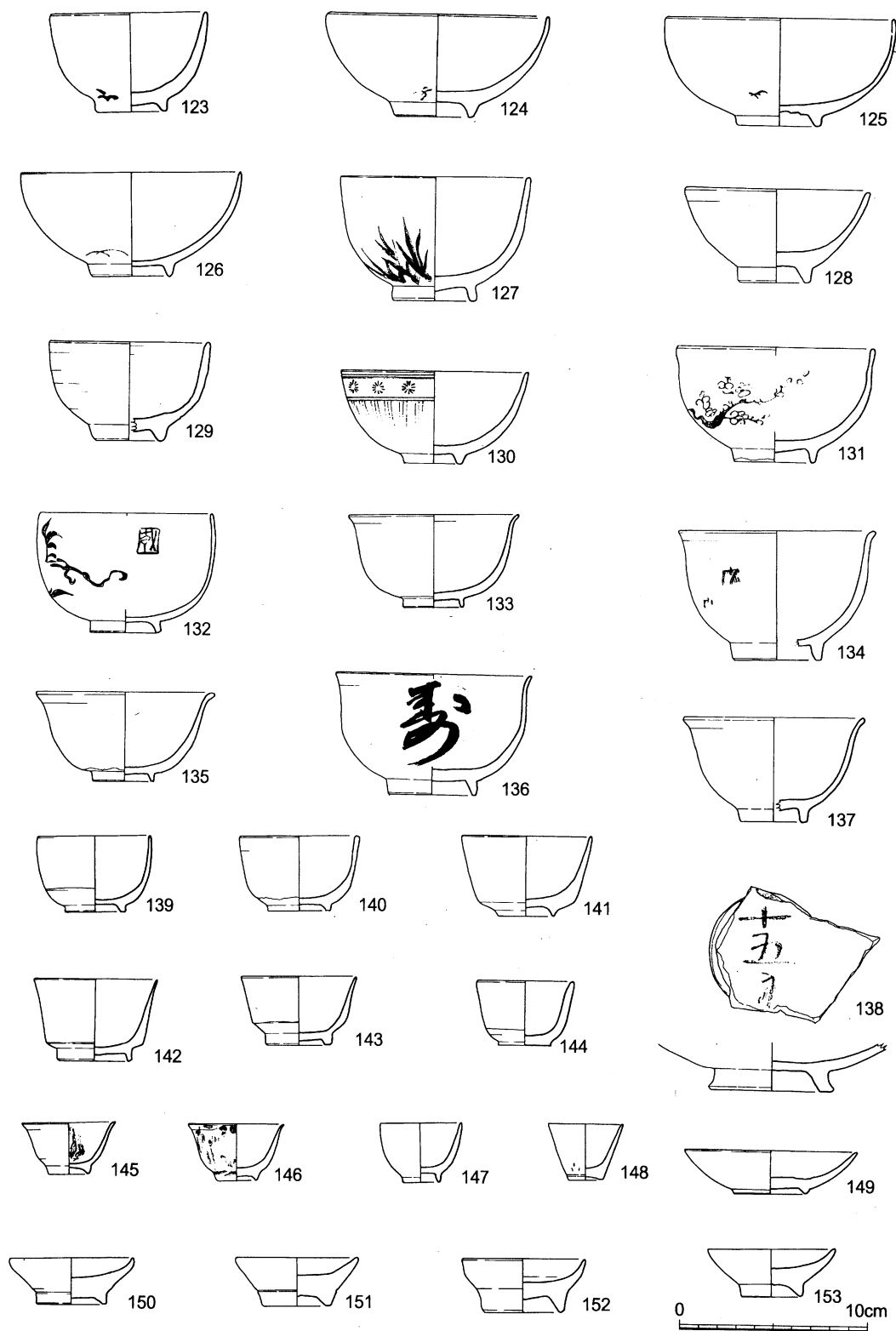
第23图 磁器 10



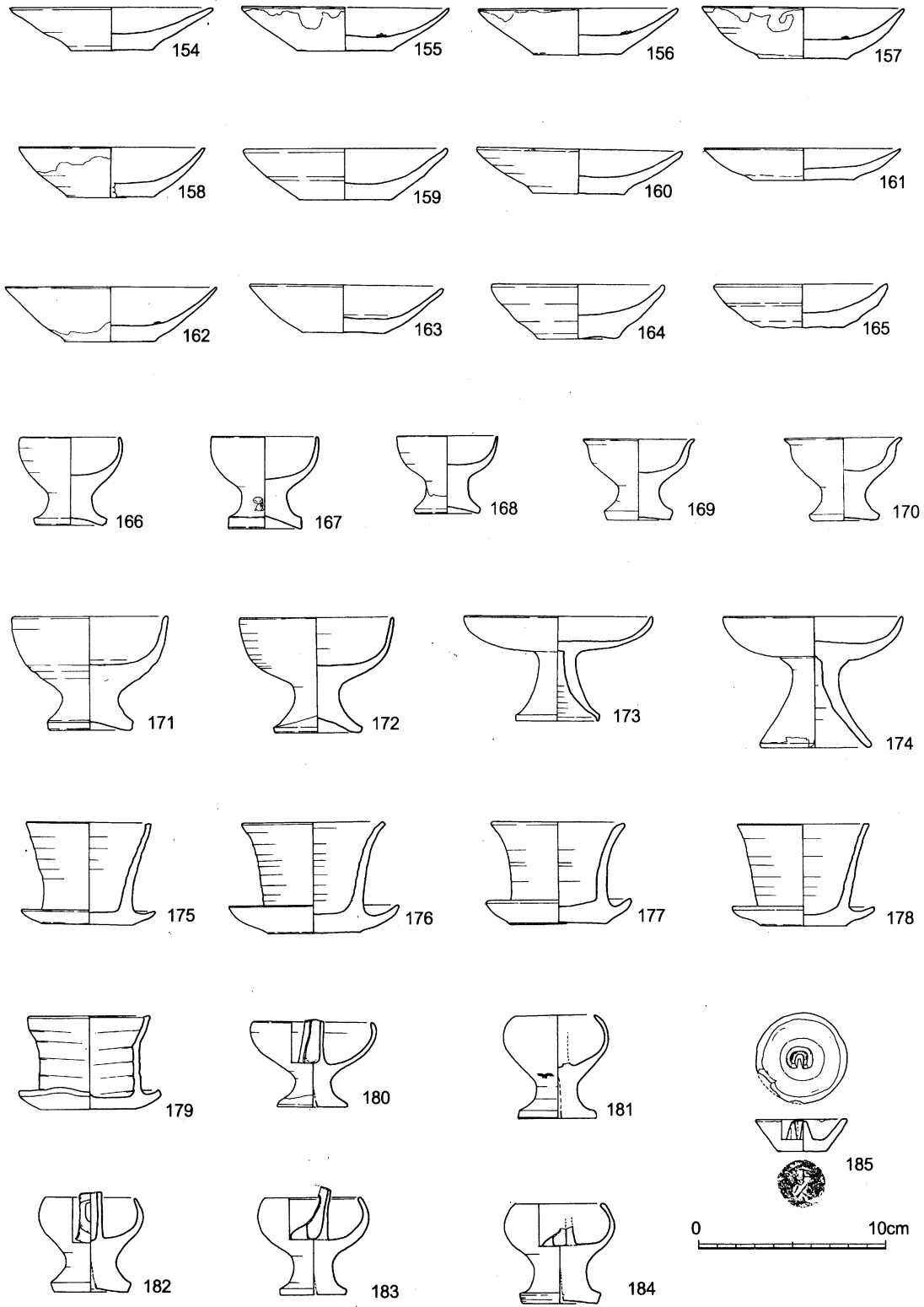
第24图 磁器 11



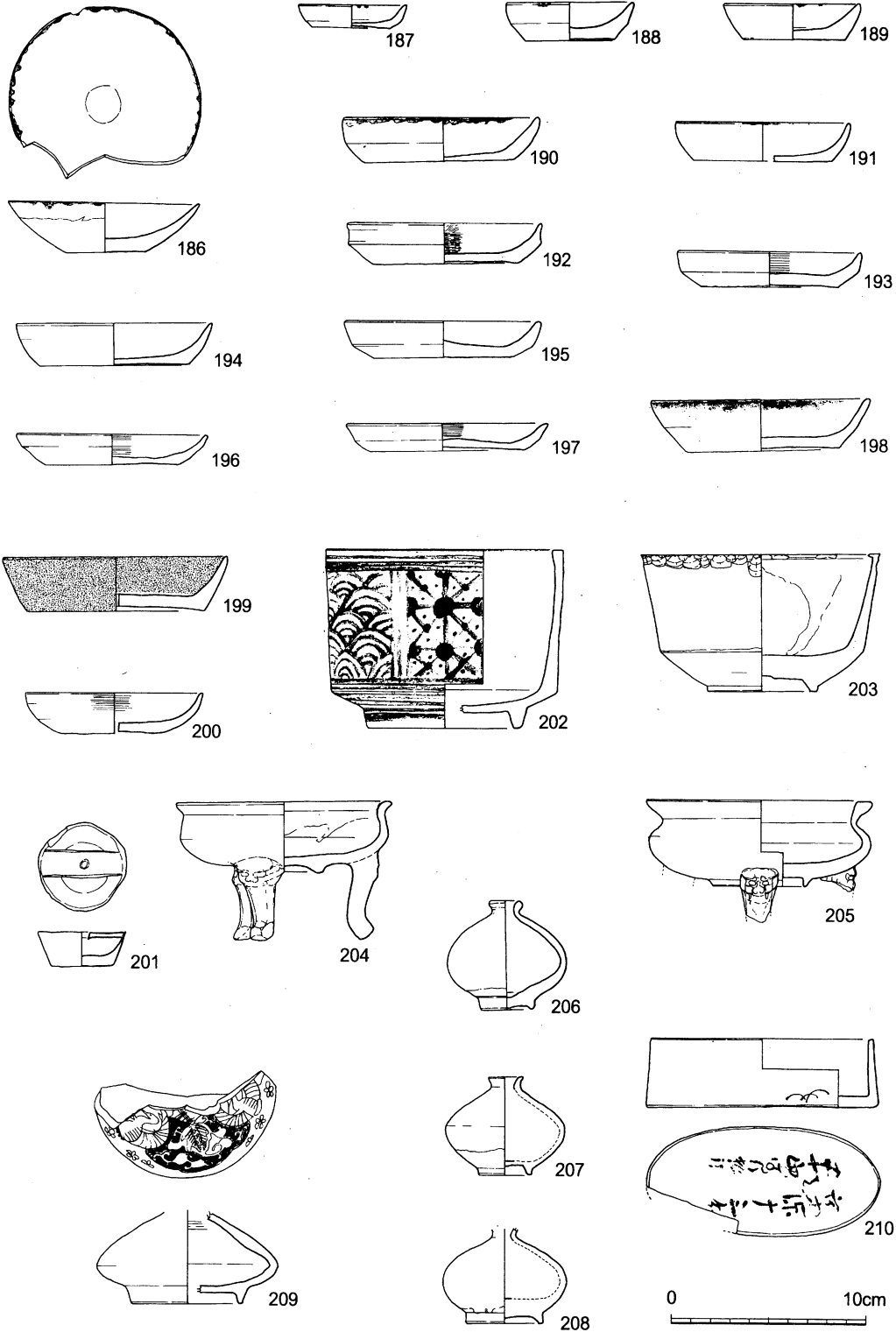
第25图 磁器 12



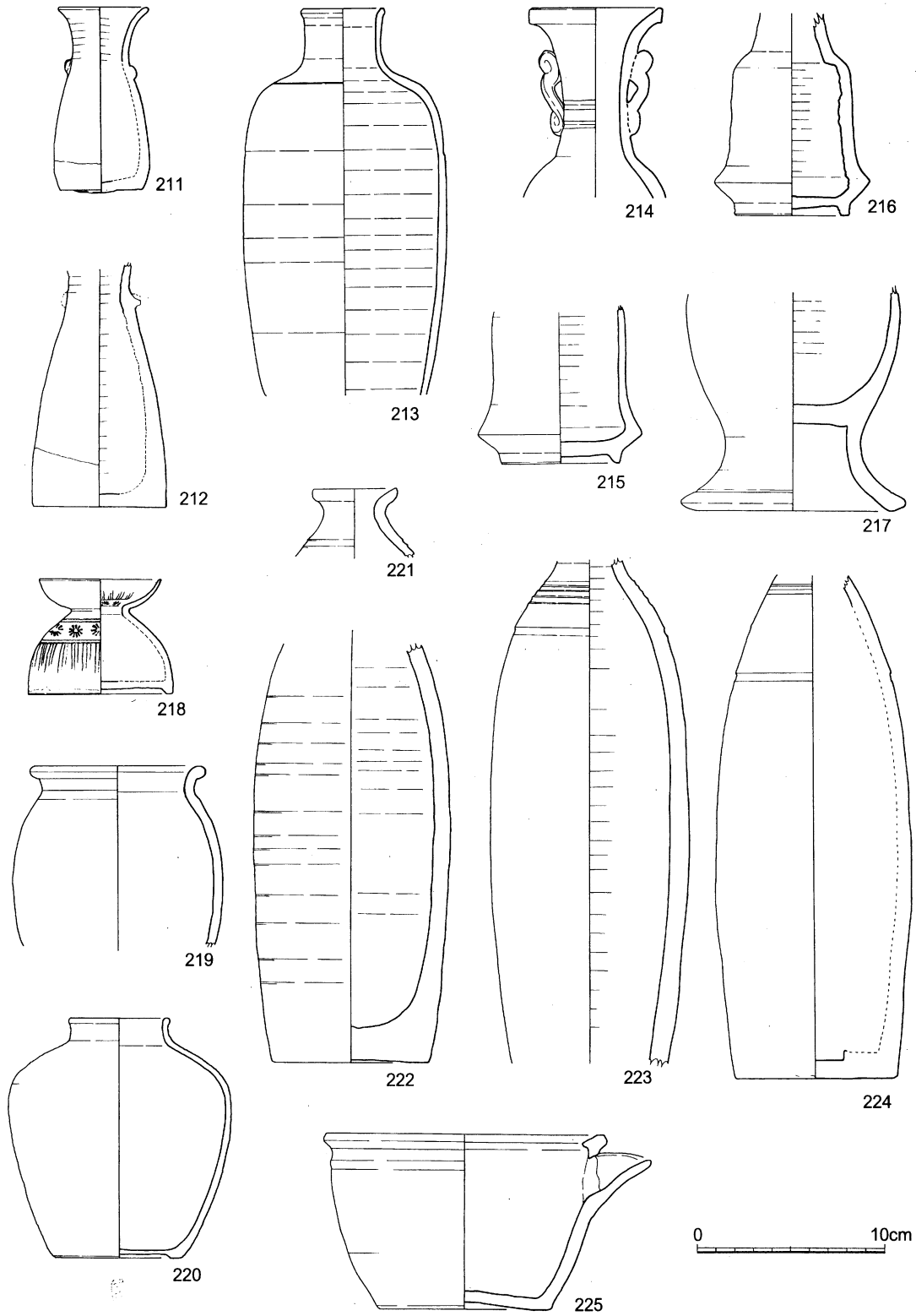
第26图 陶器 1



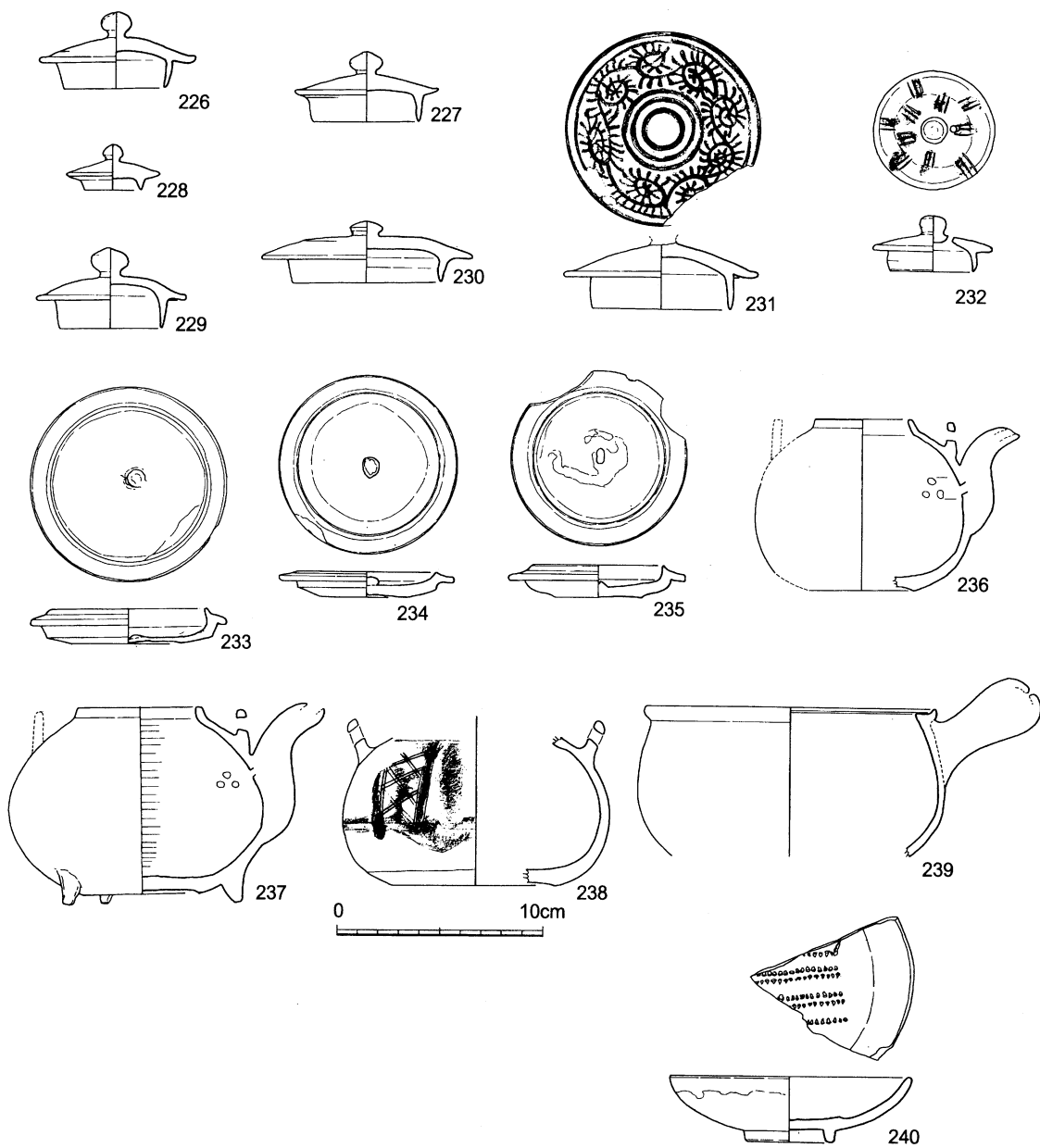
第27图 陶器 2



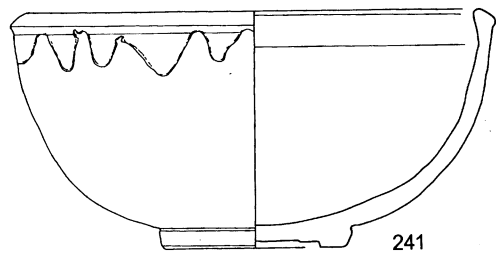
第28图 陶器 3



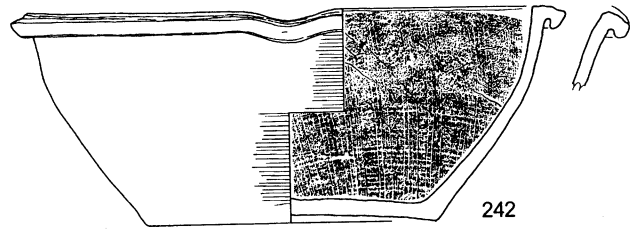
第29图 陶器 4



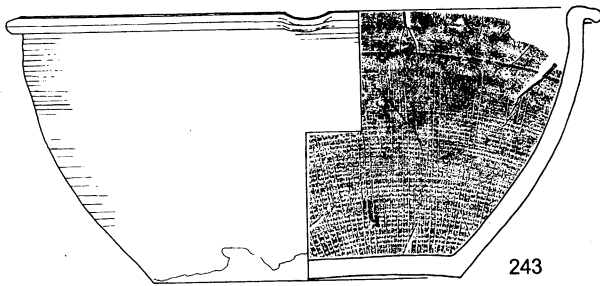
第30图 陶器 5



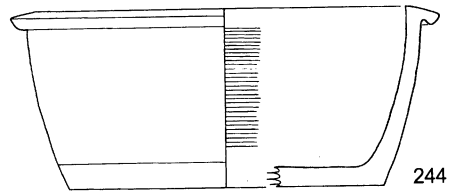
241



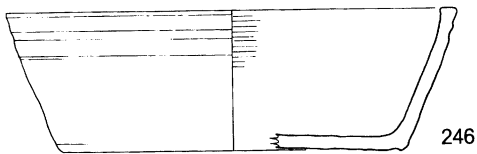
242



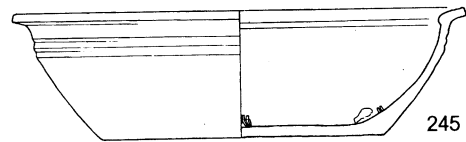
243



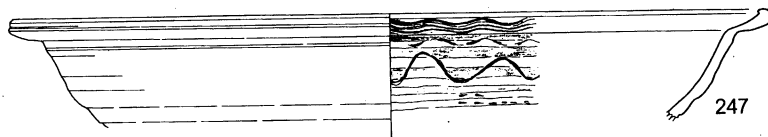
244



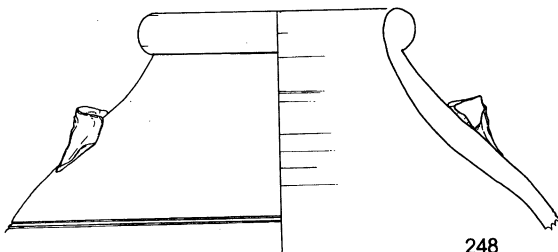
246



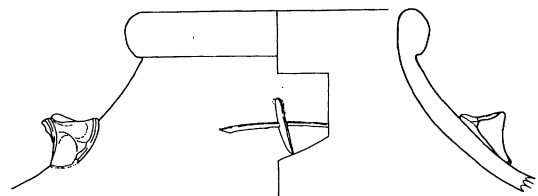
245



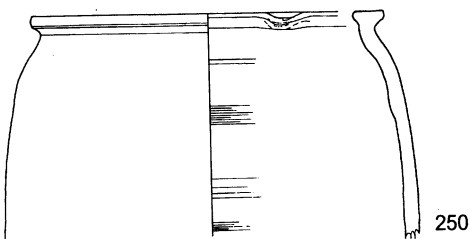
247



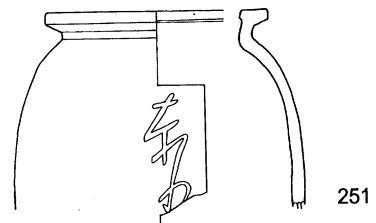
248



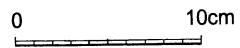
249



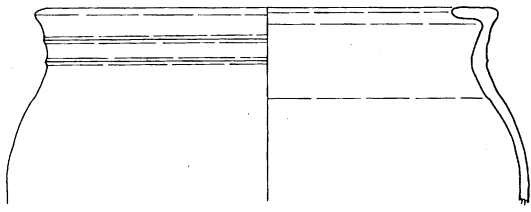
250



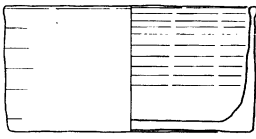
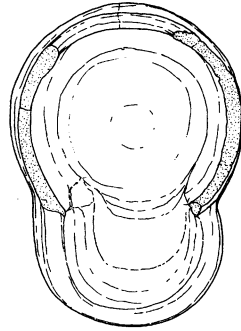
251



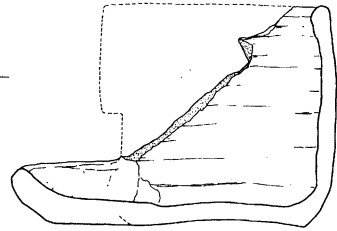
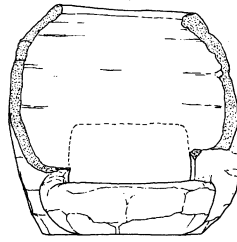
第31图 陶器 6



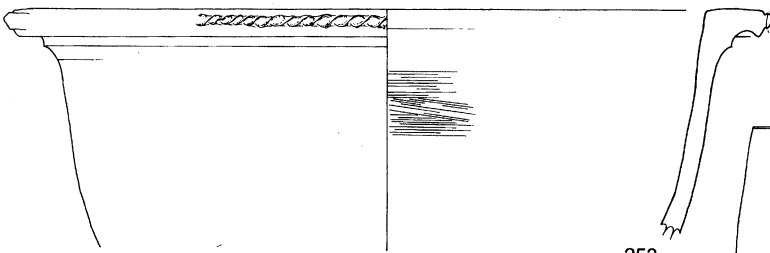
252



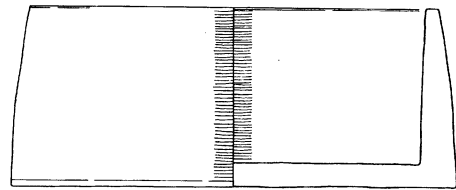
255



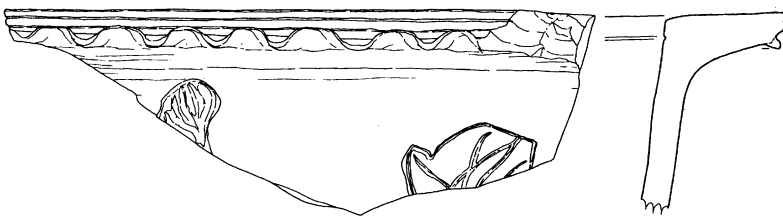
256



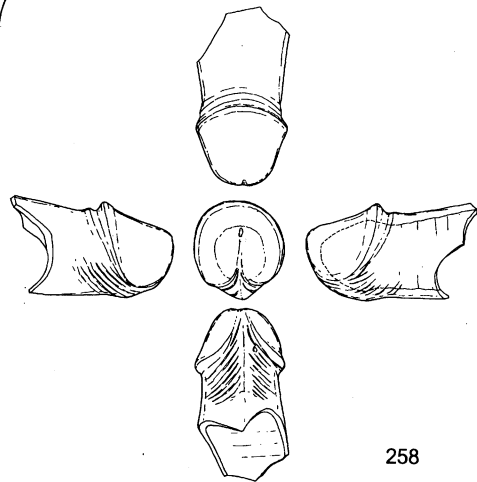
253



257



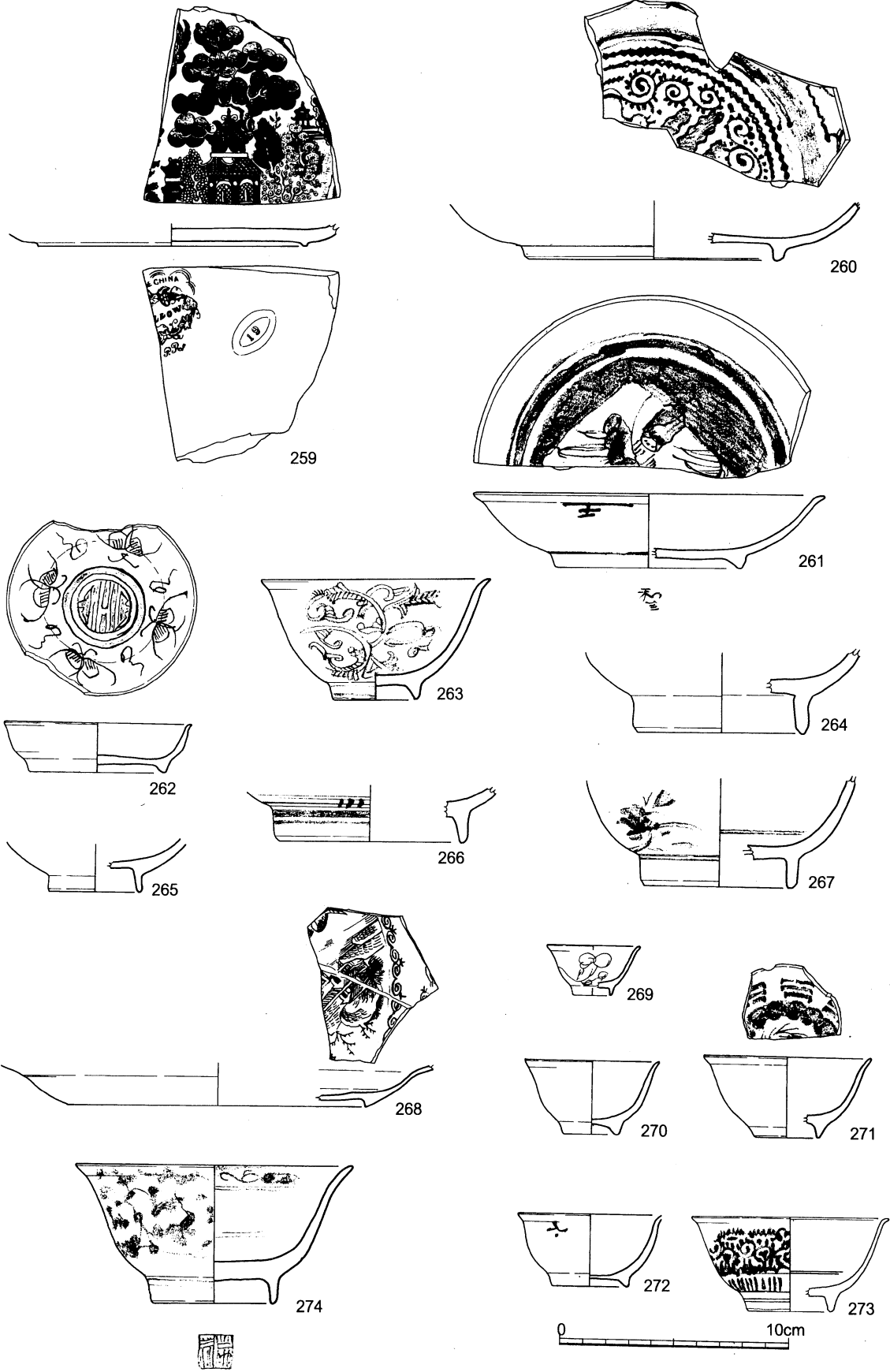
254



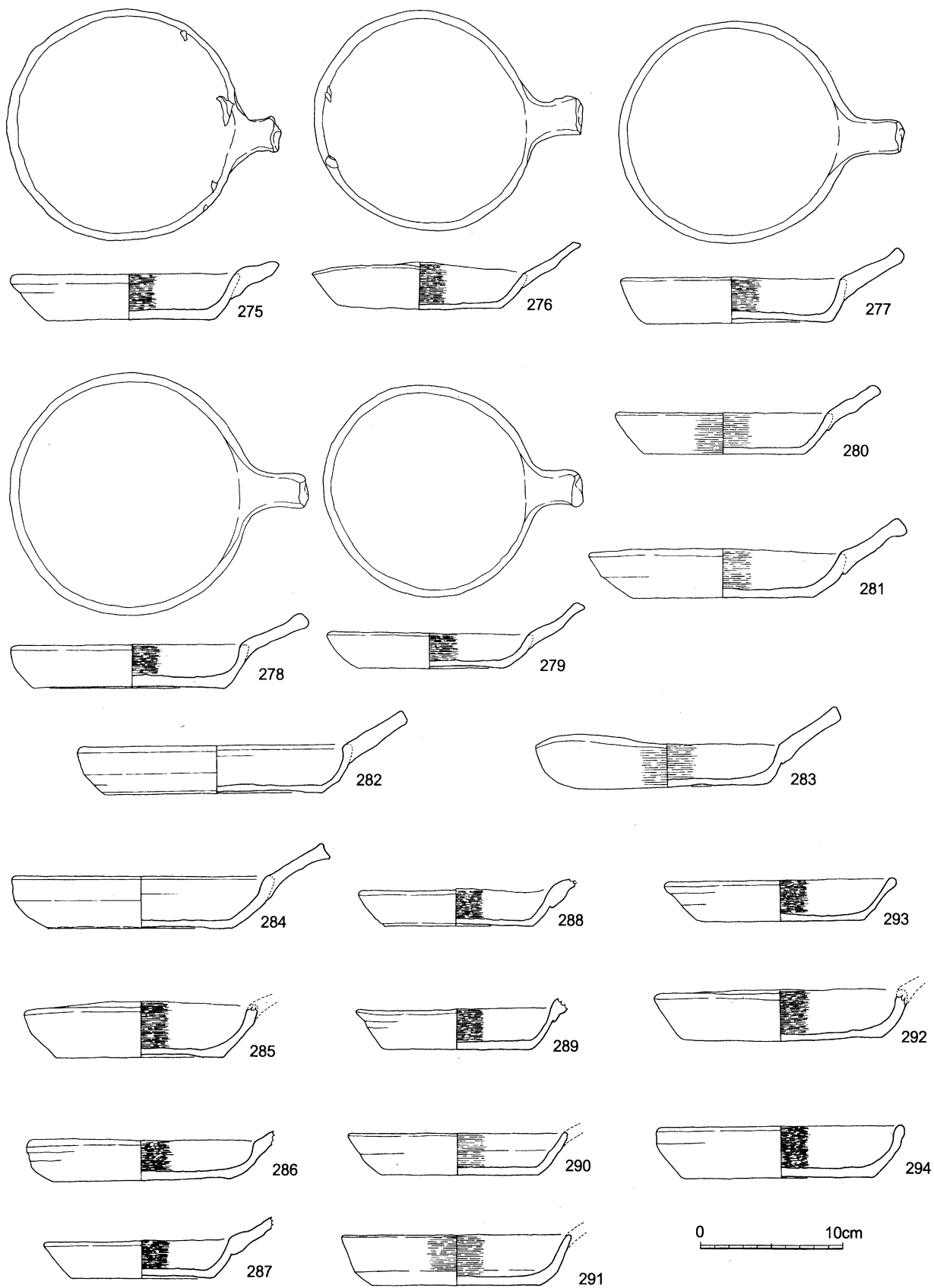
258

0 10cm

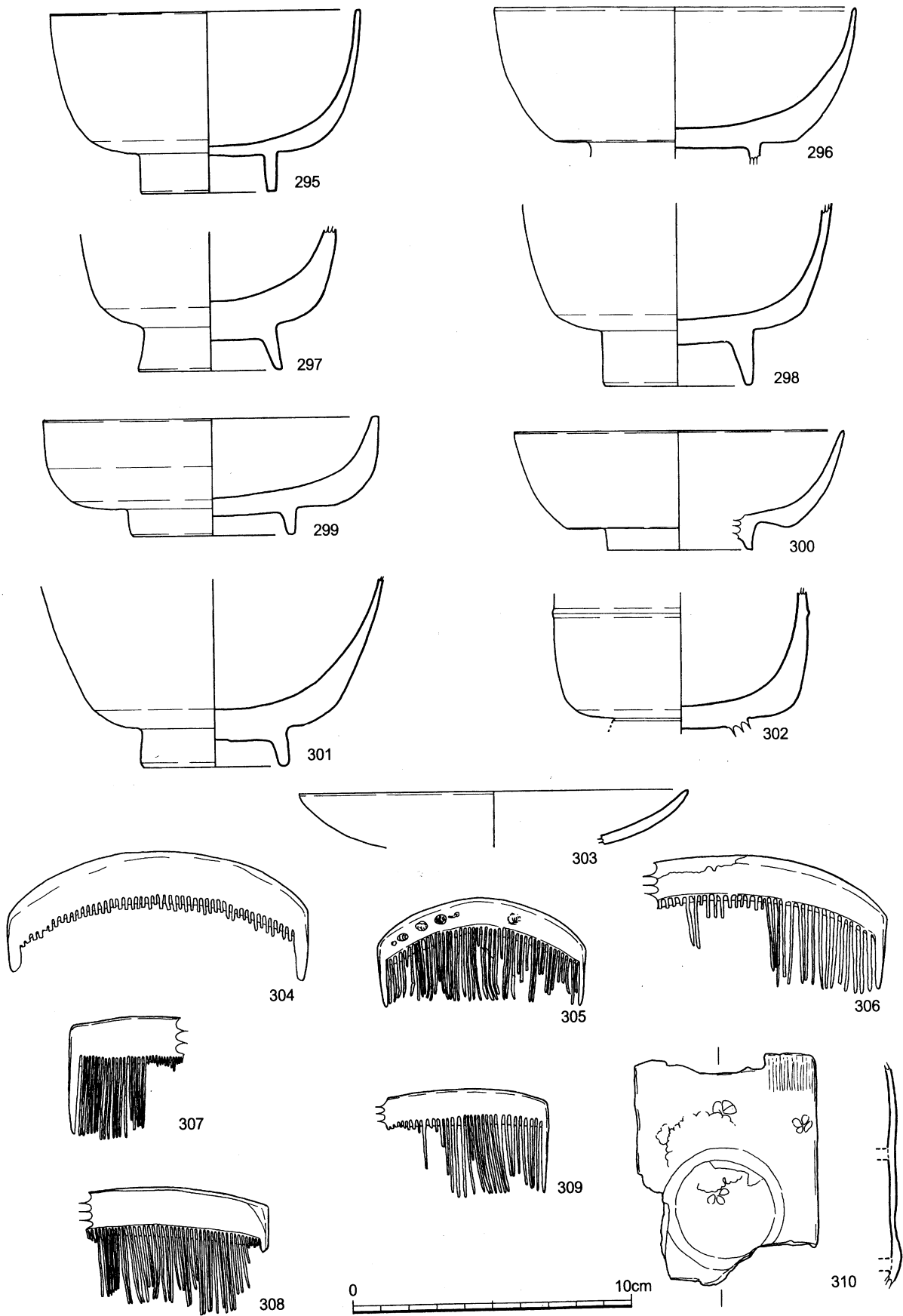
第32图 陶器 7



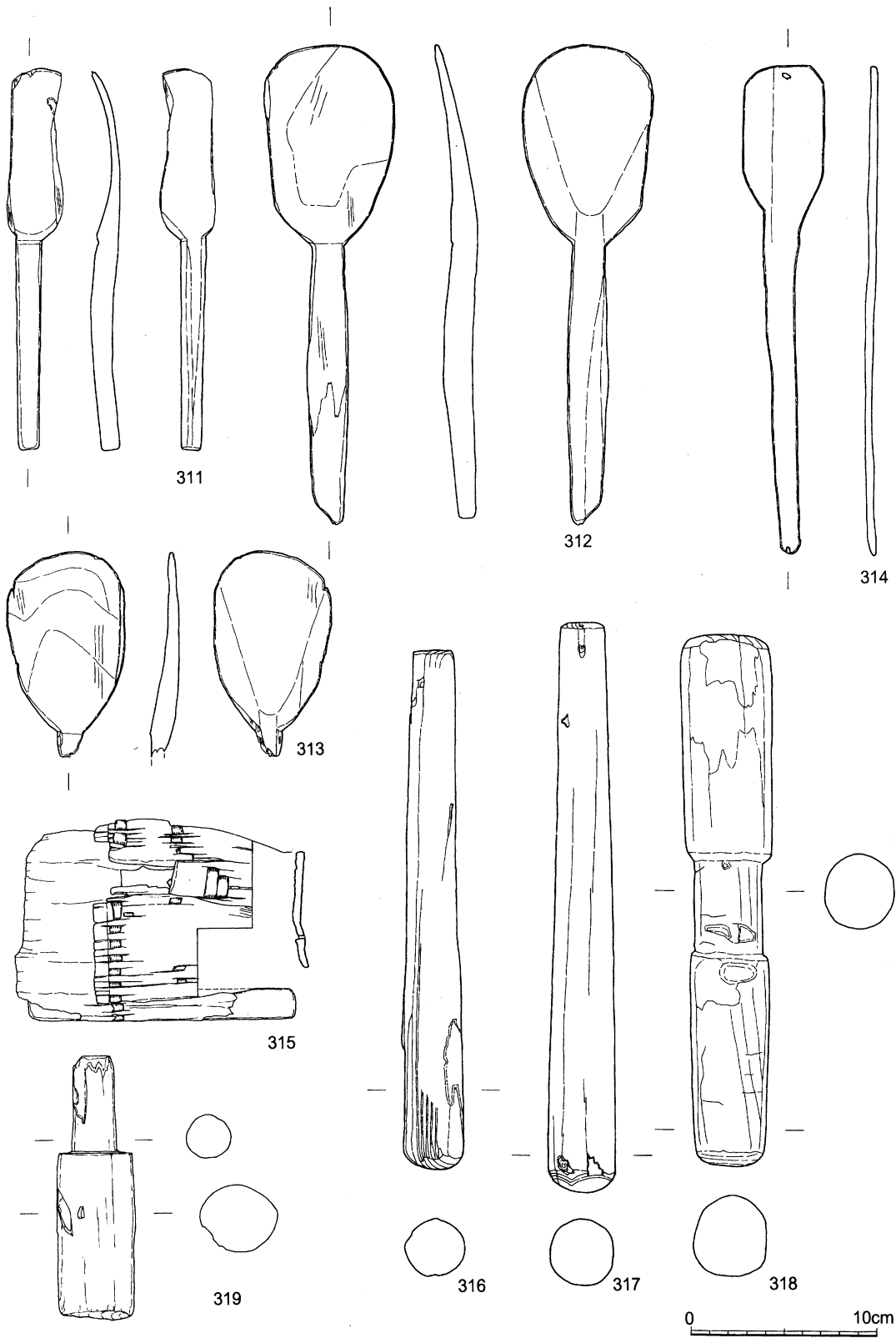
第33图 外国製陶磁器



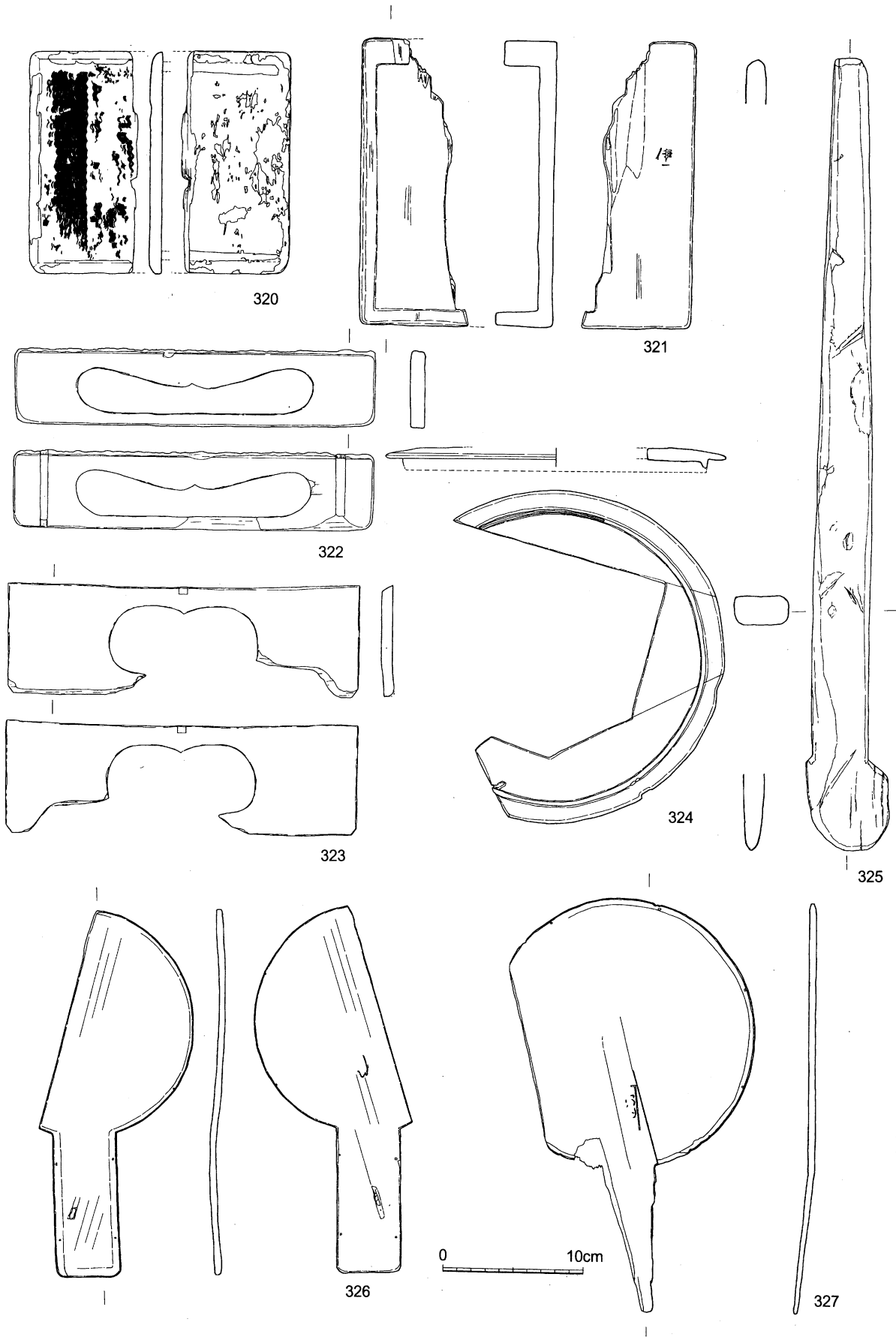
第34图 焙烙



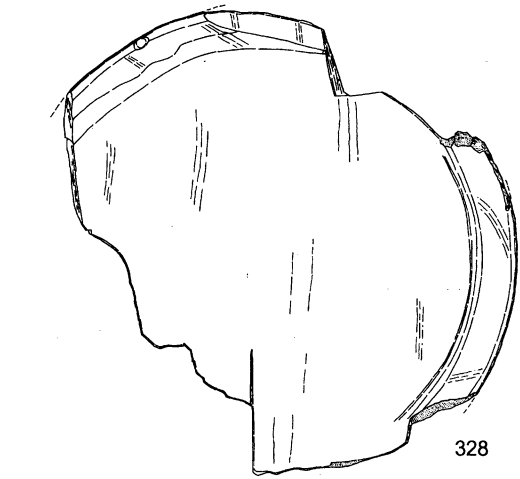
第35図 木製品(碗・杯・櫛・引手)



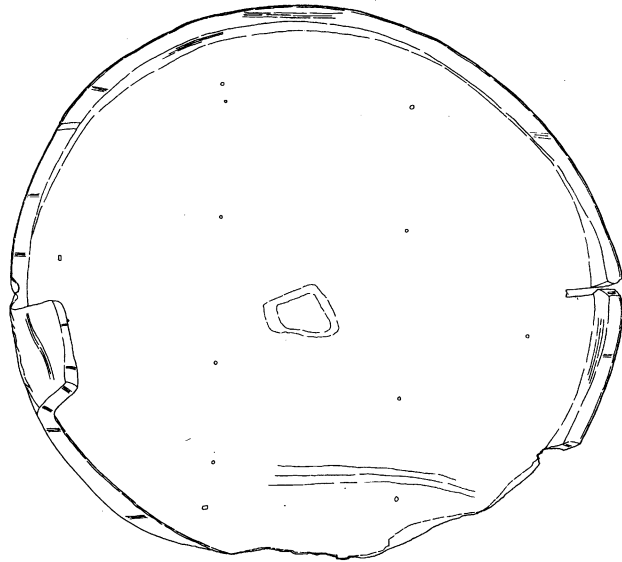
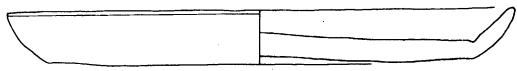
第36図 木製品



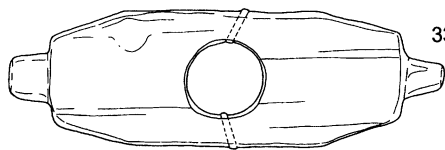
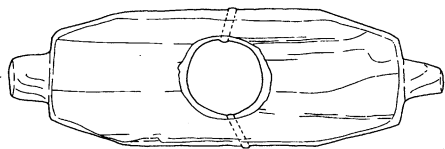
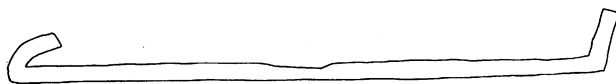
第37図 木製品



328

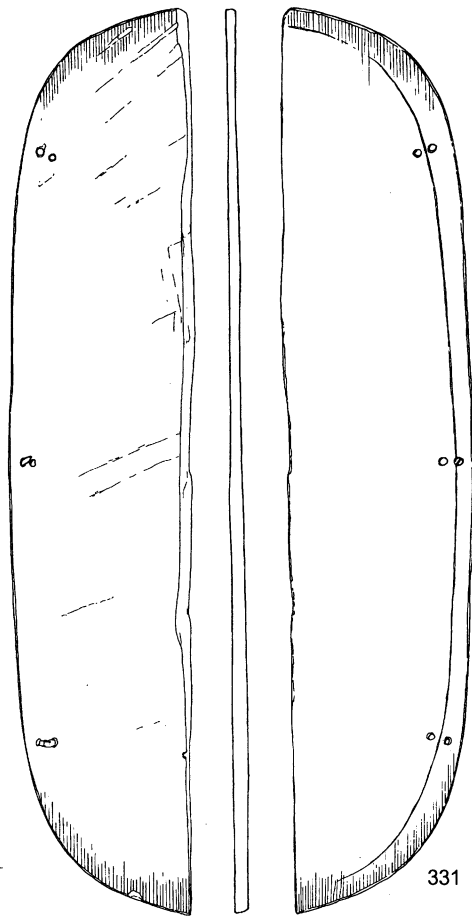


329



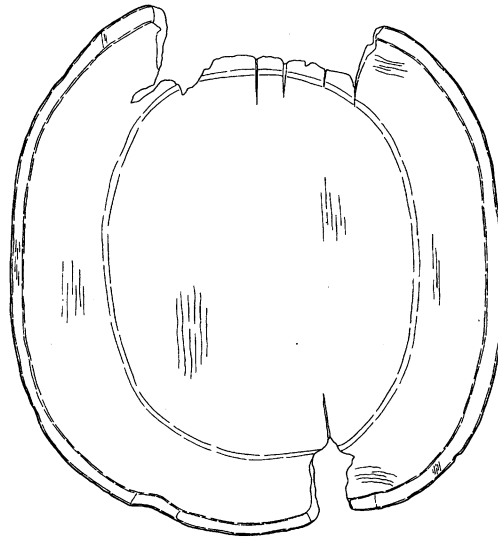
332

0 10cm

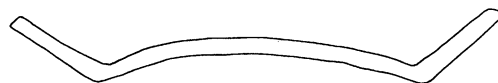


331

0 10cm

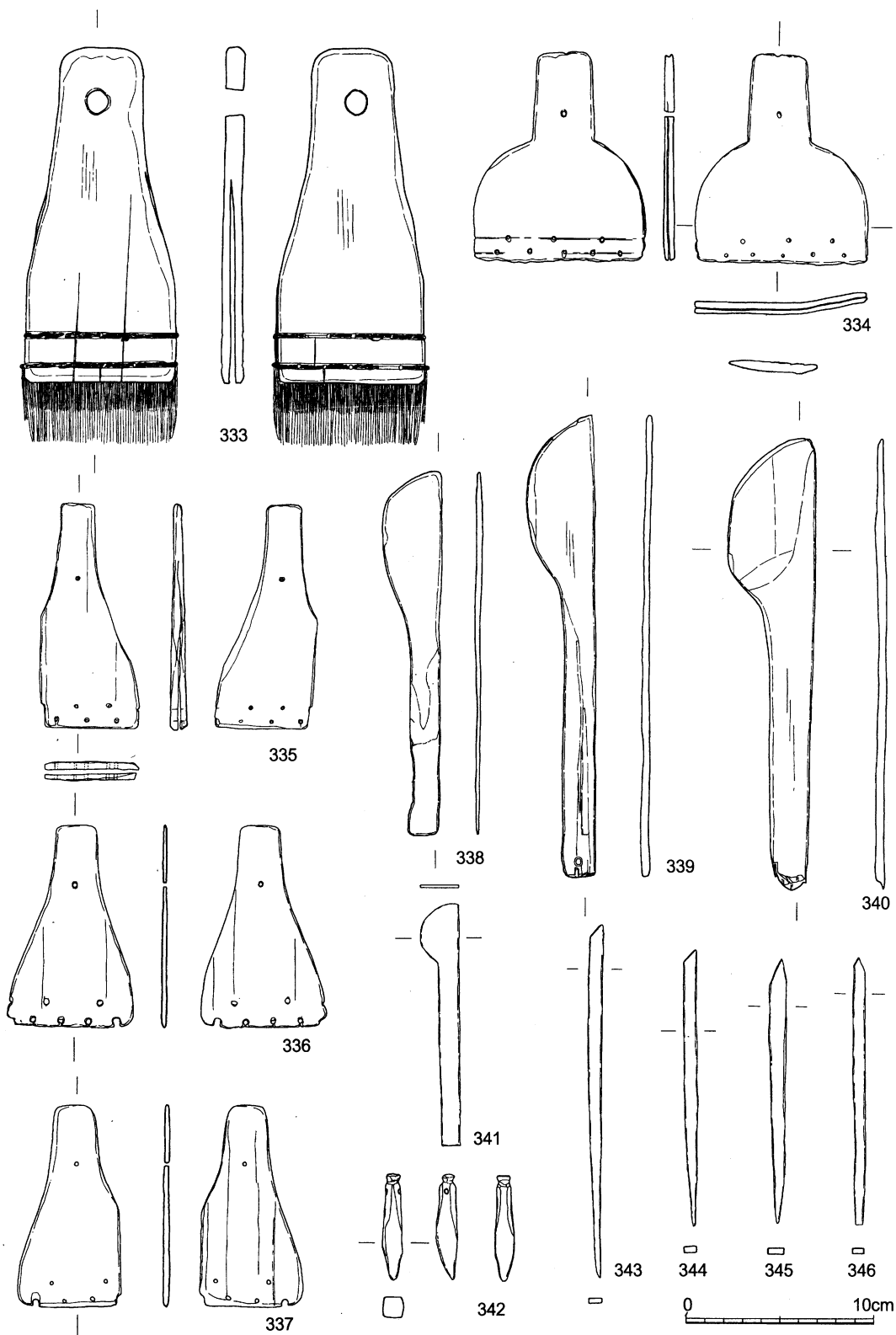


330

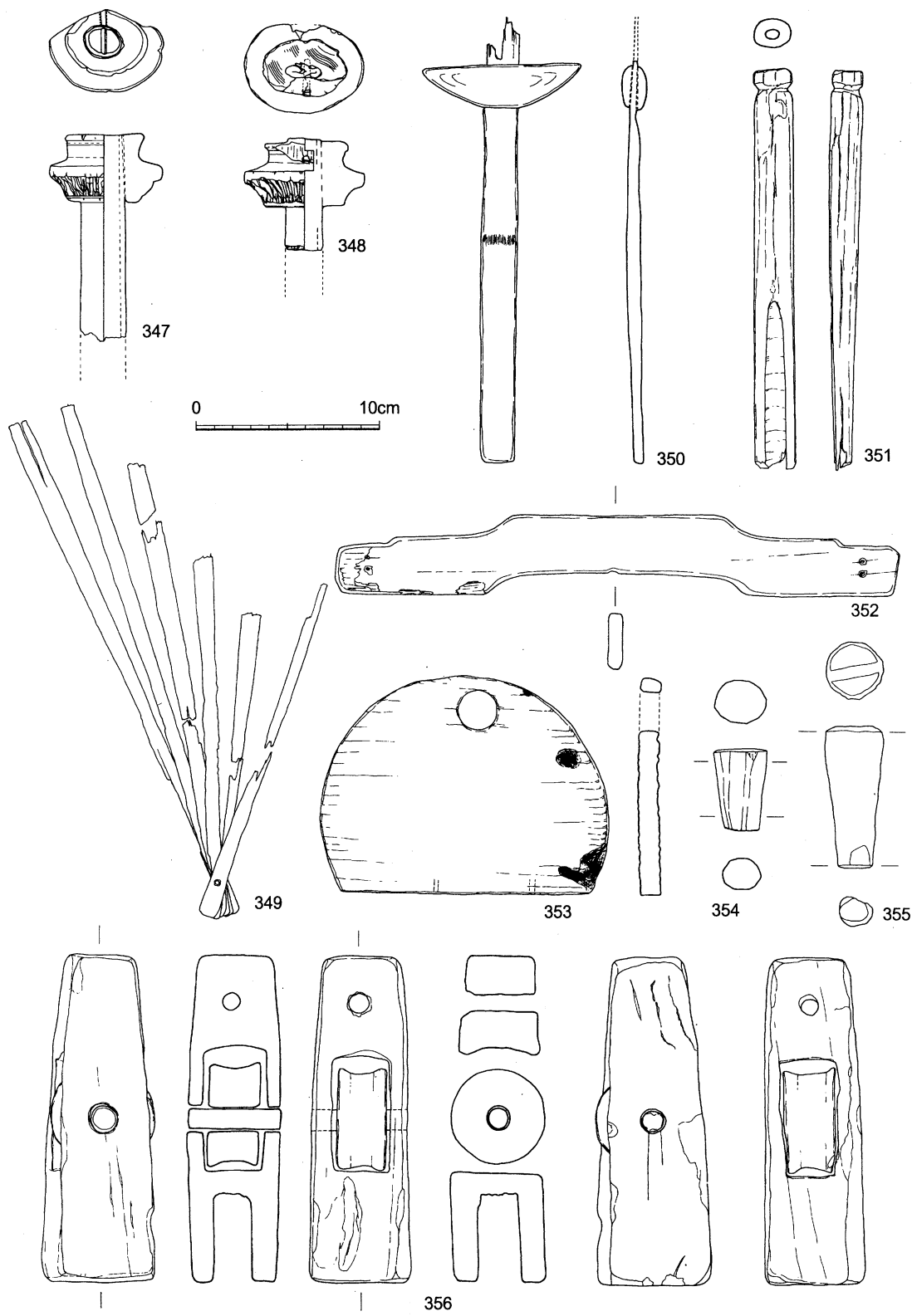


0 10cm

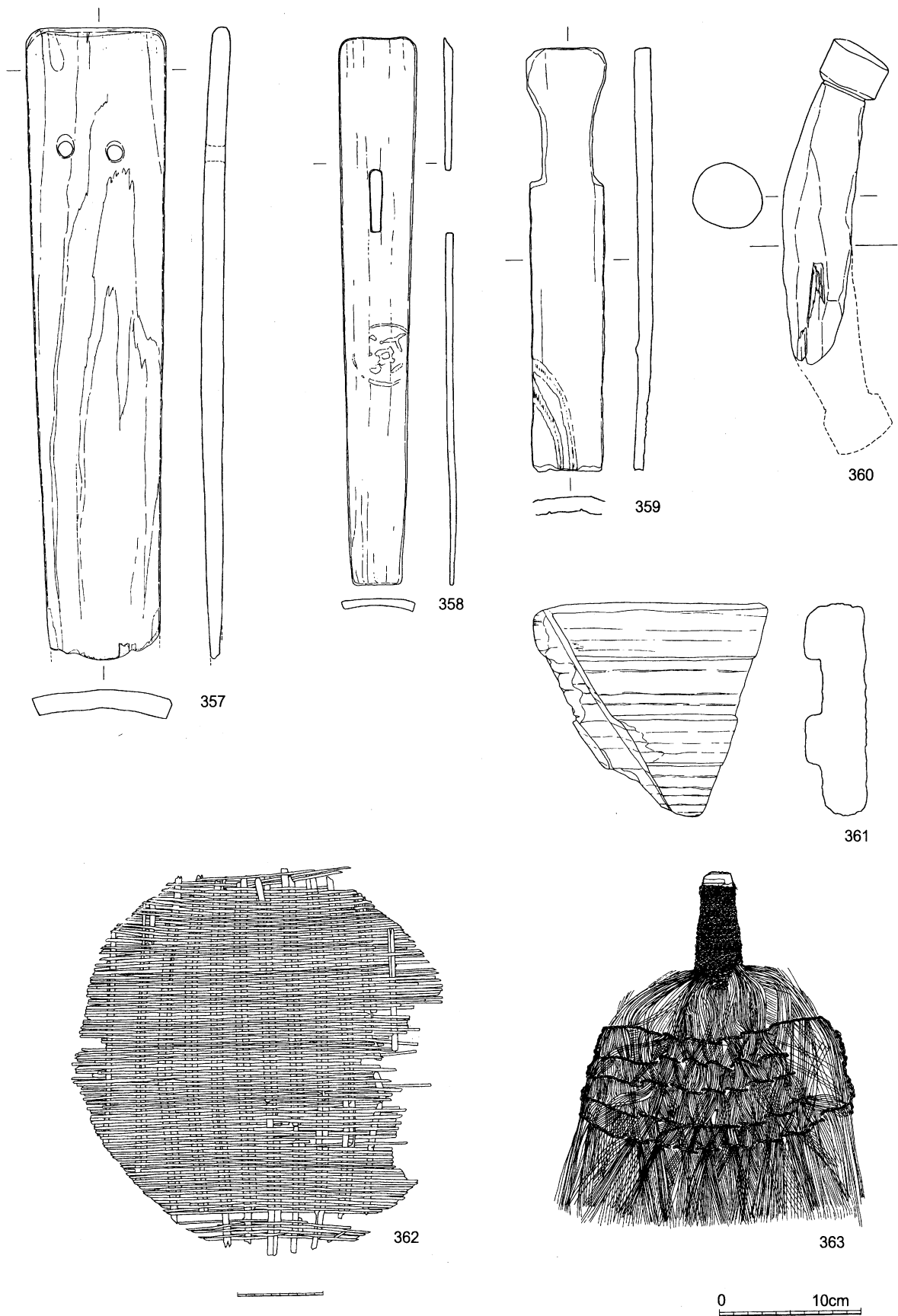
第38図 木製品



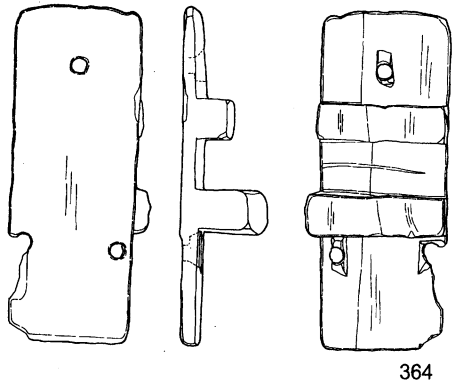
第39図 (木製品)刷毛・篋・その他



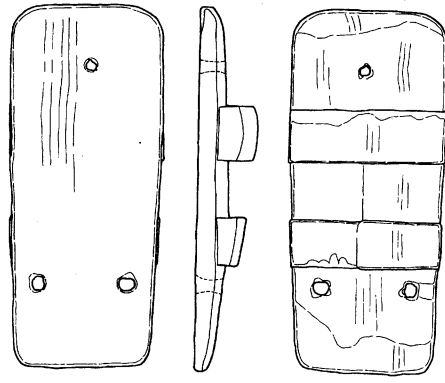
第40図 木製品・竹製品



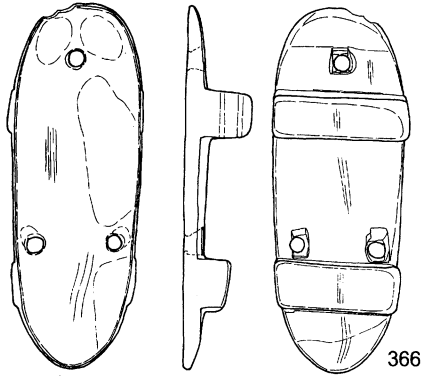
第41図 木製品・竹製品・箒



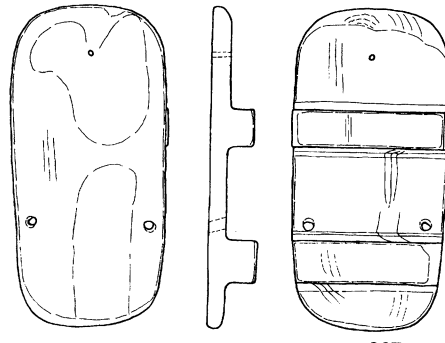
364



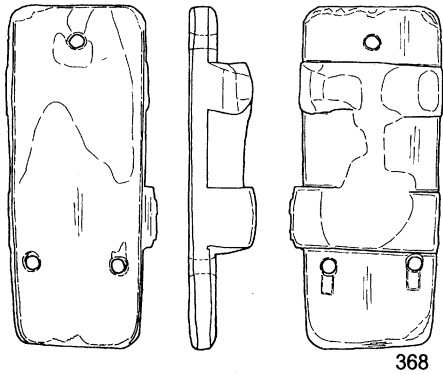
365



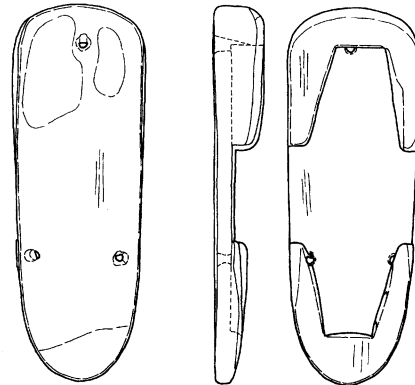
366



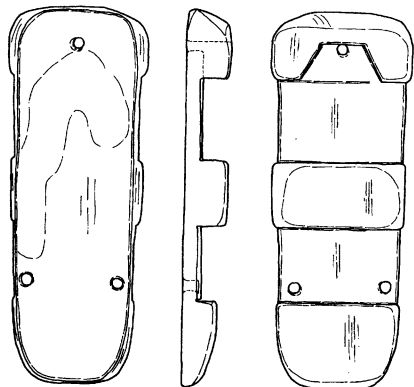
367



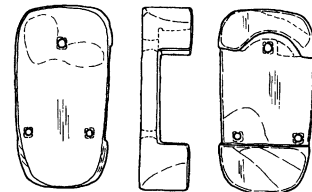
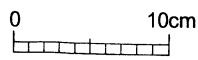
368



369

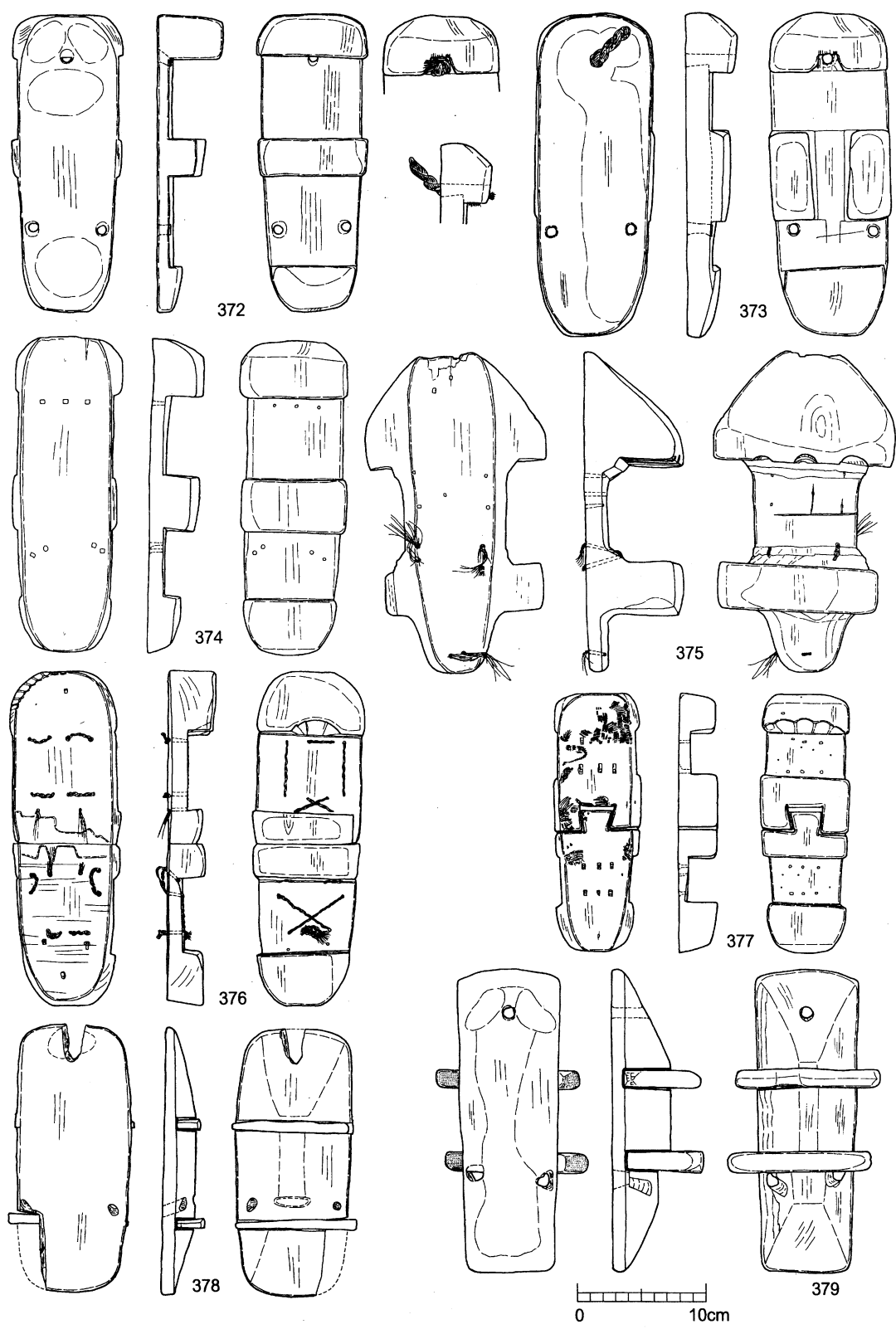


371

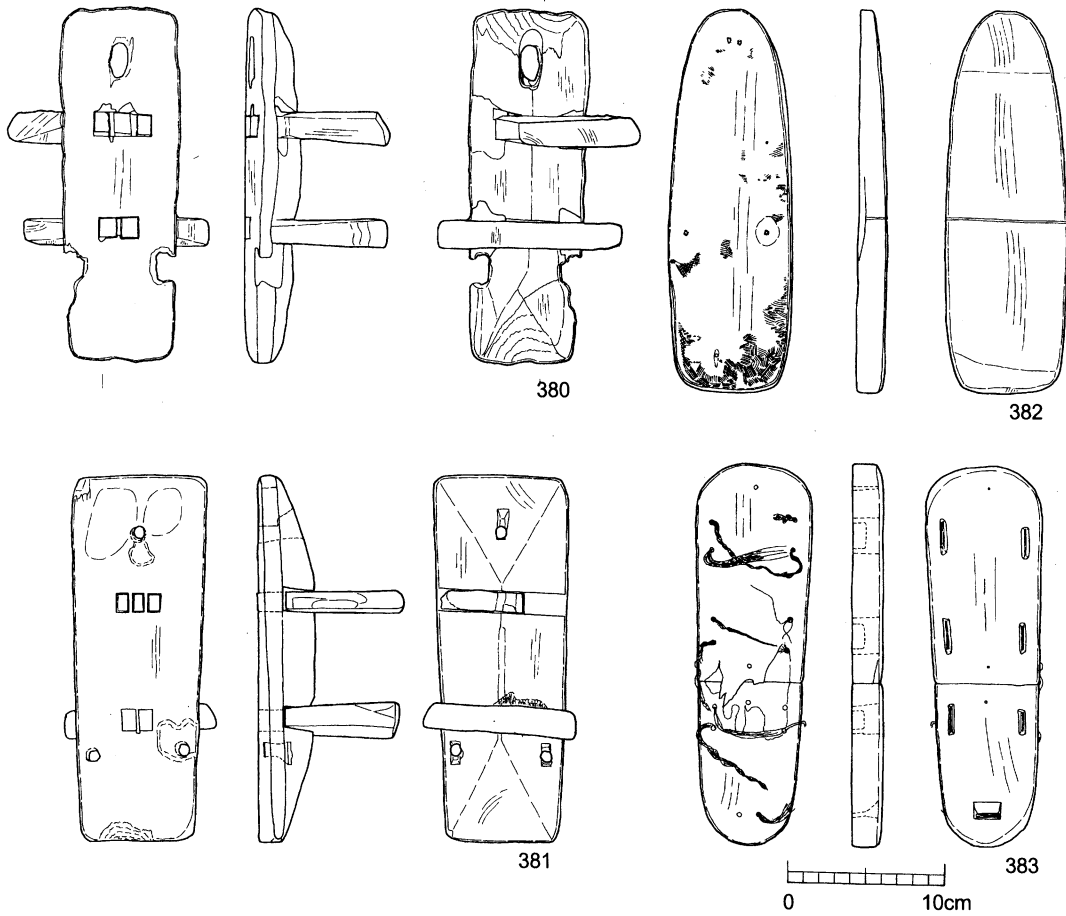


370

第42図 木製品(下駄)1



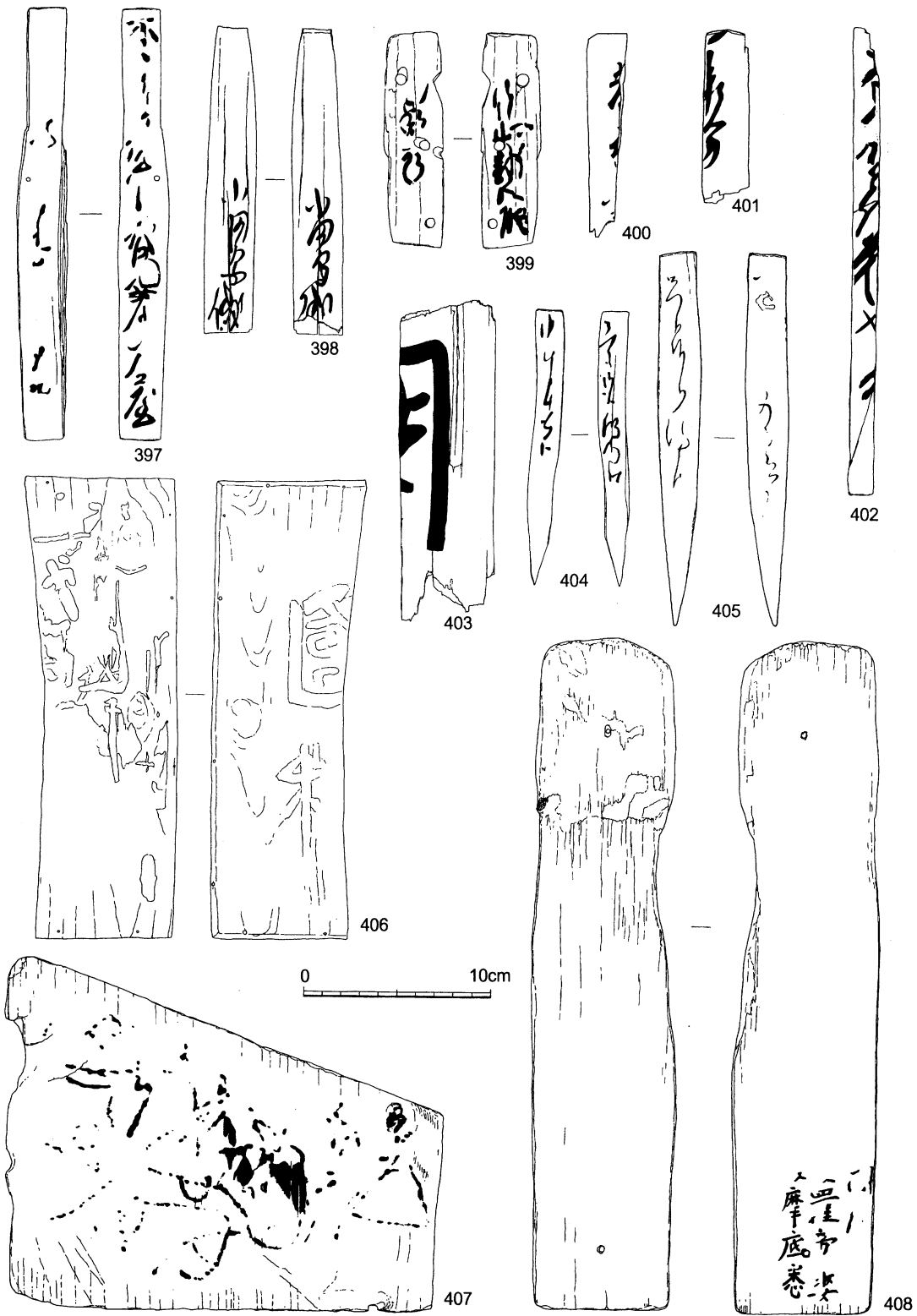
第43図 木製品(下駄)2



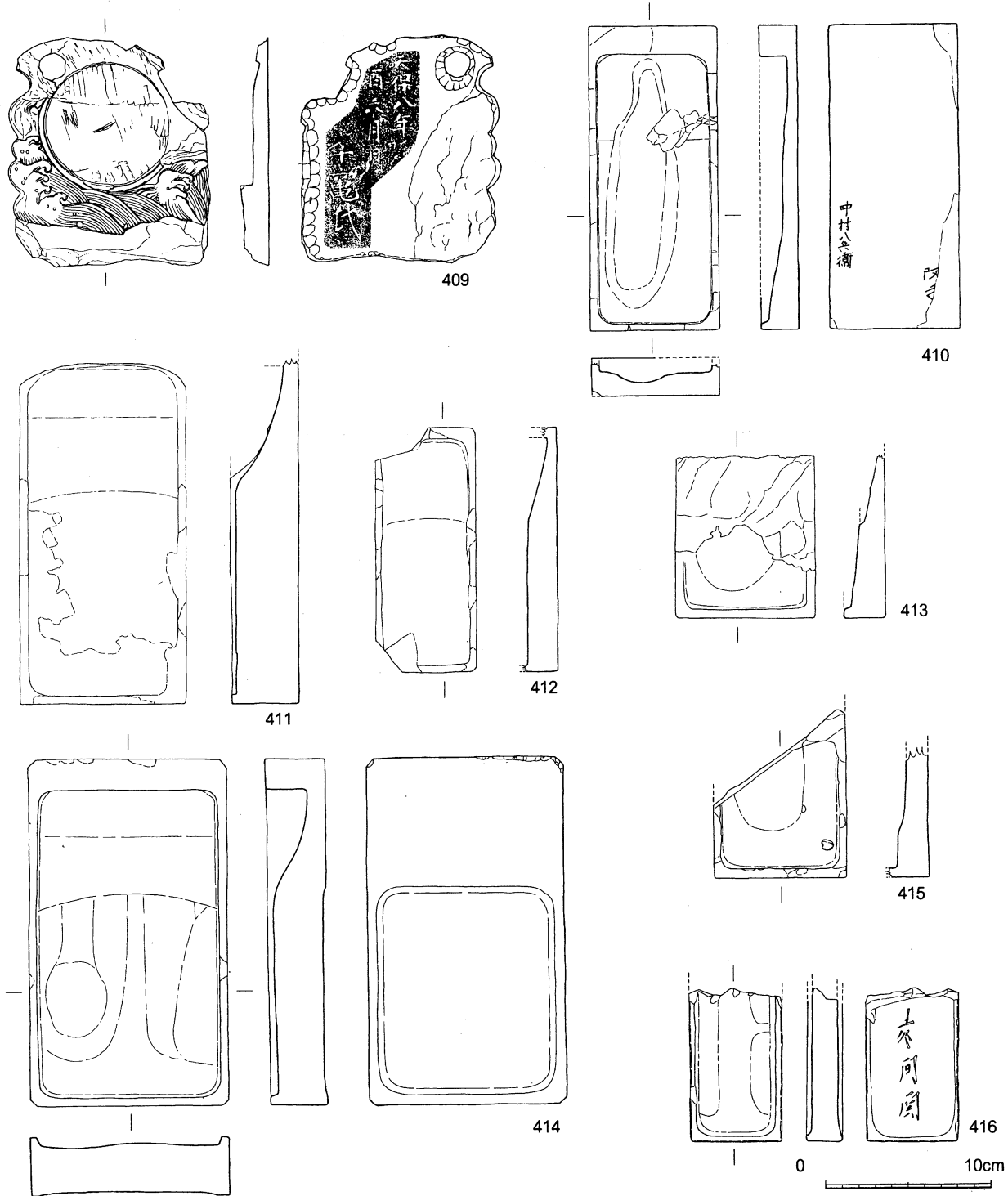
第44図 木製品(下駄)3



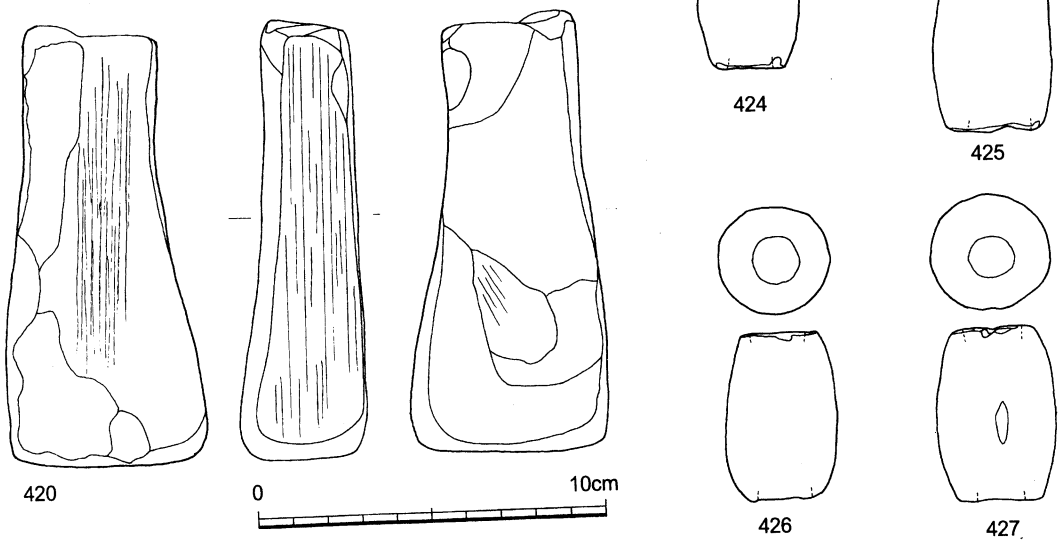
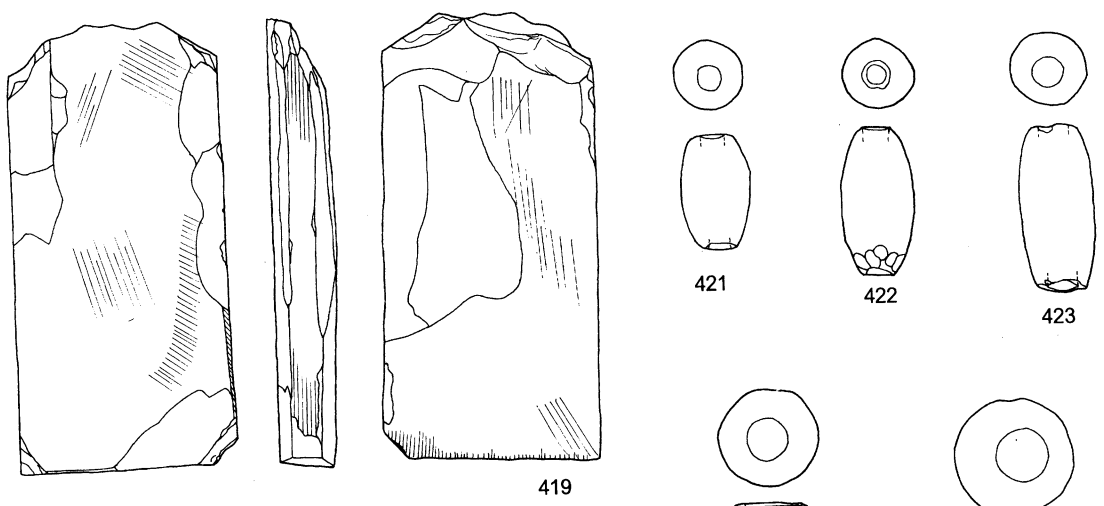
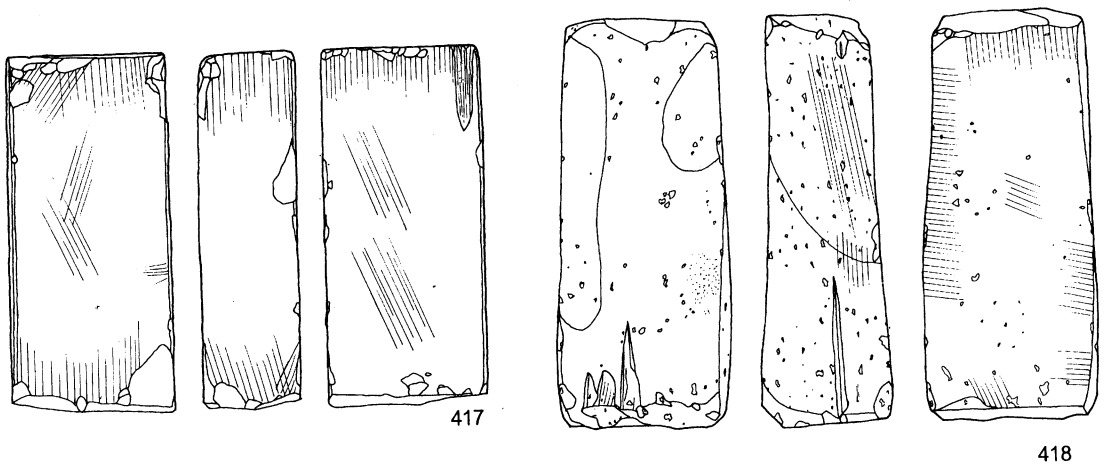
第45図 木簡 1



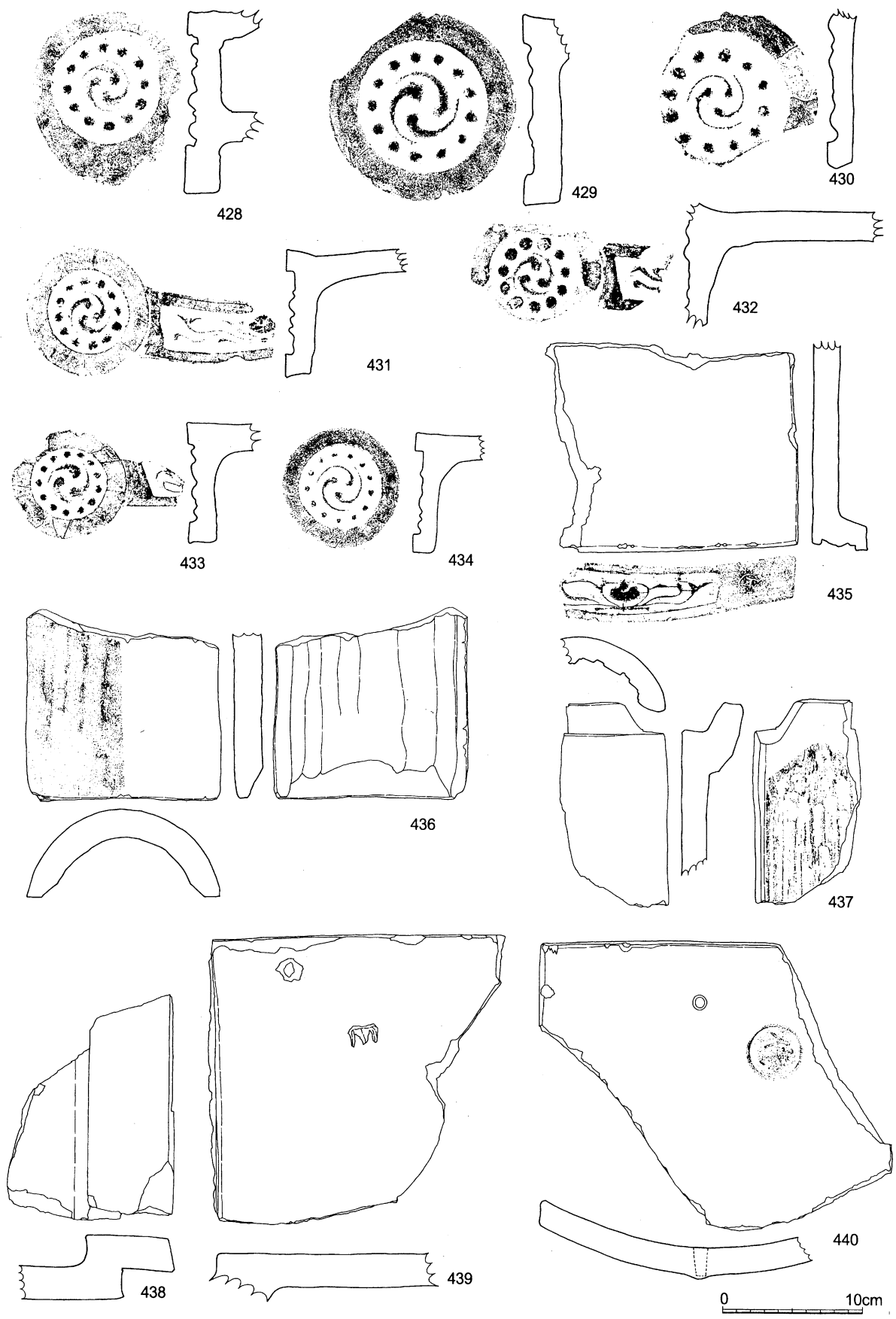
第46図 木簡 2



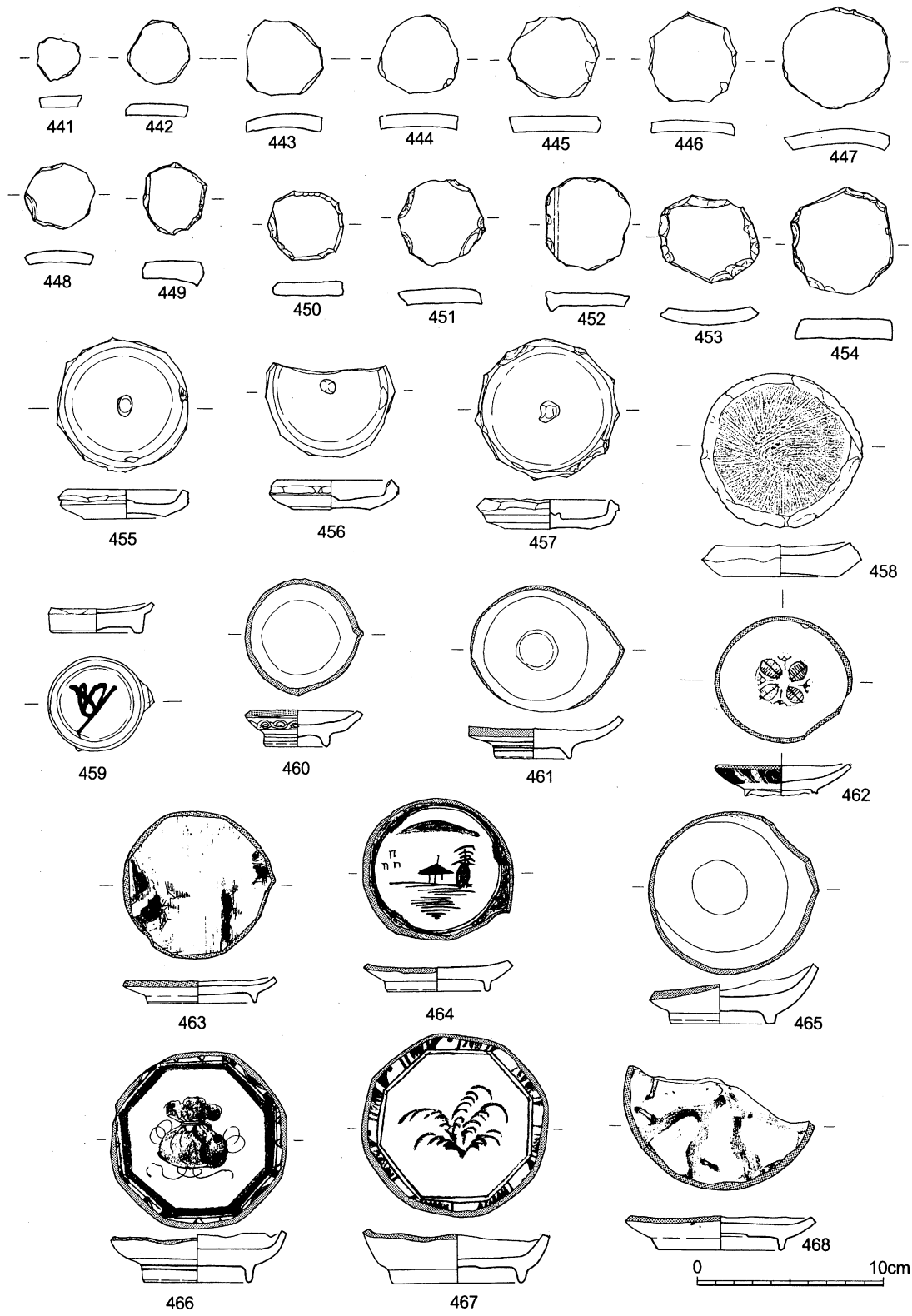
第47図 石製品(硯)12



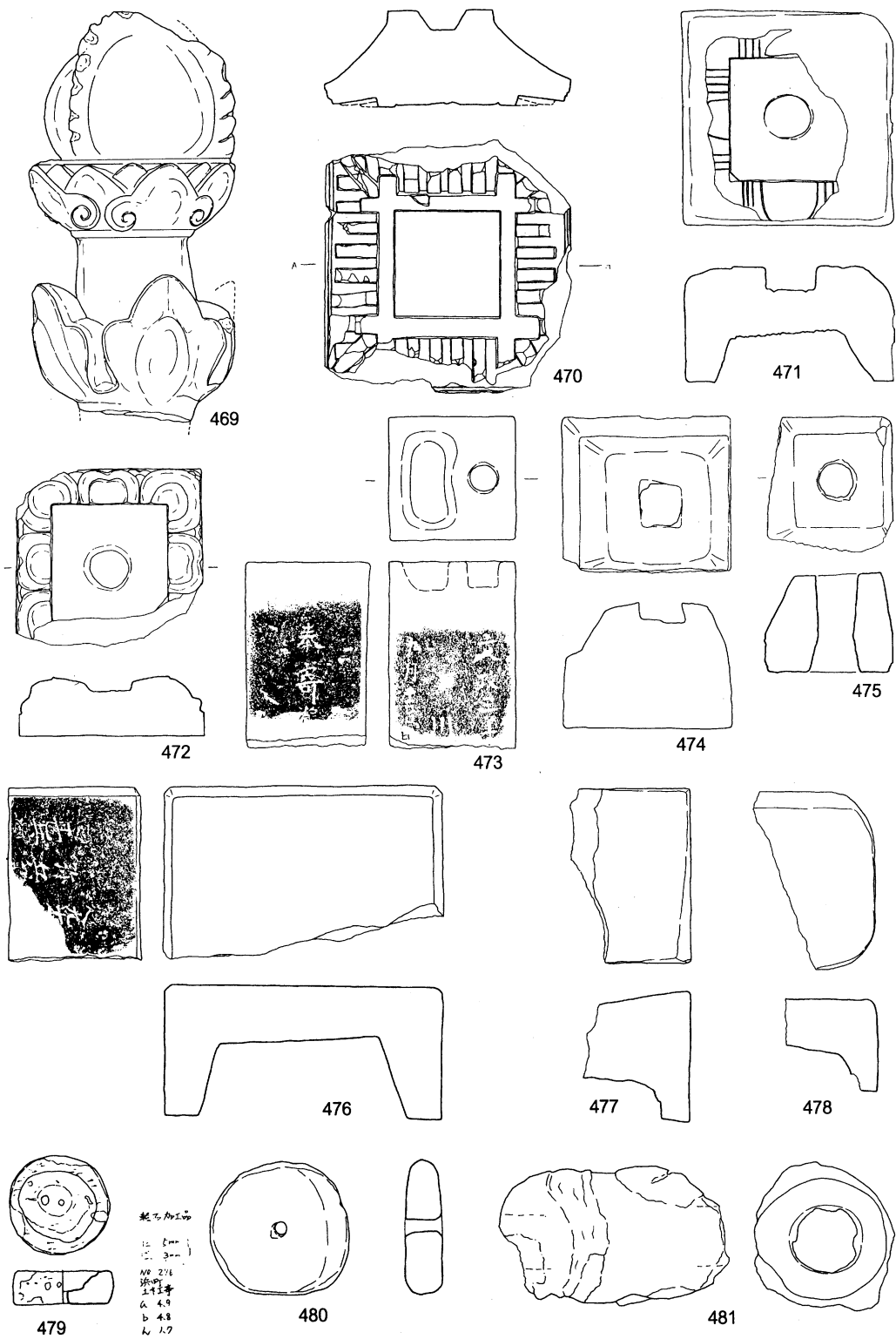
第48図 石製品



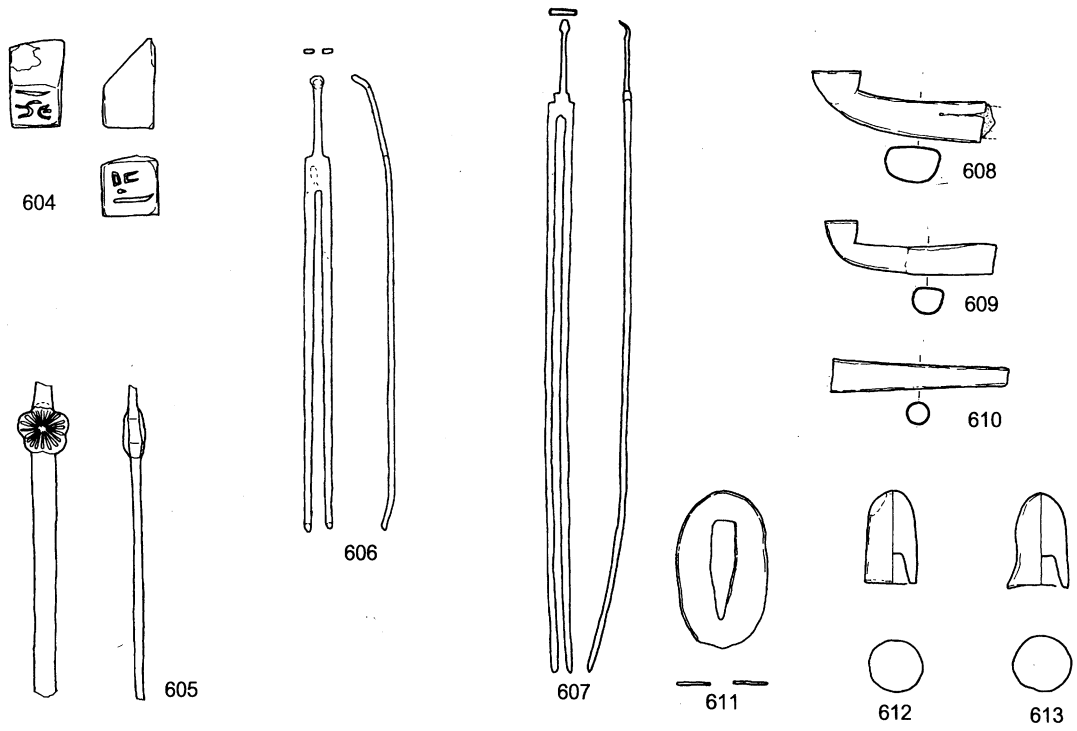
第49图 瓦



第50図 円盤状加工品



第51図 石像物等



第52図 簪等

第2表 出土器遺観察表(磁器) その1

No	出土地点	分類	法量 (cm)			胎土	文様		備考
			口径	器高	高台径		外面	内面	
1	抱真院跡	中碗(丸形)	11.5	6.3	5.2	白	菊・唐草文	四方禪文 五弁花	肥前系
2	落ち込みⅡ	中碗(丸形)	10.2	5.1	3.9	灰白	暦文	昆虫文	肥前系
3	埋め立て	中碗(丸形)	10.8	5.4	3.8	灰白	梅文		見込 蛇ノ目釉ハギ
4	下屋敷	中碗(丸形)	10.0	5.7	4.0	白	暦文		肥前系
5	落ち込み	中碗(丸形)	12.2	5.5	4.5	白			見込 蛇ノ目釉ハギ 在地の可能性?
6	埋め立て	中碗(丸形)	11.8	5.9	4.0	白	梅文		見込 蛇ノ目釉ハギ 在地の可能性?
7	杭列	中碗(丸形)	11.6	4.0	5.9	灰白	梅文		見込 蛇ノ目釉ハギ 肥前系
8	落ち込み	中碗(端反)	10.0	5.0	3.7	白	羽根文		肥前系
9	埋め立て	中碗(丸形)	11.3	6.2	4.4	灰白	草文等		高台内に「大明年製」銘 肥前系
10	落ち込みⅡ	中碗(丸形)	(9.0)	3.2	4.1	灰白	外底部 格子文		畳付 無釉 瀬戸・美濃か?
11	埋め立て	中碗(腰張)	11.7	7.9	5.2	灰	山水図		陶胎染付
12	猪飼中央	中碗(腰張)	8.5	5.9	3.2	灰白	稲束	十字花文	湯飲碗 肥前系
13	神明宮跡	中碗(飯碗形)	11.1	5.8	5.1	白	アザミ	アザミ 四方禪文	肥前系
14	落ち込みⅡ	中碗(広東形)	10.0	5.4	4.7	灰白	草花文		在地の可能性
15	落ち込み	中碗(端反)	11.4	6.4	4.3	灰	籠目	連弧文	肥前系
16	落ち込みⅡ	中碗(広東形)	9.6	5.6	4.3	白	山水		在地の可能性
17	落ち込み	中鉢	21.0	—	—	白			青磁
18	落ち込みⅡ	中碗(端反)	9.3	4.7	4.0	白	花, 唐草文		見込 花文 肥前系
19	落ち込みⅡ	中碗(端反)	11.2	6.2	4.8	白	人物, 楼閣, 山水	重弧楼	見込 家屋, 山水 肥前系
20	埋め立て	中碗(端反)	10.5	5.9	4.0	白	鶴, 雲文	雷文帯	見込 岩, 波文 肥前系
21	落ち込み	中碗(端反)	11.6	6.2	3.8	白	区画, 唐草	雷文	見込 山水文 肥前系
22	神明宮跡	中碗(端反)	10.2	5.7	4.8	白			肥前系
23	落ち込みⅡ	中碗(端反)	10.5	6.2	4.3	白	花卉文		見込 変形字銘 肥前系
24	神明宮跡	中碗(端反)	10.4	6.2	4.6	白	草花文		在地の可能性
25	落ち込みⅡ	中碗(端反)	10.5	5.6	4.2	白	草花文		在地の可能性
26	中碗(端反)	中碗(端反)	10.0	5.6	4.1	灰白	蛸唐草文	四方禪文	見込 松竹梅文 肥前系
27	落ち込みⅢ	中碗(端反)	11.0	5.5	5.2	白	葉文		見込 蛇ノ目釉ハギ 在地の可能性 長体系 肥前系
28	埋め立て	中碗(端反)	11.3	6.0	4.1	灰白	笹		蛇ノ目釉ハギ アルミナ塗り 肥前系
29	猪飼中央	大碗(端反)	14.8	6.8	7.0	白	花唐文	唐草文, 寿	見込 折花か? 高台内銘有り 在地の可能性
30	落ち込みⅡ	小皿(丸形)	9.8	2.5	5.4	白	折松葉文	山水	肥前系
31	落ち込み	小皿(丸形)	10.6	1.7	7.0	灰白	唐草文	蝶, 花文	蛇ノ目凹形高台 肥前系
32	落ち込みⅡ	小皿(丸形)	10.5	1.9	5.9	白	鶴文	亀文	高台内に「催」の銘 肥前系
33	落ち込みⅡ	小皿(丸形)	11.8	2.3	6.5	灰白	宝文	菊文	高台内銘有り 太湖石 肥前系
34	埋め立て	中皿(丸形)	13.8	3.2	7.0	灰白	唐草文	菊文	高台内「大明年製」銘 見込 蒟蒻印 肥前系
35	神明宮跡	中皿(丸形)	13.6	3.4	7.8	灰白	唐草文		見込 蒟蒻印 肥前系
36	神明宮前	皿	13.6	4.5	7.3	灰白	唐草文	扇, 草文	見込 蒟蒻印 肥前系
37	埋め立て	中皿(丸形)	12.8	3.4	7.4	灰白	唐草文	草木	見込 蒟蒻印 口紅 肥前系
38	落ち込みⅡ	中皿(丸形)	13.1	3.4	8.3	灰白	唐草文		

No	出土地点	分類	法量 (cm)			胎土	文様		備考
			口径	器高	高台径		外面	内面	
39	猪飼央	中皿	—	(1.9)	9.0	灰白			見込 蕉 蛇ノ目釉ハギ 底部は喜佐工門の墨書 高台内 昆虫文 型打 肥前系
40	埋め立て	中皿	(12.0)	—	—	白	唐草文		見込 松竹梅 蛇ノ目凹形高台 肥前系
41	落ち込みⅡ	中皿	—	(2.5)	12.6	灰白	唐草文	五弁花, 唐草	高台内 渦福 蒟蒻印 肥前系
42	落ち込みⅡ	中皿	—	—	12.5	灰白	色絵(黄)		清朝か?
43	下屋敷	中皿(端反)	18.0	3.0	11.1	灰白	唐草文	梅, 菊文	肥前系
44	落ち込み	大皿	—	(2.2)	15.5	白		唐草文	見込 松竹梅 肥前系
45	落ち込み	中皿輪花皿	19.0	3.1	12.0	灰白	唐草文	草文	肥前系
46	神明宮跡	小皿稜花皿	12.8	3.4	7.5	白	唐草文	唐草	見込 松竹梅 在地の可能性
47	落ち込みⅡ	小皿	14.4	4.4	8.1	白	楼閣山水		蛇ノ目凹形高台 型打 肥前系
48	埋め立て	中皿	(20.3)	3.8	12.0	白	花, 蝶		墨引き(技法) 蛇ノ目凹形高台 在地の可能性
49	埋め立て	極小皿稜花皿	7.0	1.8	4.0	灰白	唐草型紙摺か	折松葉	口紅 肥前系
50	落ち込みⅡ	小皿	14.6	4.4	8.8	白	楼閣山水(山, 楼閣 樹木)橋, 土波		畳付 無釉 蛇ノ目凹形高台 型打 口紅 肥前系
51	—	角皿	20.9	3.4	14.2	灰白	抽象文, 「富貴 長春」銘 雷文	岩, 竹	ハリ支え痕(1650) 肥前系
52	落ち込み	角皿	14	3.5	8.0	白	月, 舟	牡丹花と葉	肥前系
53	落ち込みⅡ	稜花鉢	19.2	9.3	9.0	灰白	遠山, 草花	東屋, 樹木	見込 波岩, 東屋 型打 肥前系
54	—	稜花鉢	19.0	9.7	9.0	白	折松葉	笹, 梅	見込 コウモリ 肥前系
55	落ち込みⅡ	輪花鉢	16.2	7.1	9.0	灰白	柳, 花文	楼閣, 岩, 鳥, 花文	見込 遠山 蛇ノ目凹形高台 肥前系
56	落ち込み	稜花鉢 (8角)	15.2	8.0	8.0	白	菊弁区画, 山水, 東屋, 七宝	方形区画, 七宝と山水, 鳥, 東屋	見込 東屋と岩松 肥前系
57	落ち込みⅡ	小碗	8.3	4.4	3.5	白			在地の可能性
58	落ち込みⅡ	中鉢(端反)	15.0	6.0	8.0	白			肥前系
59	—	蓋	(8.2)	2.3	(3.5)	白	角連弁, 唐草文	四方禪文	見込 松竹梅文 在地の可能性
60	落ち込み	蓋(端反)	9.6	3.0	4.0	灰白	鶴		肥前系
61	神明宮跡	蓋	9.6	3.0	4.2	白	草花文		蛇ノ目釉ハギ 在地の可能性
62	落ち込み	蓋?	9.0	2.1	3.6	白			見込 蛇ノ目釉ハギ 詳細不明 肥前系
63	落ち込み	蓋(端反)	8.5	3.1	3.6	白	鳥, 雲, 草花		見込 蛇ノ目釉ハギ 在地の可能性
64	落ち込み	五寸皿	13.6	3.6	4.5	灰白	斜格子		在地の可能性
65	落ち込みⅡ	小碗(端反)	6.4	3.0	2.8	白	角連弁	岩松, 橋	肥前系
66	落ち込み	小林(端反)	4.4	2.8	2.0	灰白		目砂	不明
67	落ち込み	小林	4.3	2.8	2.0	灰白	稲束		肥前系
68	埋め立て	小碗(端反)	5.8	3.3	2.7	白	笹文		肥前系
69	落ち込み	小碗(桶形)	6.0	3.0	2.5	白	花文		肥前系
70	落ち込み	小杯(端反)	3.0	2.9	2.5	白	花卉	無文	肥前系
71	落ち込み	小碗(桶形)	5.9	2.9	2.1	白	無文	無文	肥前系
72	落ち込み	小碗	5.4	3.0	2.4	白	竹	無文	肥前系
73	猪飼央	小杯(端反)	4.4	3.1	3.0	白	無文	無文	肥前系
74	落ち込み	小碗(桶形)	5.7	3.3	3.5	白	無文	無文	肥前系

No	出土地点	分類	法 量 (cm)			胎土	文 様		備 考
			口 径	器 高	高台径		外面	内面	
75	埋め立て	小杯	4.6	3.6	3.3	白	無文	無文	
76	落ち込み	小杯	5.2	3.4	2.7	白	笹文	無文	
77	落ち込みⅡ	紅猪口	5.2	1.4	2.1	灰白	無釉		白釉 菊花弁の型押
78	落ち込みⅡ	紅猪口	5.4	2.0	1.7	灰白	蛸唐草		疊付 無釉 蛸唐草文 型押し 瀬戸・美濃系
79	落ち込み	紅猪口	4.6	1.4	1.5	灰白	無釉	四方	菊花弁の型押 型が小さい 肥前系
80	埋め立て	小碗(端反)	8.8	4.6	3.2	灰白	紅	染色体文	見込? 瀬戸・美濃の可能性
81	落ち込みⅡ	碗	11.3	-	-	灰白	無文	四方櫛	青磁風
82	埋め立て	小碗(丸形)	7.3	4.5	3.2	灰白	雷文, 連弁		肥前系
83	下屋敷	小碗(半筒形)	7.5	5.6	4.0	白	雪輪, 雪持笹		見込 昆虫文 肥前系
84	落ち込み	小碗(筒丸形)	5.6	4.7	3.3	白	石蔵, 棕釉岩, 雲文		肥前系
85	-	小碗(筒丸形)	6.6	4.2	3.6	灰白	連続寿, Δ文		肥前系
86	猪飼央	小碗(筒丸形)	8.2	5.9	4.0	白	蛸唐草文	四方櫛	肥前系
87	埋め立て	小碗(筒丸形)	6.6	5.0	3.4	白	丸, ススキ		肥前系
88	落ち込み	小碗(筒丸形)	6.8	5.4	3.6	白	唐子		肥前系
89	落ち込み	小碗(筒丸形)	6.9	6.0	3.5	白	雷文, カニ, 水草		肥前系
90	落ち込み	小碗(筒丸形)	7.5	5.3	3.6	白	海, 遠山		肥前系
91	埋め立て	小碗(筒丸形)	6.6	5.2	3.6	白	蝶		肥前系
92	埋め立て	小碗(筒丸形)	7.7	7.0	3.7	灰白	波文, 宝珠文		肥前系
93	落ち込み	小碗(筒丸形)	8.5	7.0	4.2	白	雷文	菊文	肥前系
94	落ち込みⅡ	ソバ猪口	7.4	5.7	4.4	灰白	草文		肥前系
95	神明宮跡	ソバ猪口	7.3	5.6	5.0	灰白	櫻珞文		肥前系
96	埋め立て	ソバ猪口	7.2	6.1	5.3	白	櫻珞文		肥前系
97	落ち込み	ソバ猪口	(7.6)	6.2	(5.5)	白	角連弁文		蛇ノ目凹形高台 肥前系
98	落ち込み	蓋物	6.4	3.6	3.3	灰白			口唇内側無釉 肥前系
99	落ち込みⅡ	蓋物	7.6	3.9	3.6	白	蛸唐草文		口唇内側無釉 肥前系
100	神明宮跡	蓋物	9.3	4.9	4.9	白	連弧文(波文, アワ)		口唇内側無釉 肥前系
101	落ち込み	蓋物	11.5	5.7	4.4	白	銀杏(葉)		見込 蛇ノ目釉ハギ 肥前系
102	落ち込み	蓋物	9.8	5.1	4.6	白	花, 唐草文		口唇内側無釉 肥前系
103	埋め立て	蓋物	10.7	5.5	5.3	灰白	丸文		口唇内側無釉 肥前系
104	埋め立て	蓋	10.0	2.6	4.3	白	花文	四方櫛文	肥前系
105	埋め立て	蓋	11.1	3.5	4.7	白	花文 角連弁文	五弁花	肥前系
106	埋め立て	蓋物蓋	9.3	(2.3)	(8.0)	白	蛸唐草文		頂部 橋摘み 肥前系
107	下屋敷	蓋物蓋	9.5	(2.2)	8.3	灰白	丸文		頂部 橋摘み 色絵 肥前系
108	落ち込みⅡ	蓋物蓋	12.5	3.2	11.5	白	蛸唐草文		頂部 橋摘み痕有り 肥前系
109	落ち込みⅡ	蓋物蓋	11.8	3.0	10.6	灰白	格子, 蝶		頂部 橋摘み 肥前系
110	落ち込み	蓋物蓋	11.7	3.2	10.8	白	イチョウ葉		頂部 橋摘み 肥前系
111	埋め立て	蓋物蓋	13.5	3.6	10.7	灰白			肥前系

No	出土地点	分類	法量 (cm)			胎土	文様		備考
			口径	器高	高台径		外面	内面	
112	埋め立て	仏飯器	5.4	4.0	3.2	白			高台無釉 台底半球状凹み 肥前系
113	埋め立て	仏飯器	5.3	4.3	3.7	白			高台無釉 台底半球状凹み 肥前系
114	落ち込み	仏飯器	6.6	5.1	4.2	白			高台無釉 台底半球状凹み 肥前系
115	落ち込み	仏飯器	6.1	5.1	4.1	白			高台無釉 台底半球状凹み 肥前系
116	落ち込みⅡ	仏飯器	6.8	5.2	4.0	白			台底半球状凹み 肥前系
117	落ち込み	仏飯器	6.7	7.3	4.1	白	帯線		台底凹み
118	落ち込みⅡ	香炉	7.4	5.1	4.7	白			線香立て, 煙草の火入れ 内面 高台露胎
119	猪飼中央	花瓶	—	5.4	(12.0)	白	花鳥文(椿, ムジロ)		肥前系
120	埋め立て	急須	6.6	6.4	5.3	灰白	幾何学, 楼閣山水文		腰部以下無釉 模手形 肥前系
121	埋め立て	油壺	2.6	(6.0)	—	白	梅文		肥前系
122	猪飼中央	散蓮華	5.0 (10.0)		(45.0)	白	?	蔓, 葉	肥前系

第3表 出土遺物観察表(陶器) その1

No	出土地点	分類	法量 (cm)			釉調		胎土色	文様	備考
			口径	器高	高台径	外面	内面			
123	埋め立て	碗	8.3	5.3	3.7	透明釉	透明釉	灰白	外面 千鳥文	畳付無釉 稲荷窯系
124	落ち込み	碗	12.0	5.5	4.2	透明釉	透明釉	灰白	外面 千鳥文	畳付無釉 稲荷窯系
125	埋め立て	碗	12.0	5.7	4.5	透明釉	透明釉	灰白	外面 千鳥文	畳付無釉 稲荷窯系
126	埋め立て	中碗	11.8	5.6	4.8	透明釉	透明釉	淡黄	外面 千鳥文	畳付無釉 豎野冷水系 稲荷窯系
127	落ち込み	碗	10.1	6.6	4.4	淡黄色釉	淡黄色釉	灰白	外面 草文	白さつま 貫入 底部, 畳付無釉
128	下屋敷	碗	8.4	5.3	3.5	飴釉	飴釉	黄褐		畳付無釉 山元窯
129	埋め立て	碗	9.8	5.0	3.8	透明釉	透明釉	灰白		畳付無釉 見込 蛇ノ目釉ハギ 豎野冷水窯系
130	神明宮跡	碗	10.0	4.9	3.2	透明釉	透明釉	灰	三島手	畳付無釉 貫入 豎野冷水窯系
131	落ち込み	碗	9.2	6.4	3.8	透明釉	透明釉	灰白	外面 草文 「載」	高台無釉 貫入 豎野冷水窯系
132	落ち込み	碗	10.4	6.1	4.3	淡黄色釉	淡黄色釉	灰白	外面 梅文	畳付無釉 貫入 豎野冷水窯系
133	埋め立て	中碗(端反)	9.1	5.0	3.3	灰釉	灰釉	灰白		高台無釉 貫入 豎野冷水窯系
134	猪飼中央	中碗(端反)	10.4	5.9	4.6	淡黄色釉	淡黄色釉	灰白	外面三ヶ所「門」様有り 他に「一」様の文様有り	畳付無釉 豎野冷水窯系
135	落ち込み	中碗	9.6	4.7	5.3	明緑灰色釉	明緑灰色釉	灰白		高台無釉 貫入 豎野冷水窯系
136	猪飼中央	中碗	10.5	6.5	4.7	透明釉	透明釉	灰白		畳付無釉 「寿」 豎野冷水窯系
137	落ち込み	中碗	9.5	5.5	3.6	淡黄色釉	淡黄色釉	白		畳付無釉, 貫入 豎野冷水窯系
138	埋め立て	皿	—	(2.6)	6.4	透明釉	透明釉	淡黄		畳付, 見込無釉 見込「十五才」 豎野冷水窯系
139	埋め立て	小碗(腰張形)	6.0	4.1	3.3	淡橙色釉	淡橙色釉	浅黄橙		下部無釉 豎野冷水窯系
140	神明宮跡	小碗	6.4	4.0	3.4	淡黄色釉	淡黄色釉	灰白		下部無釉 (白さつま) 豎野冷水窯系
141	神明宮跡	小碗	7.0	4.3	5.0	透明釉	透明釉	灰白		畳付無釉 貫入 豎野冷水窯系

No	出土地点	分類	法量 (cm)			釉調		胎土色	文様	備考
			口径	器高	高台径	外面	内面			
142	埋め立て	小碗 (腰折形+端反)	6.6	4.4	4.0	淡黄色釉	淡黄色釉	灰白		下部無釉 貫入 豎野冷水窯系
143	埋め立て	小碗(腰折形)	6.2	3.7	3.6	浅黄色釉	浅黄色釉	淡黄		下部無釉 一部淡赤橙色釉 豎野冷水窯系
144	埋め立て	小碗(腰折形)	5.3	3.5	2.9	浅黄色釉	浅黄橙色釉	淡黄		糸切り底 下部無釉 豎野冷水窯系
145	落ち込み	猪口(端反)	5.0	2.7	2.2	透明釉	褐釉	灰白		畳付無釉 内面に褐色釉有り 豎野冷水窯系
146	落ち込み	猪口(端反)	5.1	3.0	2.2	暗緑色釉	透明釉	灰白	外底部に短線	畳付無釉 貫入 豎野冷水窯系
147	埋め立て	猪口	4.4	3.2	2.0	透明釉	透明釉	灰白		畳付無釉 白さつま 貫入 豎野冷水窯系
148	埋め立て	猪口	3.9	3.5	1.8	透明釉	透明釉	灰白	点文様	貫入 (白さつま) 豎野冷水窯系
149	猪飼中央	小皿(高台)	9.1	2.2	3.8	浅黄色釉	浅黄色釉	灰	見込 釉かき	外底部に砂目 畳付無釉 見込 蛇ノ目釉ハギ
150	猪飼中央	小皿(高台)	6.6	2.6	3.7	浅黄色釉	浅黄色釉	灰		見込 砂目 蛇ノ目釉ハギ
151	猪飼中央	小皿(高台)	6.5	2.6	3.7	浅黄色釉	浅黄色釉	黄灰		畳付, 高台内無釉 見込 蛇ノ目釉ハギ
152	埋め立て	小皿(高台)	6.5	2.9	4.0	暗緑色釉	暗緑色釉	明赤褐		高台無釉 見込 蛇ノ目釉ハギ
153	猪飼中央	小皿(高台)	6.7	2.5	3.3	浅黄色釉	浅黄色釉	灰		畳付, 高台, 高台内面無釉 見込 蛇ノ目釉ハギ
154	埋め立て	小皿	10.9	2.3	4.4	釉ダレ	暗緑色釉	明赤褐	外縁 無釉	見込と外底部に砂目 糸切り底
155	猪飼中央	小皿	11.2	2.3	5.2	釉ダレ	暗緑色釉	灰		見込, 外底に砂目4ヶ所 糸切り底 山元窯
156	猪飼中央	小皿	10.7	2.5	4.7	釉ダレ	暗緑色釉	灰		見込, 外底に砂目5ヶ所 糸切り底 山元窯
157	下屋敷	小皿	10.9	2.8	4.7	釉ダレ	飴釉	灰		見込に砂目5ヶ所 糸切り底 山元窯
158	抱真院	小皿	10.0	2.8	4.6	釉ダレ	褐釉	明褐		見込と外底部に目跡 糸切り底 山元窯
159	埋め立て	小皿	11.0	2.8	5.0	褐釉	褐釉	灰褐		下部無釉 見込砂目 糸切り底 山元窯
160	下屋敷	小皿	11.1	2.4	5.0	釉ダレ	暗緑色釉	灰		見込に目跡 糸切り底 山元窯
161	猪飼中央	小皿	10.6	1.7	5.4	釉ダレ	褐釉	明褐		見込と外底部に砂目5ヶ所 糸切り底 山元窯
162	猪飼中央	小皿	11.4	2.9	4.8	褐釉	褐釉	暗赤褐		見込と外底部に砂目5ヶ所 糸切り底 下部無釉 山元窯
163	埋め立て	小皿	10.4	2.5	4.4	釉ダレ	黄褐色釉	灰		目跡4ヶ所 糸切り底 山元窯
164	埋め立て	小皿	9.4	2.9	4.3	褐釉	褐釉	赤褐		下部無釉 糸切り底 山元窯
165	くい列	小皿	9.3	2.4	4.4	釉ダレ	赤褐色と黄緑色釉	黄褐		見込と外底部に目跡3ヶ所 糸切り底 山元窯
166	埋め立て	仏飯器 (台底輪高台)	5.4	4.8	3.5	透明釉	透明釉	明赤褐		高台無釉 見込 砂目 白色化粧土 豎野冷水窯系
167	埋め立て	仏飯器	5.7	5.0	4.1	透明釉	透明釉	暗赤褐		下部無釉 砂付着 白色化粧土
168	埋め立て	仏飯器 (台底輪高台)	5.4	4.2	3.4	透明釉	透明釉	灰		高台無釉 下部無釉 白色化粧土
169	猪飼中央	仏飯器	6.0	4.4	3.3	透明釉	透明釉	暗褐		下部無釉 口縁部に灰色化粧土
170	猪飼中央	仏飯器	6.4	4.4	3.8	灰釉	灰釉	灰		下部無釉 口縁部に灰白色化粧土
171	埋め立て	仏飯器	8.4	6.1	4.3	飴釉	飴釉	明褐		高台無釉 見込 蛇ノ目釉ハギ 山元窯
172	埋め立て	仏飯器	8.4	6.2	4.9	飴釉	飴釉	浅黄橙		見込 蛇ノ目釉ハギ 高台無釉 山元窯
173	猪飼中央	仏飯器	10.2	5.6	4.5	透明釉	透明釉	暗赤褐		高台無釉
174	下屋敷	仏飯器	9.2	7.1	6.0	飴釉	飴釉	暗褐		下部, 高台内部無釉 山元窯
175	猪飼中央	灯明皿台	6.7 7.2	5.5 0.8	5.0	飴釉	飴釉	暗褐		外底部無釉 糸切り底 山元窯

No	出土地点	分類	法量 (cm)			釉調		胎土色	文様	備考
			口径	器高	高台径	外面	内面			
176	猪飼中央	灯明皿台	7.7 9.2	6.0 4.9	5.0	褐釉	褐釉	明褐		外底部無釉 糸切り底 山元窯系
177	埋め立て	灯明皿台	7.3 7.8	5.5 7.2	5.4	飴釉	飴釉	明褐		外底部無釉 糸切り底 口縁部釉ハギ 山元窯系
178	猪飼中央	灯明皿台	7.0 7.5	5.6 1.0	4.5	暗褐色釉	暗褐色釉	褐		外底部無釉 糸切り底 山元窯系
179	下屋敷	灯明皿台	6.5 7.5	5.0 1.1	5.0	黄褐色釉	黄褐色釉	明褐		外底部無釉 山元窯系 糸切り底 (下部底ゆがみ)
180	埋め立て	乗燭	6.3	4.6	3.8	透明釉	透明釉	灰白		下部無釉
181	杭列	乗燭	4.2	5.5	4.2	透明釉	透明釉	灰白	外面 千鳥文	下部無釉 口縁部やや斜め 稲荷窯系
182	猪飼中央	乗燭	4.8	5.1	4.0	飴釉	飴釉	暗褐		下部無釉 黒サツマ
183	猪飼中央	乗燭	5.0	5.2	3.5	飴釉	飴釉	赤褐		下部無釉 黒サツマ
184	猪飼中央	乗燭	4.7	5.3	4.1	飴釉	飴釉	暗赤褐		下部無釉 黒サツマ
185	埋め立て	乗燭	4.9	1.7	2.5	無釉	無釉	黄橙		不明
186	落ち込み	灯明皿	9.9	2.6	4.1	白	白	白		見込に砂目 (白さつま)
187	抱真院	灯明皿	5.6	1.3	4.1	無釉	無釉	浅黄橙		底部篋切り 土師質
188	埋め立て	灯明皿	6.5	2.0	4.6	無釉	無釉	灰褐		内外面ともミガキのため刷毛目が目立たず 篋切り 土師質
189	抱真院	灯明皿	7.1	2.0	5.3	無釉	無釉	浅黄橙		底部篋切り 土師質
190	神明宮跡	灯明皿	10.4	2.5	7.7	無釉	無釉	浅黄橙		口唇部全面にススが附着 底部篋切り 土師質
191	埋め立て	灯明皿	9.0	2.0	7.2	無釉	無釉	灰白		口縁部にスス附着 土師質
192	埋め立て	灯明皿	20.1	2.1	7.5	無釉	無釉	浅黄橙		口縁部スス附着 底部 篋切り
193	下屋敷	灯明皿	9.4	2.0	7.0	無釉	無釉	灰白		土師質
194	埋め立て	灯明皿	10.2	2.2	7.8	無釉	無釉	浅黄橙		内外面ともミガキのため刷毛目が目立たず
195	下屋敷	灯明皿	10.2	1.9	7.2	無釉	無釉	浅黄橙		底部篋調整 土師質
196	下屋敷	灯明皿	10.0	1.6	6.7	無釉	無釉	浅黄橙		底部篋調整 土師質
197	下屋敷	灯明皿	10.5	1.4	8.0	無釉	無釉	浅黄橙		篋切り 土師質
198	抱真院	灯明皿	11.2	2.6	7.8	無釉	無釉	淡黄		全面にスス附着 篋切り 土師質
199	猪飼中央	燭台 (中央に棒を立てる)	11.7	2.8	9.2	無釉	無釉	浅黄橙	内外底面は無彩色赤彩色を基調に金ばく	底部に穴を穿つ 土師質
200	落ち込み	燭台 (中央に棒を立てる)	9.2	2.2	5.0	無釉	無釉	浅黄橙		底部に穴を穿つ 篋切り 土師質
201	埋め立て	燭台 (中央に棒を立てる)	4.6	1.8	3.2	無釉	明褐色釉	黄橙		棒を立てるための橋付 土師質
202	猪飼中央	香炉	12.3	9.3	8.0	透明釉	釉ダレ	灰白	外面 連弧文 四方禪文	宋胡録写 豎野冷水窯系
203	下屋敷	香炉	12.2	7.1	5.6	褐釉	釉ダレ	明赤褐		底部 蛇ノ目様釉ハギ
204	落ち込み	香炉	11.2	7.2 3.7	4.0	透明釉	透明釉	灰白		三足 豎野冷水窯系
205	埋め立て	香炉	11.5	4.4 (6.3)	4.8	透明釉	透明釉	灰白		三足 豎野冷水窯系
206	—	油壺	1.8	5.7	2.3	透明釉	無釉	褐		外面 白色化粧土 下部無釉 口縁部褐釉 龍門司
207	猪飼中央	油壺	1.8	5.1	2.7	透明釉	透明釉	暗褐		内面, 外面上部 白色化粧土 下部無釉
208	猪飼中央	油壺	—	(5.0)	4.0	飴釉	釉ダレ	灰		下部無釉 龍門司

No	出土地点	分類	法量 (cm)			釉調		胎土色	文様	備考
			口径	器高	高台径	外面	内面			
209	下屋敷	油壺	—	(5.0)	5.7	透明釉	無釉	灰白	鶴, 唐草, 花	畳付無釉
210	埋め立て	髪付だらい壺	長11.4 短5.4	3.4	長11.9 短5.4	透明釉	透明釉	灰白	水鳥	裏(底)「享保十三年〇〇〇〇?」 豎野冷水窯系
211	神明宮跡	仏花器	(4.9)	9.9	4.4	黒褐色釉	黒褐色釉	灰		肩部に2個の小外耳突起 糸切り底 下部無釉 元立院窯
212	神明宮跡	仏花器	—	(13.0)	7.2	黒褐色釉	黒褐色釉	灰		肩部に2個の小外耳突起 糸切り底 下部無釉 元立院窯
213	埋め立て	中瓶 (徳利)	4.6	—	—	浅黄色釉	浅黄色釉	灰白		「高田徳利(瀬戸, 美濃)形」 玉縁口縁
214	埋め立て	仏花瓶 (逆蕉八口形)	7.2	—	—	褐釉	褐釉	灰白		双耳帖付 豎野冷水窯系
215	落ち込みⅡ	仏花瓶	—	(8.1)	6.4	透明釉	緑灰釉	灰白		底部無釉 貫入 豎野冷水窯系
216	落ち込みⅡ	仏花瓶	—	(10.8)	6.2	透明釉	透明釉	灰白		底部無釉 貫入 豎野冷水窯系
217	落ち込み	仏花瓶	—	(11.8)	10.4	透明釉	透明釉	灰白		貫入 豎野冷水窯系
218	猪飼中央	蓋	6.5	7.8	6.2	透明釉	透明釉	灰		三島手写 豎野冷水窯系
219	下屋敷	小壺	9.4	(9.6)	(10.3)	黒褐色釉	黒褐色釉	黒褐		口唇部にハゲ有り
220	下屋敷	壺	5.4	12.8	6.9	緑灰色釉	緑灰色釉	灰		鮫肌焼 龍門司
221	—	壺	4.6	(3.7)	—	褐釉	褐釉	暗褐		琉球焼
222	猪飼中央	蓋	(7.4)	22.4	8.4 最大径10.5	暗褐色釉	暗褐色釉	赤褐		琉球焼
223	猪飼中央	壺	3.4	(27.0)	(8.6)	無釉	無釉	赤褐		
224	猪飼中央	蓋	—	22.1	8.4	暗褐色釉	暗褐色釉	暗赤褐		
225	埋め立て	片口	15.0 (17.1)	9.4	9.0	無釉	無釉	灰		底部篋切り
226	落ち込み	蓋	7.6	3.7	5.0	透明釉	無釉	白		ツマミ有り 苗代川系
227	猪飼中央	蓋	7.0	3.4 2.4	5.2	暗褐色釉	無釉	黄橙		ツマミ有り 苗代川系
228	下屋敷	蓋	1.2 (0.6)	2.8 (1.4)	4.6 (2.3)	鉛釉	無釉	褐		ツマミ有り 苗代川系
229	猪飼中央	蓋	7.3	3.9 2.6	4.9	暗緑色釉	無釉	暗褐		ツマミ有り 苗代川系
230	猪飼中央	蓋	10.3	3.0 0.7	7.4	褐釉	無釉	黄橙		ツマミ有り 山元窯
231	神明宮跡	蓋	9.6	(3.1)	7.0	透明釉	透明釉	白		見受け部無釉 宋胡録写 豎野冷水窯系
232	猪飼中央	蓋	5.8	2.7	4.0	透明釉	無釉	灰白		孔有り 琉球焼
233	—	蓋	9.6	1.7	5.4	透明釉	無釉	浅黄橙		肩部無釉
234	—	蓋	8.8	1.2	4.2	透明釉	無釉	浅黄橙		無釉 底部糸切り
235	—	蓋	8.6	1.7	4.2	明緑灰色釉	無釉	灰		外面肩部無釉
236	落ち込み	土瓶	4.7	8.4	5.2	透明釉	透明釉	白	つる草	全長12.8cm 上手形 白薩摩
237	落ち込み	土瓶	6.2	9.1 9.6	5.6	透明釉	透明釉	白		全長15.4cm 三脚 貫入 底部スス付着 上手形
238	溝1	土瓶	(8.2)	(7.3)	8.0	透明釉	透明釉	浅黄白		白色化粧土 外面は緑, 青, 褐色釉 琉球焼
239	落ち込み	急須	14.2	(7.4)	—	透明釉	透明釉	淡黄		全長19.2cm 貫入 底部スス付着 横手形
240	埋め立て	御皿	11.1	3.2	4.1	透明釉	透明釉	灰		下部無釉

No	出土地点	分類	法量 (cm)			胎土		文様	備考
			口径	器高	高台径	外面	内面		
241	落ち込み	丸形鉢	26.3	12.8	10.0	灰色 緑釉	黄白色		龍門司 二彩 底部無釉
242	猪飼中央	播鉢	36.0	11.5	15.6	暗緑色	茶褐色		黒薩摩
243	猪飼中央	播鉢	32.4	14.6	16.6	暗緑色	やや明 るい		口唇部上面のみ露胎 内面刷毛目 黒薩摩
244	—	捏鉢	23.2	16.8	9.6	暗緑色	暗緑色		底部, 口唇部上面は露胎 黒薩摩 焼成悪
245	埋め立て	捏鉢	24.5	15.2	6.9	黒褐色	黒褐色		黒薩摩 貝目有り
246	埋め立て	捏鉢	24.4	7.6	18.2	暗緑色	茶褐色		黒薩摩
247	埋め立て	大皿	41.4	(6.5)	—	茶褐色	褐釉	櫛描き波状文	外面口縁部下無釉
248	落ち込み	琉球壺	15.1	—	—	茶褐色	茶褐色		胎土にサンゴ粒有り 外耳
249	—	琉球壺	16.3	—	—	赤褐色	赤褐色		胎土にサンゴ粒有り 外耳
250	—	広口壺	19.1	—	—	暗緑色	暗緑色		口唇部上面は無釉 黒薩摩 苗代川系
251	—	広口壺	12.0	—	—	黄白色	黄白色		文字「本口…」 黒薩摩 苗代川系
252	埋め立て	甕	24.2	—	—	黒褐色	黄褐色+ 乳白色		黒薩摩
253	—	大甕	41.6	—	—	赤褐色	赤褐色		口唇部端に刻目突帯 琉球焼 胎土にサンゴ粒有 L字口縁
254	—	大甕	—	—	—	赤褐色	赤褐色	ハス模様貼り付 け	口唇部フリル状の装飾 L字口縁 琉球焼 胎土にサンゴ粒有り 径80cmを測る大甕
255	埋め立て	火鉢 (火入れ)	13.6	6.8	13.2	明茶褐色	明茶褐色	外面スス付着	土師質
256	埋め立て	竈	(12.0)	12.0	全長 17.1	明茶褐色	明茶褐色	内面にスス大量 付着	糸切底
257	落ち込み	鞘	21.8	9.7	24.9	白色釉	白色釉		内側外面上部は白色釉
258	猪飼中央	張形	長 (9.2)	径 4.8	—	透明釉	透明釉		白薩摩 張形 内部は空洞 内面にロク口痕

第4表 出土遺物表観察表 (外国産陶磁器) その1

No	出土地点	分類	法量 (cm)			胎土	文様	備考
			口径	器高	高台径			
259	落ち込みⅡ	皿	—	—	—	灰白	楼閣, 樹木, 「・・・E CHIN A」 「・・・LOW」, 印版 「P. REGOUT 19 MASTRICHT 紺絵	19世紀?
260	落ち込み	皿	18.0	2.6	11.2	灰白		清朝
261	落ち込みⅡ	皿	15.4	3.3	8.2	白		中国産 沖縄湧田窯で出土のものと同類
262	落ち込み	皿	8.3	2.2	6.0	白	外面 シトツ 内面 黄色, 蝶	界線3重 中心線 口ハゲ 見込 寿, 赤絵 無釉チヂレ 清朝
263	埋め立て	小碗(端反)	7.9	4.2	3.0	灰白	外面 宝 底 文字?	清朝青磁
264	落ち込みⅡ	碗	—	—	7.8	白		清朝色絵 高台高い
265	落ち込みⅡ	碗	—	—	4.2	白		高台高い
266	落ち込みⅡ	碗	—	1.5 (高台)	8.5	灰白		高台高い 疊付無釉
267	落ち込みⅡ	碗	—	—	7.0	灰白		清朝 高台高い

No・	出土地点	分類	法量 (cm)			胎土	文様	備考
			口径	器高	高台径			
268	落ち込みⅡ	皿(折縁)	—	—	13.1	白	家屋, 松	清朝 焼継ぎ
269	落ち込みⅡ	猪口	4.1	2.7	2.2	白	草花文	清朝色絵(緑地)
270	落ち込みⅡ	猪口	6.0	3.2	2.9	白		清朝白磁
271	落ち込みⅡ	猪口	7.3	1.8	3.5	白	内面 松, 短線	見込 草花文 重円弧文
272	落ち込みⅡ	猪口	6.3	3.1	3.4	白		清朝色絵 外底部に釉ダレ
273	落ち込み	鉢(端反)	12.6	5.0	5.7	灰白	外面 唐草文 内面 界線	福建, 広東産 清朝
274	—	中碗(端反)	9.6	4.7	4.2	白	外面 牡丹唐草文	清朝 見込 折花

第5表 出土遺物観察表(焙烙)

No	出土地点	法量 (cm)				胎土	色調	ロクロ 方向	備考
		口径	底径	器高	取手				
275	猪飼中央	16.3	11.5	3.2	3.8	土師質	黄橙色	左	内面2/3にスス付着。篋切り
276	猪飼中央	15.5	11.7	3.3	4.3	土師質	浅黄橙色	左	篋切り
277	猪飼中央	16.3	13.2	4.3	4.5	土師質	黄橙色	右	篋切り
278	猪飼中央	17.2	13.5	3.1	4.8	土師質	にぶい黄橙色	左	底面, 取手付近にスス付着
279	猪飼中央	14.2	10.3	2.5	4.2	土師質	浅黄橙色	右	篋切り
280	神明宮前	15.4	11.2	3.0	3.8	土師質	橙色	左	スス付着。篋切り
281	神明宮前	19.2	12.7	3.3	4.9	土師質	橙色	左	口縁部スス付着。篋切り
282	神明宮跡	19.0	11.5	3.4	4.4	土師質	黄橙色	左	篋切り
283	下屋敷	17.7	13.1	3.1	4.7	土師質	浅黄橙色	右	篋切り
284	神明宮跡	18.8	13.0	3.7	4.2	土師質	黄橙色	左	篋切り
285	猪飼中央	17.6	11.8	4.0	—	土師質	にぶい黄橙色	左	外側面の一部にスス付着。篋切り
286	猪飼中央	15.3	12.7	3.1	(1.6)	土師質	浅黄橙色	右	篋切り
287	猪飼中央	13.2	10.2	2.8	(3.2)	土師質	橙色	左	篋切り
288	猪飼中央	14.0	10.7	2.7	(2.2)	土師質	橙色	左	篋切り
289	猪飼中央	14.1	10.5	3.0	(1.2)	土師質	明黄褐色	右	篋切り
290	神明宮前	15.6	11.4	3.1	—	土師質	黄橙色	左	底面にスス付着。篋切り
291	神明宮前	17.3	13.3	3.5	—	土師質	明黄褐色	左	篋切り
292	下屋敷	17.9	14.0	3.7	—	土師質	にぶい黄橙色	左	篋切り
293	猪飼中央	17.1	11.7	3.0	—	土師質	にぶい黄橙色	右	篋切り
294	猪飼中央	17.2	13.3	3.8	—	土師質	灰白色	左	篋切り

第6表 出土遺物観察表(木製品・漆碗) その1

No	出土地点	分類	法量 (cm)				色調		備考
			口径	器高	高台径	高台高	外面	内面	
295	埋め立て	漆器碗	11.2	6.6	4.9	1.4	黒	黒	
296	埋め立て	漆器碗	12.9	(5.4)	(6.0)	(0.5)	朱	朱	高部欠損
297	埋め立て	漆器碗	(9.2)	(5.1)	5.2	1.6	黒	黒	口縁部欠損

No	出土地点	分類	法量 (cm)				色調		備考
			口径	器高	高台径	高台高	外面	内面	
298	埋め立て	漆器椀	(11.1)	(6.6)	5.4	2.0	黒	黒	口縁部欠損
299	埋め立て	漆器椀	12.1	4.2	6.0	1.0	黒	黒	
300	埋め立て	漆器椀	11.8	4.3	5.2	4.2	黒	黒	
301	埋め立て	漆器椀	(12.3)	(6.7)	5.2	1.4	朱	朱	口縁部欠損
302	埋め立て	漆器椀	(9.1)	(4.9)	(4.8)	—	朱	朱	口縁部欠損, 高台部欠損
303	埋め立て	漆器椀	13.8	(2.0)	(—)	(—)	朱	朱	底部欠損

第7表 出土遺物観察表 (木製品・竹製品他) その1

No	出土地点	種別	法量 (cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
304	埋め立て	櫛	7.5	3.7	0.6	歯は46本で20本が遺存。両面黒漆。
305	埋め立て	櫛	10.9	(4.6)	0.8	歯は47本で遺存なし。
306	埋め立て	櫛	(6.6)	4.2	0.7	歯は (48) 本で41本が遺存。
307	埋め立て	櫛	(4.7)	3.9	0.6	歯は (33) 本で12本が遺存。両面黒漆。
308	埋め立て	櫛	(8.4)	4.6	0.9	歯は (32) 本で12本が遺存。
309	埋め立て	櫛	(3.9)	4.3	0.8	歯は (34) 本で11本が遺存。
310	埋め立て	引手	(7.5)	(6.4)	0.3	径4.4cm, 金象がんで梅文。表裏とも黒漆
311	埋め立て	杓子	20.7	(2.5)	0.4	身長さ9.3cm 漆, 身の両脇が欠損
312	埋め立て	杓子	26.2	7.1	0.8	身長さ10.8cm
313	埋め立て	杓子	(10.7)	6.2	0.7	身長さ9.9cm 柄が欠損
314	埋め立て	杓子	26.6	4.4	0.4	身長さ7.8cm 身が平ら
315	埋め立て	曲物	高さ 10.9	径 15.5	0.4	止め具に桜皮使用, 3ヶ所で止め
316	埋め立て	すりこぎ	28.3	3.3	—	
317	埋め立て	すりこぎ	31.0	3.7	—	上端部に紐通用の穴
318	埋め立て	杵状木製品	28.9	最大厚 4.9	中厚 3.6	中央部に横方向の擦痕有り
319	埋め立て	高打具	14.3	最大厚 4.3	枝厚 2.4	上部に横方向の擦痕有り
320	埋め立て	重箱の蓋	16.0	(7.7)	0.9	赤漆, 右半欠損
321	埋め立て	角板	20.6	(7.9)	1.1	刻文字「伊一」, 右半欠損
322	埋め立て	高膳の脚	縦 5.6	横 26.0	1.1	両端に組合せ用のホゾ穴有り
323	埋め立て	高膳の脚	縦 8.0	横 25.3	0.9	上部中央に0.5×0.6cmの穴
324	埋め立て	重箱の蓋	径 24.0	—	0.8	寄木造, 黒漆
325	埋め立て	棍棒	57.0	最大厚 5.8	柄厚 4.5	
326	埋め立て	柄鏡箱	26.3	径 15.8	0.5	周囲に釘止めの跡 左半欠損 内面黒漆
327	埋め立て	柄鏡箱	29.7	径 19.4	0.4	周囲に釘止めの跡 左半欠損 焼印有文字不明 内外面黒漆

No	出土地点	種別	法量 (cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
328	埋め立て	丸盆	径 27.4	高 2.9	1.3	釘穴有 繊維状の敷物痕跡有
329	埋め立て	丸盆	径 33.0	高 3.4	0.9	蓋の可能性有 釘穴有敷物の可能性 内面縁, 外全面黒漆
330	埋め立て	楕円形皿	(41.0)	37.9	1.2	
331	埋め立て	曲物蓋	49.0	9.8	0.7	桜皮の止め具残
332	埋め立て	回転物	23.5	7.3	3.0	両端の突起摩耗 釘止め痕跡有
333	埋め立て	刷毛	21.3	8.4	1.2	柄上端紐通し穴有り 2本組の紐止め
334	埋め立て	刷毛	11.2	7.2	0.6	柄下部紐通し穴有り 先端部紐通し穴上下2列
335	埋め立て	刷毛	12.0	(5.2)	0.9	柄下部紐通し穴有り 先端部紐通し穴上下2列 左一部貫通
336	埋め立て	刷毛	10.9	6.8	(0.3)	34とセット 柄下部紐通し穴有り 先端部紐通し穴上下2列 34より穴大
337	埋め立て	刷毛	10.9	(5.6)	(0.4)	33とセット
338	埋め立て	篋	19.6	—	0.5	身3.2, 柄1.6cm
339	埋め立て	篋	24.9	—	0.4	身3.7, 柄1.8cm 柄下端紐通し穴有り
340	埋め立て	篋	24.3	—	0.4	身4.7, 柄2.2cm 身片面加工
341	埋め立て	篋	13.1	—	0.2	身2.1, 柄1.1cm
342	埋め立て	黒壺の一部?	5.8	1.1	—	頭部に紐通し穴有り 装飾用の切れ込みがめぐる
343	埋め立て	篋	19.1	0.8	0.3	下方先端を片側から鋭利に加工 上端は片側から斜めに加工
344	埋め立て	篋	14.9	0.7	0.4	下方先端を片側から鋭利に加工 上端は片側から斜めに加工
345	埋め立て	篋	14.2	0.8	0.4	下方先端を片側から鋭利に加工 上方先端から両側へ斜めに加工
346	埋め立て	篋	14.4	0.6	0.3	下方先端部欠損 上方先端から両側へ斜めに加工
347	埋め立て	番傘の頭	(11.2)	最大幅 6.1	上端幅 4.3	柄, 止め具は竹製
348	埋め立て	番傘の頭	(5.1)	最大幅 6.6	上端幅 4.6	柄, 止め具は竹製
349	埋め立て	扇子	左から 1 29.2 2 (29.1) 3上 (3.3) 3中 (10.8) 3下 (10.8) 4 (19.8) 5上 (8.2) 5下 (8.8) 6上 (9.5) 6下 (9.5)	1.2 0.9 1.0 1.1 0.9 1.1 1.0 0.5 0.6 1.0	0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2 0.2	要の部分に穴 要の部分に穴 要の部分に穴 要の部分に穴 要の部分に穴 要の部分に穴 要の部分に穴 要の部分に穴 要の部分に穴 要の部分に穴
350	埋め立て	不明	身 2.3 柄 24.3	身 8.7 柄 1.8	柄 0.8	竹製の柄を木製の身に装着
351	埋め立て	不明	(21.5)	2.2	—	下部幅1cmの穴を穿つ
352	埋め立て	提灯の柄	38.0	4.4 中央部3.2	0.8	両端に上下2つずつの穴有り
353	埋め立て	樽の蓋	—	—	1.1	径15.5cm 下面に組合せ用継穴
354	埋め立て	樽の蓋の栓	—	—	—	径4.6cm 上長径2.8cm短径2.4cm 下長径2.1cm短径1.8cm
355	埋め立て	樽の蓋の栓	—	—	—	径7.7cm 上3.1cm 下長径1.9cm短径1.6cm
356	埋め立て	滑車	17.9	5.4	5.4	輪径5.2cm輪厚2.7cm 下面に柄穴有り 上端に紐通し穴

No	出土地点	種別	法量 (cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
357	埋め立て	桶の把手部	44.8	9.1	1.6	
358	埋め立て	桶の把手部	38.8	5.5	0.5	焼印「○」
359	埋め立て	桶の把手部	30.0	5.6	1.2	
360	埋め立て	不明	22.7	—	—	端4.9cm 切込加工有り 中4.9cm
361	埋め立て	敷居	(16.5)	(15.0)	—	山部4.4cm 溝幅4.0cm 左端は継目 下端は欠損 溝部3.2cm
362	埋め立て	箆	—	—	0.6	径26.0cm 縦は幅1cm弱の薄ひご2枚を一組とする 横は幅5mm厚さ1mmの竹ひご
363	埋め立て	帚	25.0	21.5	柄 2.1 2.5	

第8表 出土遺物観察表 (木製品・下駄)

No	出土地点	分類	法量 (cm)			穴の分類	備考
			長さ	幅	厚さ		
364	埋め立て	I Aa	21.7	8.2	1.4	B-b-S	連歯, 前後穴下に四角の切込有り
365	埋め立て	I Aa	23.3	9.6	2.0	B-b-S	連歯, 右, 後歯摩耗
366	埋め立て	I Ab	23.4	8.3	1.4	F-b-S	連歯, 左, 後歯摩耗 前後穴下に四角の切込有り
367	埋め立て	I Ab	20.7	10.0	1.1	F-b-S	連歯, 左, 前歯摩耗 前穴径4mm
368	埋め立て	I Ac	21.9	8.9	3.6	B-b-S	連歯, 左, 後歯摩耗 前後の歯を断面三角の台で接続
369	埋め立て	I Ba	24.2	8.1	1.4	—	連歯, 右, 後歯摩耗
370	埋め立て	I Bb	11.8	5.9	1.2	—	連歯, 右用か?
371	埋め立て	I Ca	24.3	8.1	1.1	—	連歯, 右, 後歯摩耗
372	埋め立て	I Cb	22.8	7.9	1.2	—	連歯, 右, 後歯摩耗
373	埋め立て	I Cc	24.9	9.0	2.0	—	連歯, 右, 後歯摩耗 鼻緒残
374	埋め立て	I Cd	24.3	7.6	1.4	—	連歯, 右, 後歯摩耗 穴径4mm 止め具有り (敷物?)
375	埋め立て	I D	24.4	8.0	1.8	F-b-S	連歯, 穴径3mm 止め具有り (敷物?) 歯間菱形 緒残
376	埋め立て	II B	26.9	8.2	1.5	F-b-S	合わせ 孔無 止め具 しゅろひも有 (敷物?) 左, 後歯摩耗
377	埋め立て	II C	20.1	6.2	0.9	B-b-S	合わせ (ホゾ式) 孔無 止め具有 敷物有 左歯摩耗
378	埋め立て	II Ab	20.7	8.9	2.5	F-b-S	差歯 ホゾ無
379	埋め立て	II Ab	23.4	7.6	4.6	B-b-S	差歯 ホゾ無 右, 前歯摩耗
380	埋め立て	II Aa	22.6	8.1	3.6	B-b-S	差歯 右, 前歯摩耗 ホゾ穴前3後2
381	埋め立て	II Aa	23.6	8.1	3.6	B-b-S	差歯 後歯摩耗 ホゾ穴前3後2
382	埋め立て	III A	24.5	7.8	1.8	—	無歯 孔無 止め具有 敷物有 中折 右歯摩耗
383	埋め立て	III A	24.6	6.9	1.9	—	合わせ 孔無 止め具有 (敷物?)

※穴の分類は、横緒孔が後歯の前にあるものをF-b-S (Front back-support), 後歯にあるものをB-b-S (Behind back-support)とした。

第9表 出土遺物観察表 (木簡) その1

No	出土地点	法量 (cm)			透穴 箇 数	記載文字		備考
		縦	横	厚さ		表	裏	
384	埋め立て	16.4	3.7	0.5	上部1 下部1	国頭間切 楊梅皮六拾斤 奥間村 包七斤	地頭代 邊野喜親雲上 巳六月廿四日 検者 松本親雲上	上下面取

No	出土地点	法 量 (cm)			透穴箇所数	記 載 文 字		備 考
		縦	横	厚さ		表	裏	
385	埋め立て	15.7	3.7	0.7	上部1 下部1	菱刈五右衛門口	十六□□ 三枝引縮式ツ入	
386	埋め立て	16.2	4.0	0.6	上部1 下部(1)	平田武太夫	申 四月十日	
387	埋め立て	11.5	2.5	0.2	上部1	田邊弥左衛門	田邊弥左衛門	左上面取 三隅面取
388	埋め立て	9.0	2.8	0.8	上部1	有□□五左衛門	新納八右衛門	上部面取
389	埋め立て	12.5	1.9	0.1	上部1	伊東吉右衛門	伊東吉右衛門	
390	埋め立て	13.3	2.7	0.4	上部1	押鉢入	□□□□□	
391	埋め立て	15.7	2.8	0.7	上部1 下部1	□□…	二月□□…	
392	埋め立て	19.2	4.2	0.3	右部1	□□□□□…	□□□□□左兵衛 屋号か?	
393	埋め立て	9.2	2.2	0.4	上部2	□坂助左衛門		四隅面取
394	埋め立て	8.8	4.0	0.3	上部1	山ノ 七盃入	山乃 七盃入	四隅面取
395	埋め立て	4.5	6.9	0.6	上部1	□…	□…	四隅面取
396	埋め立て	27.8	7.4	1.2	上部2 下部2	鹿児島□□□□□ 上村半左衛門様竹内善兵衛	庄右衛門荷物	
397	埋め立て	23.4	(2.7)	0.5	右部1	□□□□□…	□□□□□…	上部狭
398	埋め立て	16.5	2.7	0.2	無	小田家儀	小田家儀	湾曲 下部尖
399	埋め立て	11.5	3.1	0.3	右部1 左部2	□□□□□	□□□	左部挟入
400	埋め立て	(10.9)	(2.1)	0.2		□□ □…		
401	埋め立て	(9.3)	2.4	0.2		□□…		
402	埋め立て	(25.3)	(1.4)	0.2	無	□□□□□…		
403	埋め立て	(17.3)	(5.0)	0.3		□		
404	埋め立て	(14.9)	(1.4)	0.2	無	十一月式間傳右衛門	申十月十七日	
405	埋め立て	20.0	2.5	0.4		□ □…	□□□…	
406	埋め立て	24.8	7.0	0.6	上部2 下部2 左部4	□□…	□□□□□…	三辺面取 箱物蓋
407	埋め立て	15.0	24.0	0.7	無	落書き (人物か?)		
408	埋め立て	36.1	17.8	0.8	上部1 下部1	□□□ 婆娑羅帝婆 護摩底悉 摩底悉		人形木簡 上部削り 下部面取

第10表 出土遺物観察表 (硯) その1

No	出土地点	法 量			隅	色 調	石 質	備 考
		長さ	幅	厚さ				
409	猪飼央	14.0	11.8	1.6	角	暗灰色	滑石	(裏) 天保八年 西六月日 千竈代土 細線で文字の落書き (表) 磯と波しぶき 右上に穴
410	猪飼央	18.6	7.8	2.3	角	暗赤褐色	千枚岩	(裏) 中村八兵衛
411	猪飼央	20.8	10.2	4.1	角	暗赤褐色	千枚岩	

No	出土地点	法量			隅	色調	石質	備考
		長さ	幅	厚さ				
412	猪飼中央	14.9	6.2	1.8	角	青灰色	千枚岩	
413	猪飼中央	—	8.5	2.5	角	青灰色	千枚岩	
414	猪飼中央	21.2	12.1	3.4	角	暗灰色	頁岩	
415	神明宮跡	—	8.1	2.6	角	茶褐色	頁岩	
416	下屋敷	—	5.6	1.9	角	赤灰色	頁岩	(裏) 赤間関 裏面に刻み文字

第11表 出土遺物観察表(砥石・紡錘車)

No	出土地点	種別	法量			石質	形態	加工痕	備考
			長さ	幅	厚さ				
417	抱真院跡	砥石	10.3	4.7	2.8	頁岩	長方形	両面、側面とも磨り有り	
418	猪飼中央	砥石	11.8	5.0	3.7	千枚岩	長方形	両面、側面とも磨り有り	
419	抱真院跡	砥石	12.8	6.2	1.8	砂岩	長方形	両面、側面とも磨り有り	
420	抱真院跡	砥石	12.7	5.7	3.6	頁岩	長方形	裏面にスリキズ有り	
421	神明宮跡	紡錘車	長 3.2	径 2.0	孔径 0.7	—	—	双穿状	
422	神明宮跡	紡錘車	長 4.3	径 2.1	孔径 0.8	—	—	双穿状	
423	猪飼中央	紡錘車	長 4.9	径 2.2	孔径 0.9	—	—	双穿状	
424	神明宮跡	紡錘車	長 4.0	径 2.9	孔径 1.2	—	—	双穿状	
425	神明宮跡	紡錘車	長 4.9	径 3.4	孔径 1.5	—	—	双穿状	
426	神明宮跡	紡錘車	長 4.8	径 3.2	孔径 1.4	—	—	双穿状	
427	神明宮跡	紡錘車	長 5.0	径 3.4	孔径 1.4	—	—	双穿状	

第12表 出土遺物観察表(瓦)その1

No	出土地点	種別	色調	文様	計測値(cm)			備考
					径	長さ	厚さ	
428	落ち込み	軒丸	黒褐色	連珠紋は11 三つ巴は左巻き	13.0	(3.0)	2.5	
429	暗渠石端	軒丸	黒褐色	連珠紋は13 三つ巴は左巻き	13.7	(3.2)	2.7	
430	猪飼中央	軒丸	黒褐色	連珠紋は11 三つ巴は左巻き	(11.0)	(—)	2.8	
431	—	軒棧丸	黒褐色	連珠紋は11 三つ巴は左巻き	9.2	(8.6)	2.2	
432	暗渠	軒棧丸	黒褐色	連珠紋は11 三つ巴は左巻き	(8.8)	(13.6)	(2.6)	
433	落ち込み	軒棧丸	黒褐色	連珠紋は13 三つ巴は左巻き	8.8	(4.3)	2.1	
434	神明宮跡	軒丸	黒褐色	連珠紋は13 三つ巴は左巻き	8.6	(4.8)	1.7	

No	出土地点	種別	色調	文様	計測値(cm)			備考
					径	長さ	厚さ	
435	—	軒棧丸	黒褐色	中央に花形、脇はY字状、唐草は短縮、子葉は先端Y字状	垂れ長さ4.0、文様長さ2.4、体部厚さ2.9幅(17.0)、長さ(15.0)			○の刻印
436	—	丸瓦	淡泊褐色		(13.7)	14.0	2.0	
437	—	丸瓦	黒褐色		(14.5)	(7.5)	1.8	
438	—	樽瓦	黒褐色		(16.0)	(11.2)	2.3	
439	暗渠黒Ⅱ	樽瓦	黒褐色		(20.5)	(21.0)	3.3	穿孔部に釘破片有り
440	—	平瓦	黒褐色		(20.6)	25.0	2.0	穿孔(未貫通) ○の刻印

第13表 出土遺物観察表(土製品・メンコ等) その1

No	出土地点	法量(cm)		素材	色調	備考
		径	高さ			
441	神明宮跡	約2.2	約0.6	陶器(サツマ焼)	黒褐色	
442	抱真院跡	約3.4	約0.6	陶器(サツマ焼)	黒褐色	
443	猪飼中央	約4.1	約0.7	磁器	青灰色	
444	暗渠右端	約4.3	約0.7	陶器(サツマ焼)	黒褐色	
445	神明宮前	約4.8	約0.8	陶器(サツマ焼)	茶褐色	無釉
446	猪飼中央	約4.6	約0.6	陶器(サツマ焼)	黒褐色	
447	猪飼中央	約5.6	約0.8	陶器(サツマ焼)	黒褐色	
448	神明宮跡	約3.8	約0.6	陶器(サツマ焼)	黒褐色	
449	下屋敷	約3.3	約1.0	陶器(サツマ焼)	黒褐色	
450	抱真院跡	約4.2	約0.7	陶器(サツマ焼)	灰白色	
451	猪飼中央	約4.6	約0.8	陶器(サツマ焼)	茶褐色	
452	神明宮前	約4.6	約0.7	陶器(サツマ焼)	黒茶褐色	口唇部有り
453	猪飼中央	約5.2	約0.8	陶器(サツマ焼)	黒褐色	
454	暗渠南	約5.2	約1.1	陶器(?)	茶白色	
455	神明宮前	約7.0	約1.6	陶器	緑褐色	蓋転用
456	神明宮前	約7.0	約1.6	陶器	灰褐色	蓋転用
457	猪飼中央	約7.5	約1.6	陶器	緑茶褐色	蓋転用
458	—	約8.7	約1.7	陶器	黒褐色	壺orカメ転用、底部
459	—	5.2	1.3	陶器	黒茶褐色	底部、墨書有り、花押し(?)、突起部一ヶ所、碗転用
460	落ち込み	6.5	3.5	磁器	青白色	底部、突起部一ヶ所、碗転用
461	落ち込み	8.4	4.0	磁器	青白色	底部、突起一ヶ所、碗転用
462	—	7.3	1.7	磁器	青白色	底部、碗転用
463	—	8.0	5.9	磁器	青白色	底部、突起一ヶ所、皿転用
464	落ち込み	8.1	1.1	磁器	青白色	底部、突起一ヶ所、碗転用
465	落ち込みⅡ	9.2	5.1	陶器	灰白色	底部、突起一ヶ所、碗転用
466	落ち込み	9.5	5.8	磁器	青白色	底部、八角形、碗転用
467	落ち込み	12.0	2.6	磁器	青白色	底部、八角形、碗転用
468	猪飼中央	10.4	1.8	磁器	青白色	底部、八角形、碗転用

No	出土地点	名称	法量(cm)		備考
			高さ	幅	
482		地藏(台付)	9.4	3.8	頭部・大部分破損
483		地藏(台付)	9.6	3.6	頭部破損
484		女性頭部	6.4	3.3	
485		男性頭部	4.3	2.6	
486		唐人?琉球人?	3.6	3.1	
487			5.25	3.15	
488		少年	5.0	3.15	
489		狛犬頭部	4.7	3.6	
490		女性頭部	6.15	6.35	髪 髪結い
491		大黒天	2.9	4.15	
492		子供頭部	2.2	2.0	
493		女性頭部	2.0	1.8	
494		小人形	3.0	1.8	
495		ひな人形?	2.8	2.4	台付
496		ひな人形?	2.45	2.45	台付・帽子破損
497		ひな人形?	2.65	2.05	台付
498		武者	2.9	1.6	
499		武者	2.8	1.7	
500		大黒天?	2.3	1.7	脚部破損
501		大黒天?	2.5	2.2	頭部破損
502		毘沙門天?	3.05	1.65	
503		毘沙門天?	3.3	1.5	
504		力士?	3.25	1.7	
505		力士?	3.35	1.7	
506		力士?	3.5	1.8	右脚破損
507		僧りよ	3.55	1.4	
508		灯籠?	1.7	1.8	
509		人形の帽子部分	1.05	1.85	帽子のみ残存
510		狛犬	2.95	2.6	台付・右向き
511		狛犬	2.85	2.5	台付・右向き
512		狛犬	2.8	2.5	台付・右向き
513		狛犬	3.1	2.55	台付・左向き
514		狛犬	3.0	2.3	台付・左向き
515		狛犬	1.65	2.55	台付・左向き頭部破損
516		どろメンコ		2.1	厚み・0.8cm 巴文様
517		狛犬	1.65	2.6	台付・右向き・頭部破損・鉄器付着
518		大黒天?	2.7	1.9	
519		軍人(東郷元帥?)	5.0	1.8	台付・頭部破損

No	出土地点	名称	法量 (cm)		備考
			高さ	幅	
520		頭部	3.4	3.9	頭部のみ残存・表半分のみ
521		男性器	2.2	0.9	表半分のみ
522		家形	2.5	3.6	
523		土鈴	(5.2)	5.2	
524		土鈴	(4.1)	3.8	頂部につまみと穴有り
525		土鈴	(4.1)	3.8	頂部につまみと穴有り
526		土鈴	4.1	3.5	頂部につまみと穴有り
527		鳩笛	4.6	6.3	白色粘土
528		鳩笛	4.4	6.6	白色粘土
529		鳩笛	5	6.6	白色粘土

第Ⅳ章 ま と め

当遺跡は鹿児島市浜町，旧国鉄官舎跡地・営林署跡地に所在し，文政年間『薩藩沿革地図』（第2図その1），天保14年『薩藩沿革地図』（第2図その2）の鹿児島城下絵図や安政6年『旧薩藩城下絵図』（第2図その3）・『三国名勝図会』の文献資料には，「抱真院」・「神明社」・「猪飼中央殿御借地」・「島津山城殿下屋敷」等の記述がある。

調査の結果，近現代の建造物等による改変にもかかわらず，埋め立て地に構築された藩政時代の「抱真院」・「神明宮」・「猪飼中央殿御借地」・「島津山城殿下屋敷」の跡等が発見された。「抱真院」跡には庫裡等の住房に関する建物を想定する5間×4間(以上)の総柱建物跡と，西側に神明社との境界にあたる縁石列，「神明宮」跡からは直線的に並ぶ東側・西側に面した土塀にあたる柱穴列，「猪飼中央殿御借地」跡からは木簡の木札が出土した角井戸，島津山城殿下屋敷との境界は根石に支柱を伴う長さ約75m，幅約50cmの布掘り遺構，「島津山城殿下屋敷」跡からは縦10,8m，横約7mの布基礎からなる建物跡の遺構を発見した。これらの調査成果を基に文献資料との照合によって，天保年間の鹿児島城下絵図の屋敷割を確認することが出来た。

藩政時代の浜町

調査地の浜町周辺は，元禄年間には上方築地，祇園前築地のちは神明社前築地(島津家列朝制度)と呼ばれ，寶永年間になると祇園前築地は新築地に改められる(古記・三州御治世要覧)。また『三国名勝図会』(資料1～3)によると，坂元村向築地の北西部分にあたり，寶永3年(1706)より少し前に，国分等で干拓地を開田した島津吉貴が埋め立て造成し，寶永3年(1706)島津吉貴が武蔵国江戸芝神明宮を本社に，祭田30石を付し，安養院前住盛寿を導師として勧請(他の神社から神様を移すこと)した神明宮の境内周辺であると推定される。中心は神明宮の境内で，神明宮は浄国によって造られ，伊勢神社の内宮天照皇大神，外宮の豊受大神等を祭ったといわれる。当時神社境内には別当寺が置かれるのが当然で，真言宗徑圓山寶就寺大乘院の末寺として神応山金胎寺がその西側に置かれ，島津吉貴が寶永3年(1706)浄国安養院29世の盛寿に命じて神明宮を勧請し，盛寿が開山となり翌年盛寿が初代住職となった。さらに寶永5年に寺を抱真院と改めた。抱真院は伊作の海造院

本寺の三本寺を移築した寺院で、本尊は大日如来である。田禄は百一五石で門前が設けられた。その後、東側は重富島津家と今和泉島津家の各下屋敷いわゆる浜屋敷となり、下屋敷の南側に安永2年(1773)琉球国波上山護国寺弁才天を祀り、祇園神社付近にあった弁才天廟が移され周辺は弁才天の境内で、芝居小屋が置かれたりした。

文政年間(1820)と天保14年(1843)『薩藩沿革地図』の「鹿児島城下絵図」によると文政年間には神明宮の東は、猪飼中央御借地の他は松林であるが、これは『三国名勝図会』の中に「社庭の左に、神馬厩」(資料1)があるというのに関連し、猪飼中央殿の借地は元来、神馬厩が含まれていたものと推定される。即ち西から抱真院・神明宮・神馬厩となる。天保年間には神馬厩というより東側の重富屋敷の建物表示と酷似し、島津山城殿下屋敷との関連が窺い知れる。

なお、抱真院には鐘突堂があり、神明宮と抱真院の屋根は類似するもので、神明宮は南向き、抱真院は東向きで、塀と門の位置等正確に書かれている。神明宮と抱真院の境の塀・神明宮と東側の島津山城殿下屋敷と関連すると考えられる境の塀、そして門前との間の道に向いた塀が重視されていたことが推定される。

島津山城殿とは、別名重富島津に由来する。重富島津は島津本宗家22代継豊の元文2年(1737)21代吉貴の次男末川忠紀が、旧越前家の文書と系譜を与えられて名跡を継ぎ、越前島津家が復活したものである。また現在の鹿児島県始良郡始良町脇元の地を越前の旧領重富に改名したことにより、同家は重富家とも呼ばれ、1万4千石を領して島津一門の筆頭となった。

船着場は、猪飼中央御借地と林地の北側に位置する。稲荷川右岸に舌状に突き出した長さ約10m(推定)、幅約7～8m(石垣5段目)、高さ約4mの規模で、縁辺部は12段の階段状石積みで構成されている。古絵図のものと同形状、構造が類似している。調査で確認された船着場が位置する場所の川幅は、船着場が突き出した部分だけ狭くなっており、後世の護岸改修工事時では、船着場本体は除去せず原形を残し、バックされた状態で護岸石垣を構築し、現在に至っている。なお、古絵図の船着場は当地より下流側に記述され、その位置関係にズレがみられ、古絵図に示されたものであるかは定かではないが、船着場が存在していた事実は明らかである。

出土遺物

出土遺物には、肥前系や在地系(平佐窯系)の染付碗や皿・猪口などの磁器や白・黒薩摩焼(堅野冷水窯, 苗代川, 山元窯)の碗, 皿, 仏具, 鉢などの陶器を主体に、琉球焼の陶器, さらに外国産(清朝, オランダ)の陶磁器, 硯や砥石等の石製品, 煙管・古銭の金属製品や瓦, 墓石, 玩具等をはじめ、漆碗・下駄・曲げ物等の木製品や木簡, 植物遺体多数の遺物が出土した。

磁器は、肥前磁器を主体とするものである。肥前磁器の編年研究については、大橋康二氏によって精力的に研究がなされ、江戸時代を通して明確に時期区分を作り上げている。

器種ごとに碗, 鉢, 皿, 蓋, 仏飯器, 香炉, 花瓶, 急須, 油壺, 散蓮華の11類からなる。碗類は小坏と碗に分類した。小坏(66, 67, 70, 73, 75, 76)は17世紀後半～19世紀中葉, 小碗(57, 65, 68, 69, 71, 72, 74, 82～93)は17世紀後半～19世紀中葉, 中碗(1～13, 15, 18～23, 26, 28, 81)と大碗(29)は18世紀後半～19世紀前半。鉢は稜花鉢(53～56は型打整形の角鉢)で18世紀後半～19世紀前半, 中鉢(17は青磁, 58は端反口縁)である。猪口はソバ猪口と紅猪口があり, ソバ猪口(94～97)は18世紀後半～19世紀前半と紅猪口(77～79は型押整形)で19世紀初頭と思われる。。皿は小皿(30～35, 50, 46は稜花皿で, 34

には「大明年製」の銘と見込みに蒔蒨印有り), 中皿(34~37, 43, 45, 47, なお35~37の見込みには蒔蒨印有り, 45は輪花皿), 極小皿(49は唐草型紙摺り整形), 五寸皿(64), 大皿(44)で18世紀中~19世紀前半と角皿(51, 52で51には「富貴長張」の銘が有り1650年の作品である。蓋類(59~63, 104~111)と蓋物(98~103)は17世紀末~18世紀後半か。仏飯器(112~117), 香炉(118), 花瓶(119)急須(120), 油壺(121), 散蓮華(122)等は, 17世紀後半~19世紀初頭にかけてのものと思われる。なお, 中碗の(5, 6, 27, 29), 稜花皿(46), 中皿(48), 蓋(59, 61, 63)は, 在地の南京皿山窯のいわゆる肥前系の平佐窯の所産と推定される。

陶器については, 薩摩焼は慶長のころ, 朝鮮からはるばる連れてこられた陶工たちによって作られた雑器と独裁の座にあった藩主の嗜好, 政策をそのまま反映した作品からなる。歴代の藩主は窯業に力を致し, 陶工を他国に派遣して陶技陶法を伝習させた。その結果, 陶器窯も磁器窯も築かせ黒物(くろもん・黒薩摩)と呼ばれた質実剛健な日用雑器が生産され, 一方, 白物(しろもん・白薩摩)といわれた藩主好みのもことから, 錦手や鼈甲焼の鑑賞陶器, 鮫肌焼等特異な陶法も発明されて, 薩摩の古陶磁は他国に類をみない変化と複雑性を秘めている。

薩摩焼の古窯址は50数力所に及んでいるが, 白薩摩については, 17世紀前半から創業された藩主専窯である豎野・冷水系の白薩摩の碗や皿・蓋・猪口・仏飯器・香炉・仏花瓶・鬘盥と三島手写(130)の壺, 宋胡禄写の蓋(231)等がある。稲荷窯系には千鳥印(123~126, 181)を施す碗と乗燭(180~185)がある。褐釉陶器で1667年開窯, 1167年廃窯の山元窯の碗や皿・灯明皿台, 1668年を開窯とする龍門司焼系の二彩の鉢(241)や鮫肌技法の壺(220)・油壺(260, 208), 17世紀中頃の元立院窯と想定される仏花器(211)がある。210は埋立て地から多数の木器等とともに出土した白薩摩豎野・冷水窯系の鬘付盥(整髪の際, 五味子を水にしたして作った整髪料を入れ櫛を浸す化粧具)で, 裏面に「享保十三年□□□□」の文字が墨書で銘記されている。黒薩摩は苗代系統のもので, 串木野窯に源を発している。この窯はいわゆる黒物の純然たる日常雑器を焼いた民窯である。主として猪牙(蓋付き), 壺, 挿鉢, 半胴甕等の雑器が作られている。捏鉢(248)には貝目みられる。貝目のある薩摩焼は一般に17世紀代と考えられているが, この頃の初期薩摩焼でも特に, 苗代川窯系(元屋敷窯, 堂平窯等), 山元窯において使用例が確認されている。

また, 壺(222), 蓋(232), 土瓶(238), 甕(252~254)は琉球焼, さらに外国産陶器も出土している。259はオランダ染付のマーストリヒト P・レグウーの転写皿である。見込みにコバルトブルーの釉のじみで染付楼閣と樹木の図柄を描く。裏面には「・ECHINA」, 「・LLOW」の釉文字と「P.REGOUT 19 MASTRICHT」を印版でマークしている。19世紀頃と思われる。中国清朝の磁器には, 皿(260・262・268), 小碗(263), 碗(264~266), 猪口(269・271・272), 鉢(273)の染付けと, 白磁の中碗(274), 猪口(270)があり, 18世紀後半~19世紀中葉。橋口亘氏は「薩摩出土の清朝磁器」の中で, 薩摩地域における清朝磁器の出土は知覧町南別府城跡をはじめ鶴丸城跡など21ヶ所にのぼり, その分布は城下町のあった鹿児島市内に集中するとし, また, 薩摩在地産磁器との関わり, 長崎・琉球を含めた貿易流通伝搬の関係を詳しく述べている。

千竈氏の銘を有する硯について

409の硯は猪飼央殿御借地から出土したもので, 滑石製でパレット状の小型の硯である。表には磯の岩に叩きつける波しぶきと泡を装飾する。周縁は丸ノミの加工具痕を装飾として残している。

裏面には「天保八年 酉 六月日 千竈氏」の銘が彫られ、年号や人名を特定できる資料である。千竈氏は、尾張国愛知郡千竈荘（愛知県名古屋市の市）に興き、桓武平氏時家が千竈荘司となり千竈を称する。千竈氏は北条氏得宗の被官で、薩摩国河辺（現在の川辺）郡地頭代官職・郡司職に補任されている。10代家繁の代に出水郷に移り、12代家度は水引郷（現在の川内市）に移った。14代家俊は薩州島津家断絶後、宮之城へ、その後東郷外城の成立により東郷へ、更に大村（現在の祁答院町）に移っている。また16代家行から養子時蔭が分家し、18代時章の代に「家」の字の使用が禁止されたことから、通事を「時」に改めている。（鹿児島県姓氏家系大辞典）

木簡について

木簡は計23本出土した。本県において木簡がまとまって発見されたのは初めてである。木簡は上下に紐を通す小穴を有す荷札・付札の類である。358「菱刈五右衛門」や386「平田武太夫」等人名を表すもの、品物を表す390「鉢」、数を示す384「七盃」がある。384の木簡は、表面に「楊梅皮六拾斤 奥間村 国頭間切 包七斤」、裏面に「巳 六月廿四日 地頭代 邊野喜親雲上(印) 検者(見?) 松村親雲上」と銘記され、琉球との関連性が浮かび上がってくる。

ところで、国頭間切は、沖縄本島北端に位置する現在の国頭村に由来し、国頭間切奥間村ほか辺土名・邊野喜など15か村と、康熙12年(1673)に大宜味間切に編入された11か村とのちに他村の一部となる4か村の計30か村、後に15か村となる。国頭間切の間切番所は、はじめ浜村に置かれたが、雍正10年(1732)地理的に不都合があるとして奥間村に移した(球陽尚敬王20年条)といわれる。また、地頭代 邊野喜親雲上(へのきペーちん)については、国頭間切の項に「米四石六斗四升八合三勺三才 地頭代邊野喜親雲上」とある(『沖縄県史資料篇第12巻沖縄県関係各省公文書I』「本県下各間切各島夫地頭以下役俸調書」)、また検者については、琉球の正史である『球陽』の尚泰王六年(1853)の項に、『球陽』1866号記事 尚青12年(1846=天保3年)や、『球陽』1957号記事 尚泰6年(1853=嘉永6年)に「検者」の表記が登場する。

楊梅皮とは「ヤマモモ」のことで、樹皮は漢方薬(悪瘡や打撲の鎮静、皮膚病・離尿)や茶色の染料に使われるという(『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社)。ヤマモモは鬱金と同様、琉球王府の禁制品で、自由販売は出来ない専売品であるとされ、国頭間切では島津藩の専売品の鬱金栽培が義務づけられた。なお、漢方薬は薩摩藩の重要な財源のひとつで、専売品の楊梅皮が琉球王府から島津藩へ上納されていたことが想定され、品名・場所・人名が明かとなった貴重な考古資料である(池田栄史琉球大学教授、岸本義彦・小野まさ子沖縄県文化振興会公文書館のご教示による)。

木簡の出目によって薩摩と琉球の交易(専売品である楊梅皮が琉球王府の管轄のもと、島津藩に上納されていたことが木簡によって証明された)を具体的に示す考古資料となった。

408は角井戸の底から出土した「□□□□婆娑羅帝婆、護摩底悉」の墨書きの人形木簡である。なお、井戸内は全体が砂で埋め尽くされ、底からは丸竹の一部も出土した。

人形木簡の文言について、天照皇大神を祭った神明宮から観請した抱真院は真言宗徑圓山寶就寺大乘院の末寺、本尊である大日如来は密教の世界において最も尊崇され、また大日如来は天照皇大神の本地仏(神本来の姿である仏や菩薩)であり、真言密教との係わりの中で井戸を破棄した時のお呪いの札として埋納されたものと推定される。

浜町遺跡の発掘調査では、藩政時の鹿児島城下の様子を文献資料との比較・照合によって多大の

成果を得ることができた。しかしながら問題がないわけではない。文献資料によると浜町周辺の埋め立ては元禄14年(1701)～寶永3年(1706)といわれるが、埋め立て地から出土した考古資料の鬘付盤には墨書で「享保十三年□□□□」の年号(1716)を銘記されている点、『三国名勝図会』の「神明宮」・「抱真院」の遷宮は寶永3年(1706)とする点、木簡の国頭間切「検者」の設置は尚育12年(1846)までは確認出来るがそれ以上さかのぼる資料は不明であるとされる点、また船着場の位置の課題もあり、これらをどのように解釈するのか多くの課題が残った。

浜町遺跡は調査終了後、西田橋が移設復元され、祇園之洲に移設復元された玉江橋・高麗橋と一体となって、平成12年5月に石橋公園として蘇った。

参考文献・資料

- 1 「薩藩沿革地図」鹿児島市教育委員会 昭和10年
- 2 「三国名勝図会」上巻 南日本出版文化協会 昭和41年
- 3 「旧薩藩城下絵図」『日本の市街古図』鹿島研究出版会 鹿児島県立図書館蔵
- 4 五味克夫 鹿児島「旧薩藩御城下絵図」解説1772 鹿児島県立図書館蔵
- 5 井汲隆夫他「内藤遺町遺跡」放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書 東京都建設局新宿区内藤町遺跡調査会 1992
- 6 市田京子 「江戸時代の下駄」考古学と江戸文化 江戸遺跡研究会 1992
- 7 伊藤隆三 「宿場町(富山県桜町遺跡)」季刊考古学 第13号1985
- 8 牧野久美 「増上寺子院群」港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査 1988
- 9 九州近世陶磁学会 「九州陶磁の編年」九州近世陶磁学会 2000
- 10 岡田喜一・矢部良郎 「薩摩」日本陶磁体系16 平凡社 1989
- 11 大橋康二 「古伊万里の文様」理工学者 1996
- 12 橋口 亘 「薩摩出土の清朝磁器」貿易陶磁器研究 NO.19 1999
- 13 野沢 均他 「京橋線八丁堀遺跡」京橋線八丁堀遺跡調査会 1990
- 14 小田静夫他 「飯田町遺跡」飯田町遺跡調査会 1995
- 15 鹿児島県教育委員会 「鹿児島城本丸跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(26)1983
- 16 鹿児島県教育委員会 「鹿児島城二之丸跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(60)1992
- 17 「暮らしの中の薩摩焼」時遊館COCCOはしむれ企画展 指宿市・指宿市教育委員会 国際ソロプチミスト指宿 1996
- 18 大宮司郎 「密教の本」株式会社学習研究社 1992
- 19 「やきもの辞典」光芸出版編 光芸出版 1994
- 20 「沖縄大百科事典」沖縄タイムス社

版 圖



明治5年頃の浜町、鹿児島市街地



明治5年頃の浜町、祇園洲



1. 浜町遺跡遠影(多賀山より)



2. 調査前



3. 抱真院跡遠影



4. 抱真院跡建物跡



5. 抱真院跡建物跡



6. 抱真院跡石塔出土状況



7. 抱真院跡基石出土状況



1. 抱真院跡縁石列と暗梁施設



2. 縁石列検出状況



3. 神明宮跡(ピット列)



4. 猪飼央跡と神明宮跡(ピット列)



5. 布堀り遺構と猪飼央跡



6. 布堀り遺構



7. 布堀り遺構と上水道施設・敷石遺構



8. 重富島津下屋敷建物跡



1. 上水道施設・敷石遺構



2. 船着場と現護岸



3. 角井戸(上部)



5. 船着場



4. 角井戸(下部)



6. 船着場上流先端部



7. 船付場上流先端部



1. 上水道施設・敷石遺構



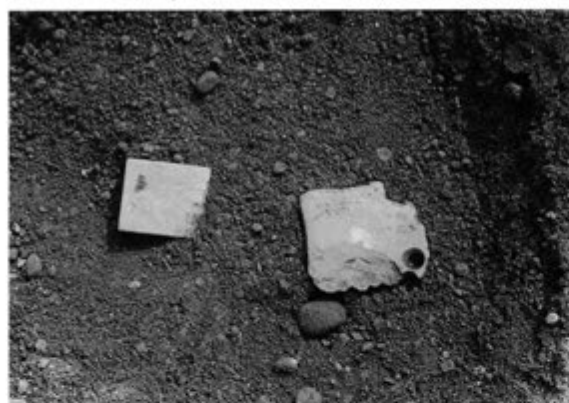
2. 敷石遺構と上水道施設



3. 上水道施設



4. 上水道施設



5. 碗出土状況(右)



6. 遺物出土状況



7. 遺物出土状況



8. 遺物出土状況



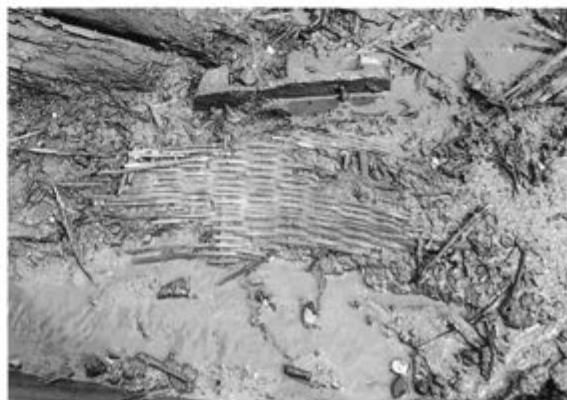
1. 胴木列出土状況



2. 胴木列出土状況



3. 胴木列出土状況



4. 桁出土状況



5.



6. 木製品出土状況



7. 木製品出土状況



8. 木製品出土状況



1. 竹製品出土状況



2. 竹製品出土状況



3. 曲物出土状況



4. 植物遺体出土状況



5. 暗渠



6. 暗渠



7. 暗渠



1. 丸井戸 検出状況



2. 丸井戸 検出状況



3. 丸井戸 検出状況



4. 丸井戸 検出状況

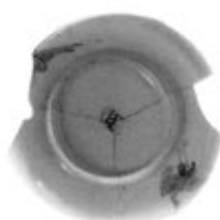
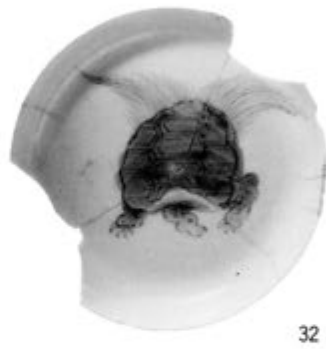
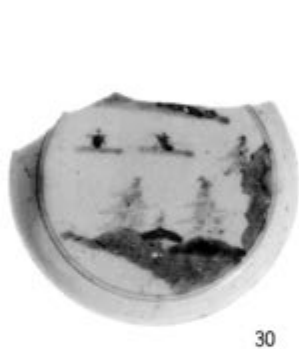
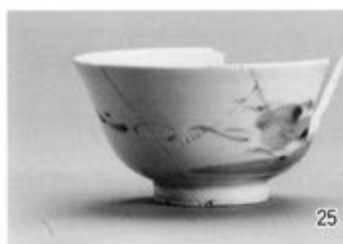


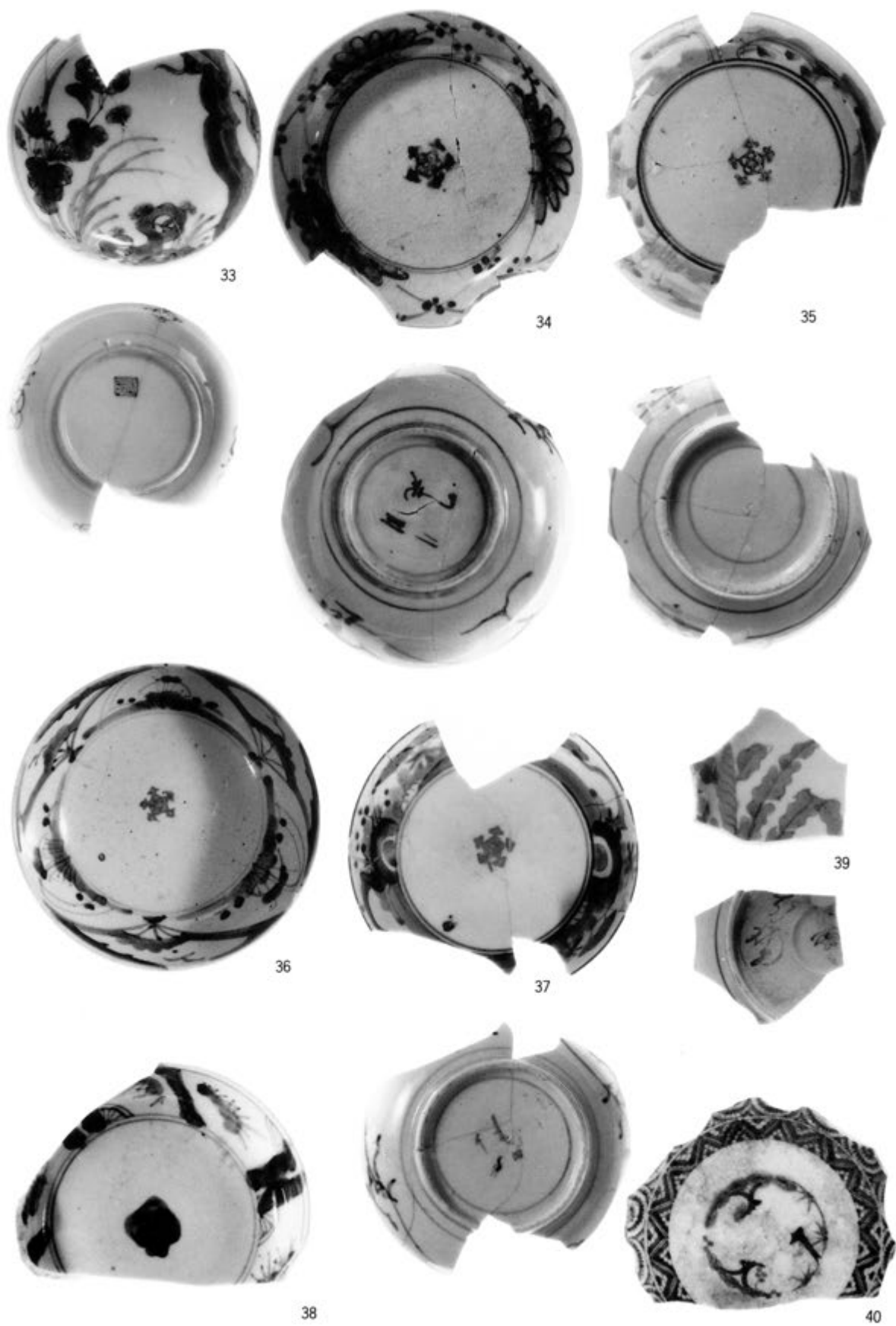
5. 井戸発掘風景

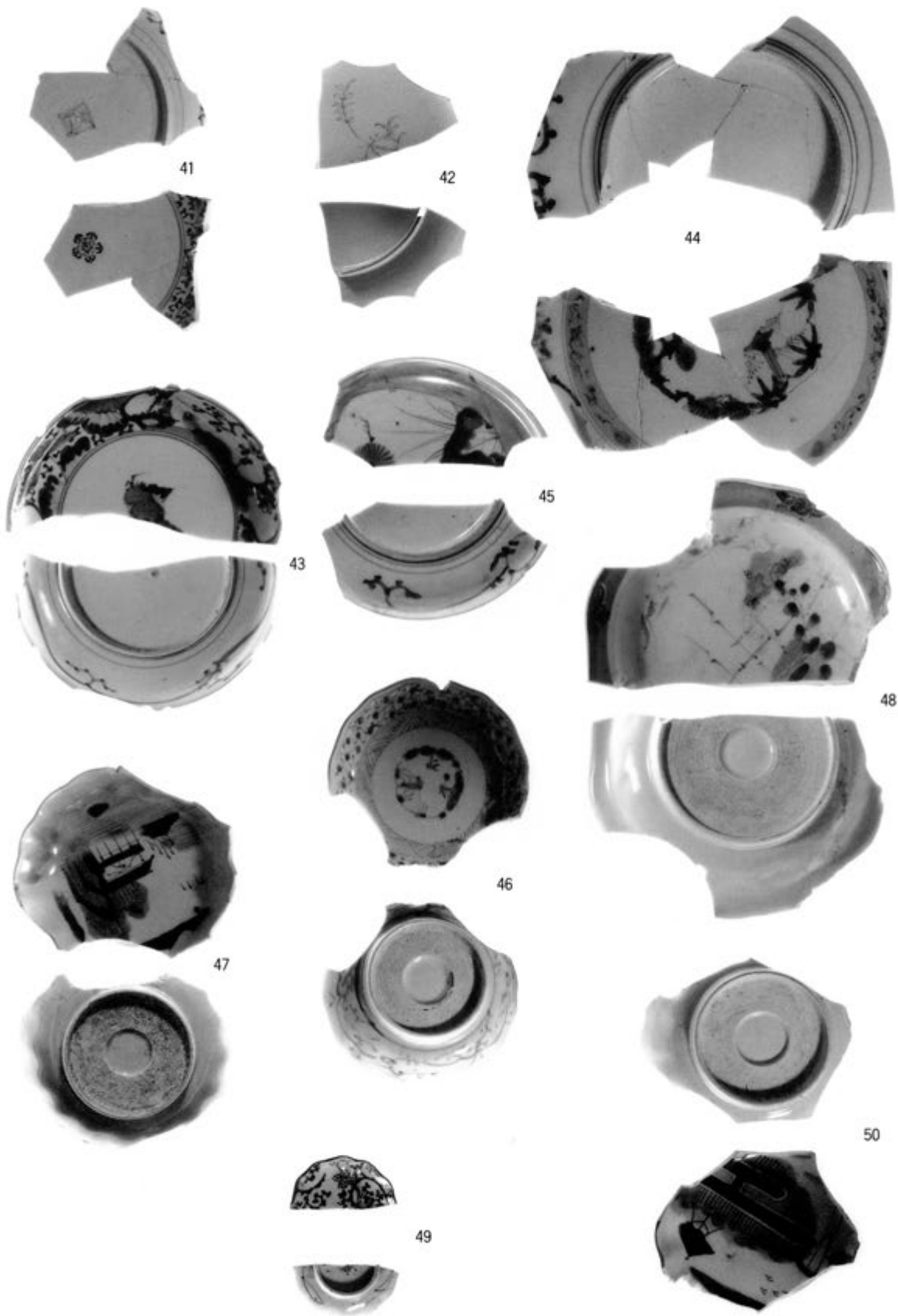


6. 作業員のみなさん











51



52



59



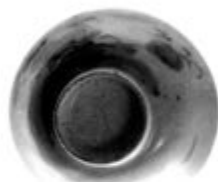
60



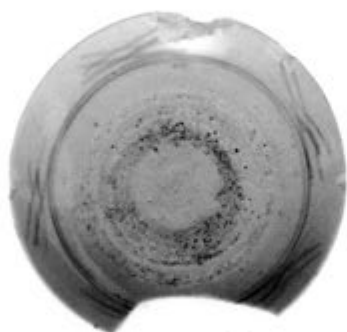
61



62



63



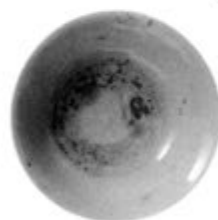
64



65



66



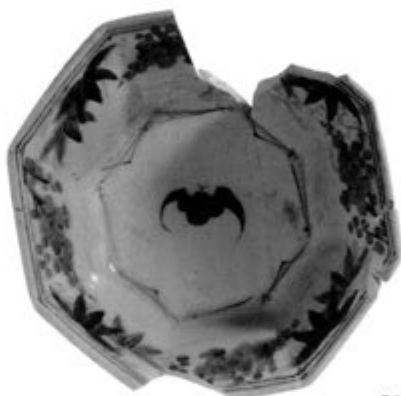
67



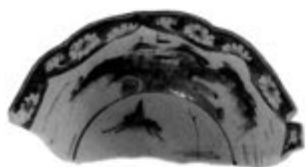
68



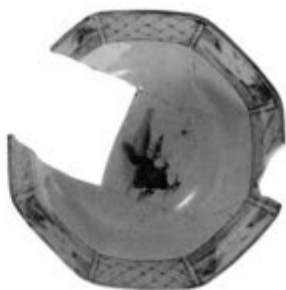
53



54



55



56



57



58







123



124



125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151



152



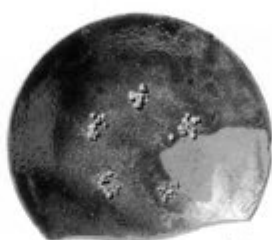
153



154



155



156



157



158



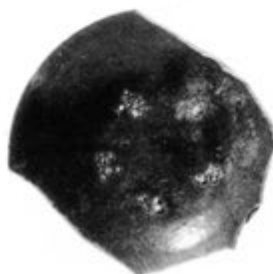
159



160



161



162



163



164



165



166



167



168



169



170



171



172



173



174



175



176



177



178



179



180



181



182



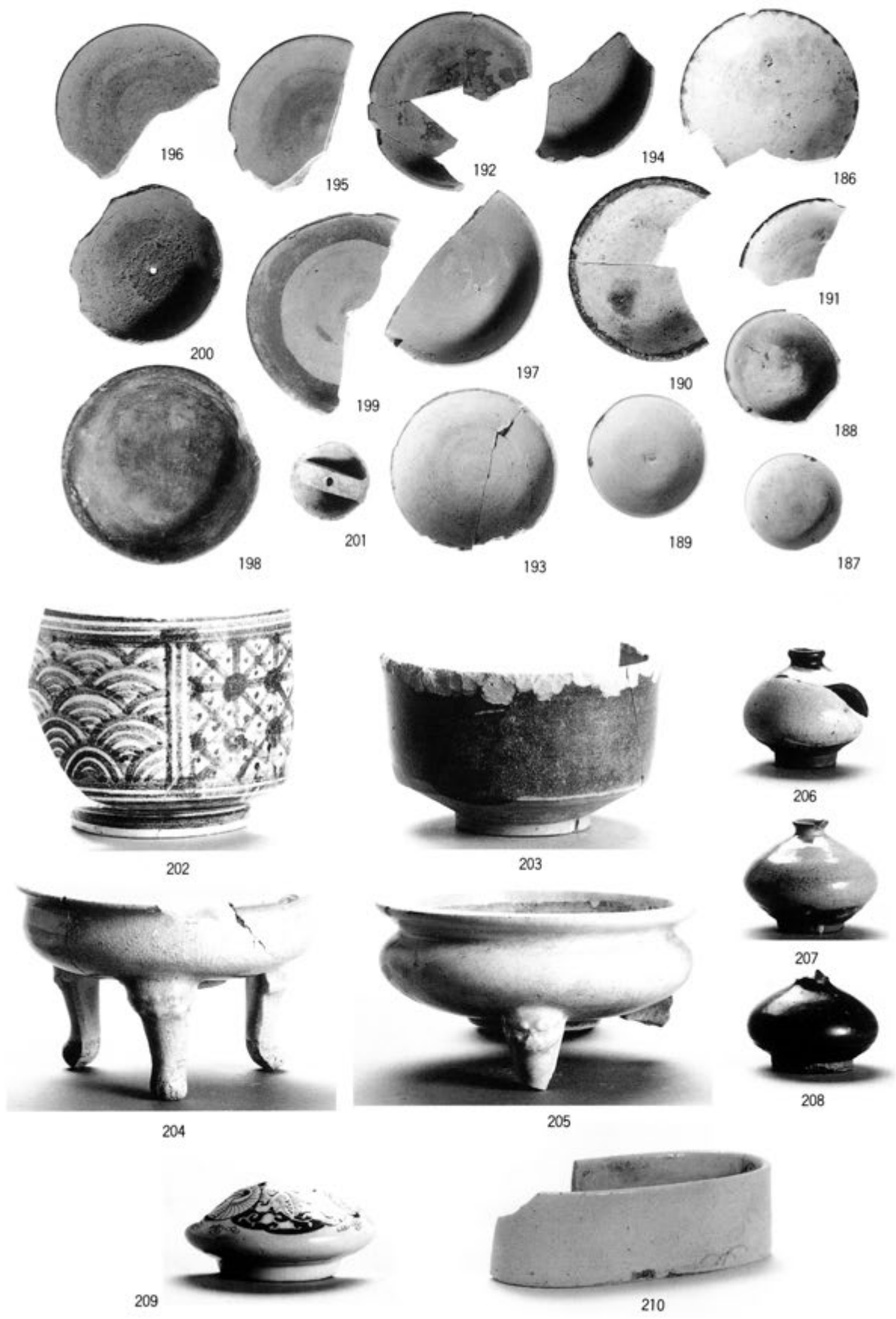
183



184



185





211



212



213



214



215



216



217



218



219



220



221



225



222



223



224



231



230



229



232



227



228



235



226



233



234



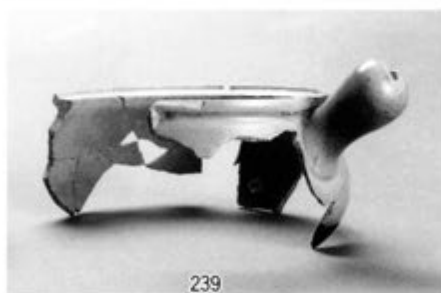
236



237



238



239



240



241



242



243



244



245



246



247



248



249



250



251



252



253



254



255



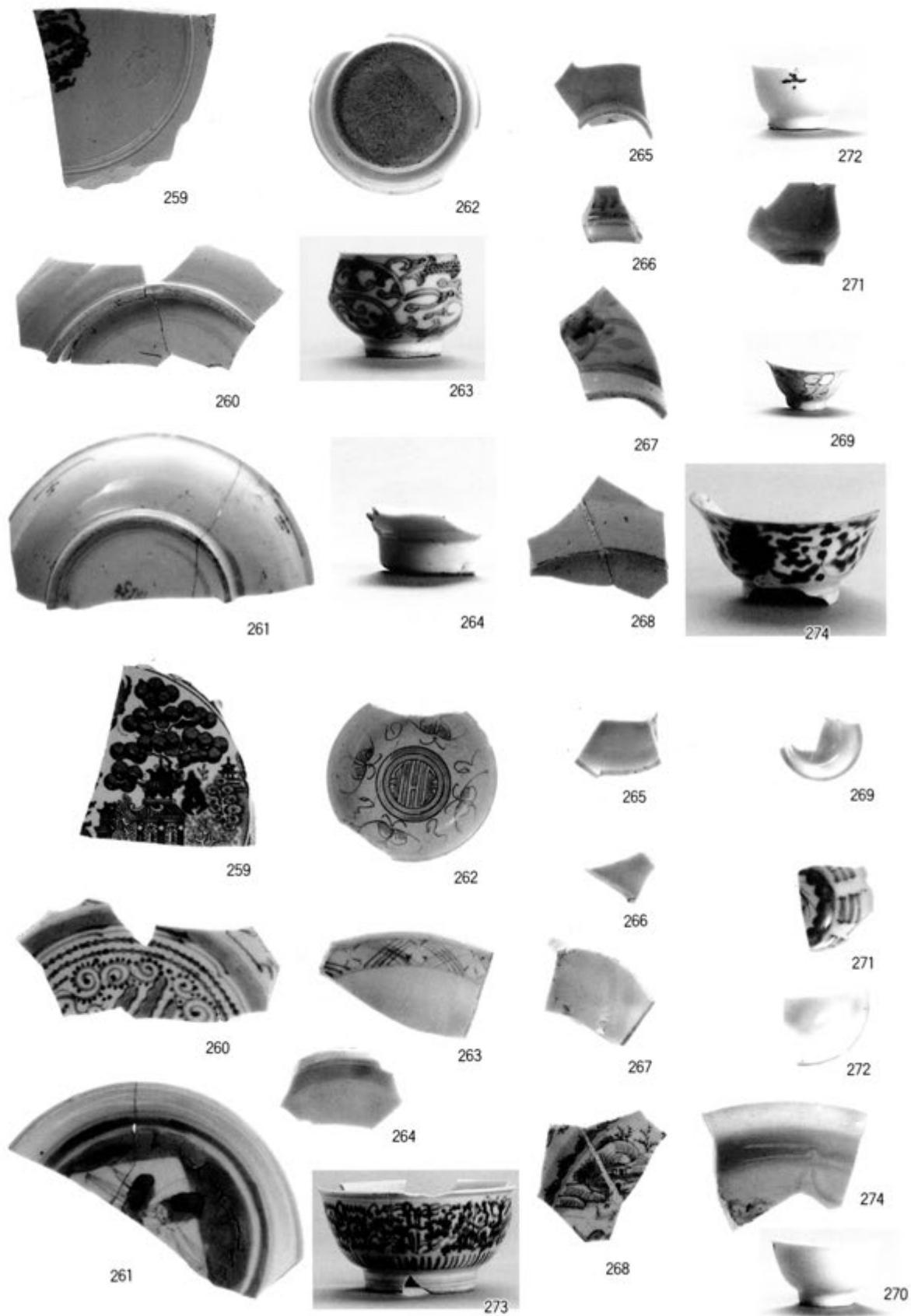
256



257



258











347



348



349



352



355



354



353



351



350



356



357



358



359



360



362



361



363



370



364



365



366



367

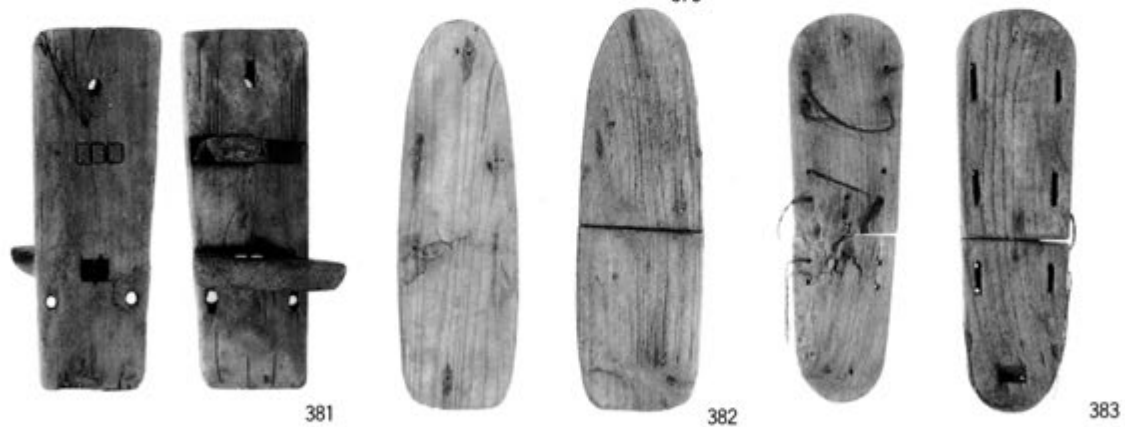
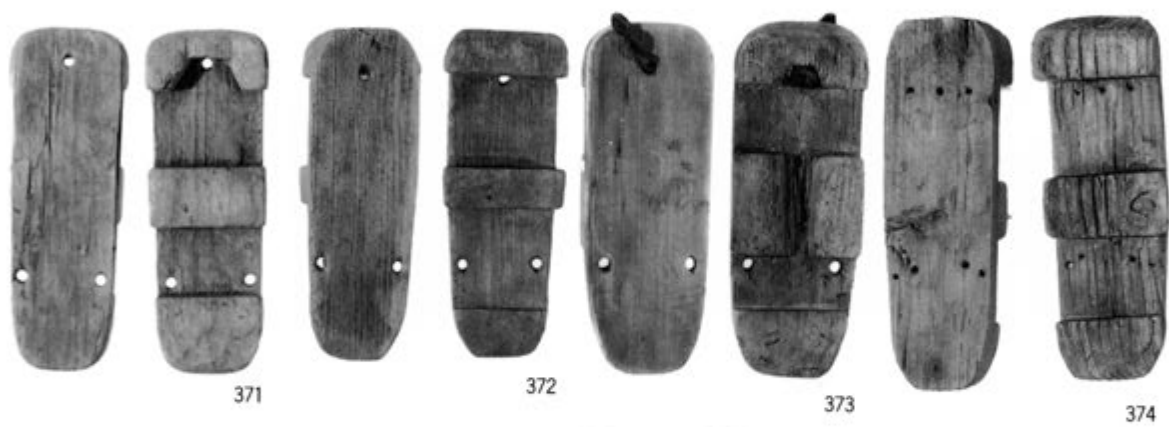


368



369







384



385



386



387



388



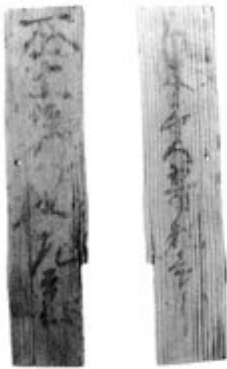
389



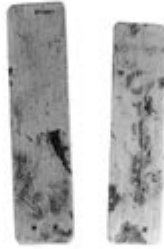
390



391



392



393



394



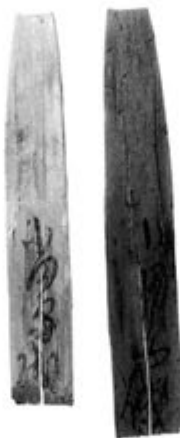
395



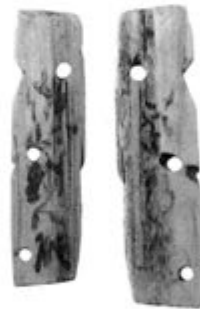
396



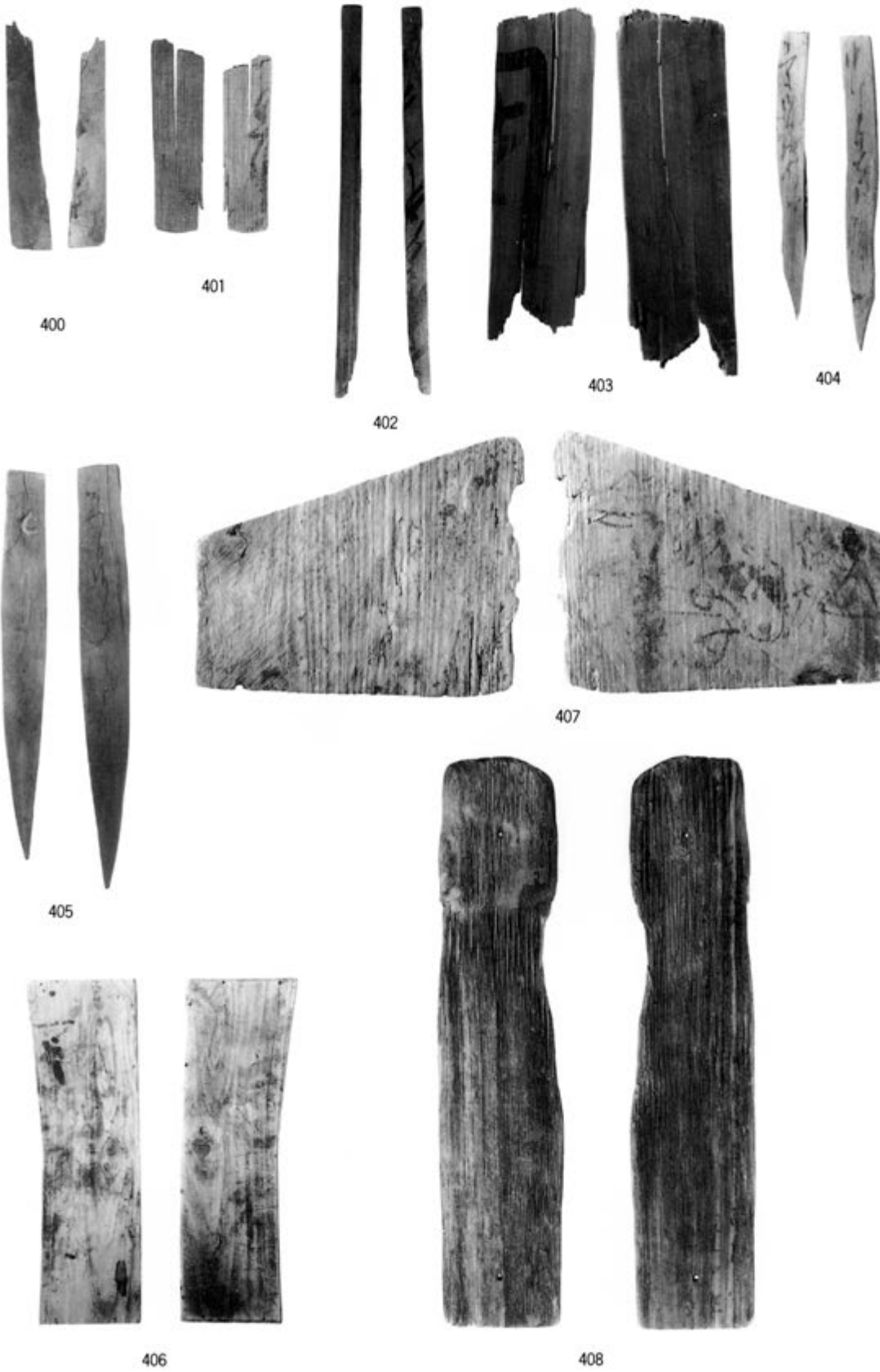
397



398



399





412



416



413



415



409



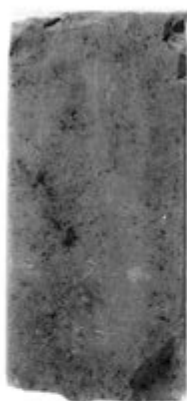
414



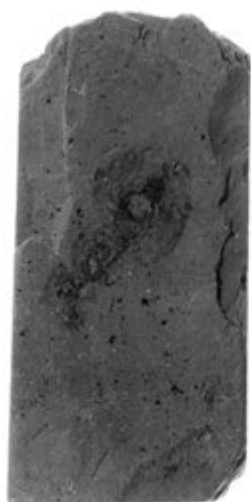
410



411



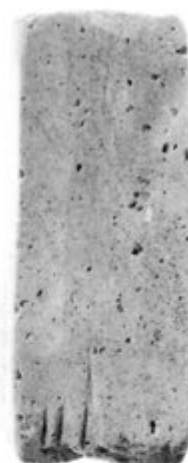
417



418



419



420



421



422



423



424



425



426



427



428



429



430



431



432



433



434



436



435



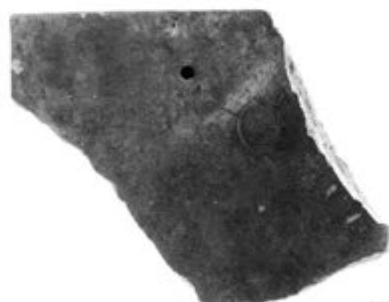
437



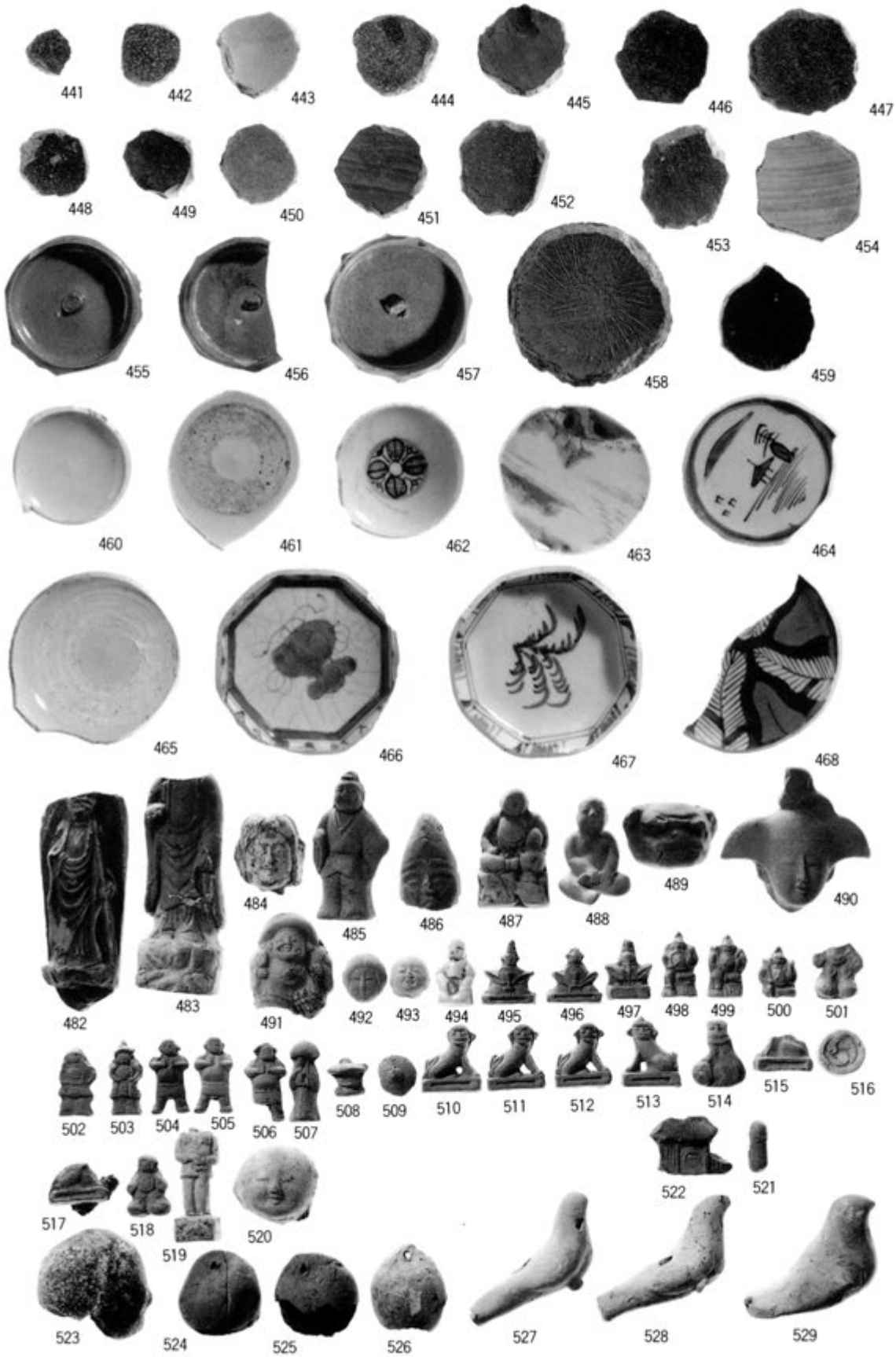
438

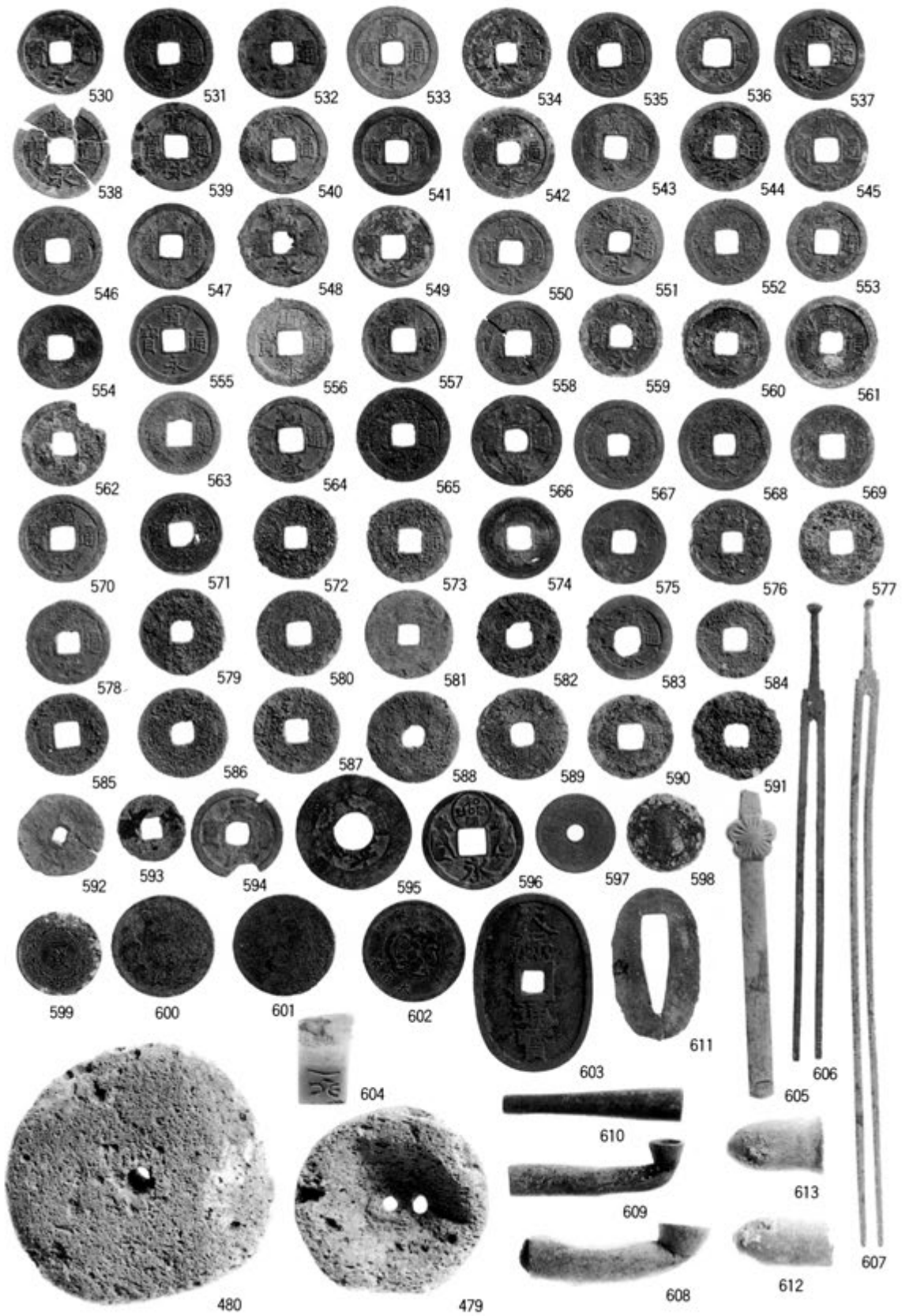


439



440



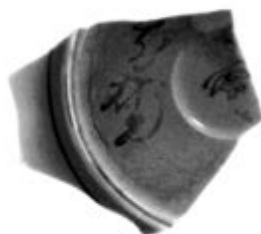




210



138



39



459



(表)

409



(裏)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(25)

浜町遺跡

発行 2000年3月

編集 鹿児島県立埋蔵文化センター

〒899-5652 始良郡始良町平松6252番地

TEL (0995) 65-8787

印刷所 株式会社 トライ社

〒892-0834 鹿児島市南林寺町12-16

TEL (099) 226-0815

